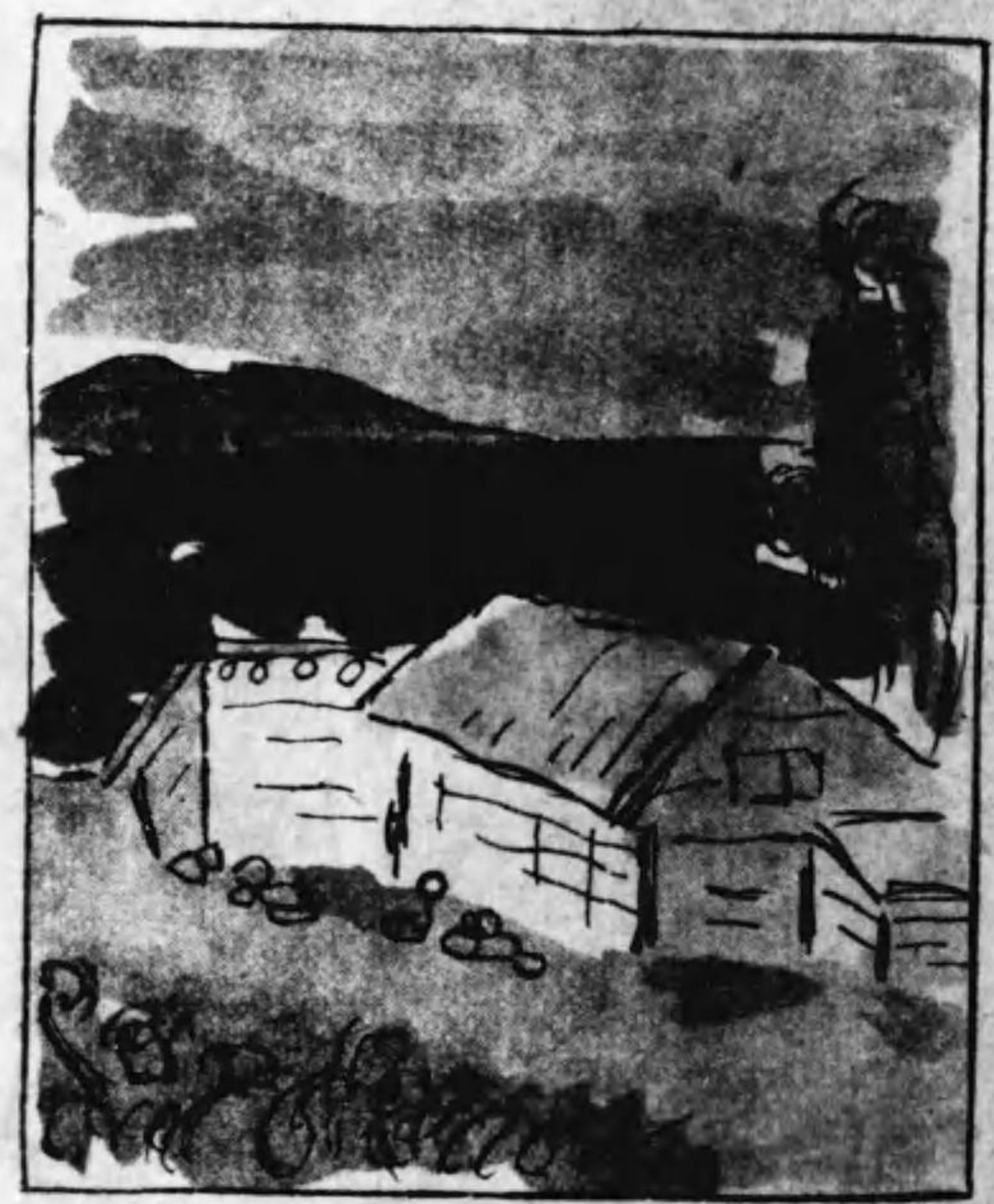


438
203

濱のみぐの實納

本

著 二 洋 藤 佐



0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15

始



特 232
103

實 の み 濱

集 篇 短

二 洋 藤 佐

店 書 堂 松 文



濱ぐみの實

米山といふ山を、村の人達はみな薬師さまと呼んでゐる。これは、米山の頂上に薬師堂があるからであつた。

「ゆこか参らんしよか」

米山薬師……………

と俚謡にうたはれてゐる、あの米山である。

朝夕に、砂丘の松林ごしに、東の空にくつきりと青く仰がれる米山は、村人の生活とは切つても切れぬ關係にあつた。

春蠶が上簇ると、笹の葉で卷いたちまきを持って、まつ先にお禮に上るのは米山の薬師さまであつた。

濱のみぐの實
米山さまに三度雪が降ると、平地にもきつと雪がやつてくると、言ひ慣はしても居る。柔かいうちにも、その縁には何か澄んだ鋭さがあつた。親しみを抱かせる中にも、どこか毅然

として容れぬひらめきを輝かせて居た。

秀治は、子供心に、この米山を眺めることが好きであつた。さう言ふ習慣がいつからかついたのである。

秀治が二歳のときに亡くなつたといふ父親、顔も聲も知らない遠くの遠くの父——秀治はこの山を眺めてゐると、いつもその父と向ひ合つてゐる様な幻覺を、いつともなく持ち出してゐたのであつた。これは、村人が米山さまのことを一つに男山と呼んでゐることから來たのかも知れない。男山に對して、米山と峰つづきの尾神山を一口に女山と呼び慣はしてゐるのである。——このことは、秀治は實母のシマにも、姉のハツにも語つたことがなかつた。只一人、子供心にそのうれしい秘密を胸の奥ふかく秘めて、あかす米山を眺めることを、いつか覺えたのである。

秀治の父の太吉は、秀治が二歳のときに亡くなつたのであつた。

——小心で、信神家の彼は、神棚やお佛壇の汚れることに、堪らない不信神心を感じさせられてゐたのであるが、これと結びついて、圍爐裡の鈎さまを汚しておくことをも、太吉は病的にこれを忌んでゐたと言ふ。

こんな太吉であつたので、太吉の家は村でも物持であつたのであつた。——直江津港から、鉢崎といふ米山麓の漁村までの間を岸濱七里と今でも村人は呼んでゐるが、この岸濱七里は、只どこまでも痩せ渴れた廣漠たる砂丘であつた。

磯には起伏一つなく、岩礁一つあるでなく——豊饒な能登灣の魚群も、名立といふ岬から佐渡ヶ島へと素氣なく素通りして行つてしまつて、満足に小鯛一匹とれない文字通りの荒濱であつた。そして唯、どこまでも萬遍となく延びた砂原と、日本海の荒いシベリヤ風に叩き伏せられて、歪みちぢんで砂原に匍ひづつた黒松の松林とだけの土地であつた。

比較的潮風の當らない、日當りのよい丘の砂原をおこして、そこに桑を植ゑ、甘蔗をつくり西瓜や眞瓜を植ゑて、村人はわづかに口を濡ぼして居た。

——かうした中であつて、太吉は村で唯一軒、牛を一匹持つてゐた。豊饒な頸城平野は、この五屋濱といふ部落からは一里近くもはなれてゐたが、その頸城平野の豊かな田圃も、太吉は三段近く買ひ求めてゐたのである。甘蔗畑も五段以上もあつた。……

かうした砂原の中から、これだけの物を残すのは、仇やおろそかなことでは出來ないのだ。こ

れは全く一つに、太吉が年柄年中瘦砂の畑の上を蚯蚓のやうに匍ひすり廻つて暮してゐた勤勉律義そのものの中から生れてきた、貴い賜物であつたのであつた。

扱、この太吉はある朝、圍爐裡の鉤さまを洗ひに、裏の海へ出かけて行つたのであつた。この村には川なぞといふものは、毛筋一本ほどもなかつたので、勢ひ太吉は、神棚や鉤さまは、裏の海へ洗ひに行くことを常としてゐたのである。

太吉にしてみれば、女房のシマが弘法さまの井戸と呼ばれてゐる、家から三丁もはなれた共同井戸から（往年弘法大師が托鉢をなされてこの北國の地へ御光來になつたときに、村人にこの水の出場所をお教へになつたのだといふ言ひ傳へであつた）一擔ぎ一擔ぎ、肩を張らし腰骨を痛めて運んでくる水を使ふことの勿體なさに、洗ひ物はどうしても磯まで出かけて行かねば彼の律義な氣性がなんとしても救さなかつたのであらう。

何にせ、十二月の日本海の波ときたら、形容通りの逆巻く怒濤であつた。しかし磯にうち上げる波の穂先で洗つてゐる分には、一向に危険なしと思ひこんでゐた太吉は、不覺にも二波三波日にどつと陸深く襲つてきた波頭のために、ついに洗つてゐたその鉤さまを流されてしまつたので

ある。自在鉤を通してある竹の部分をも村人は一口に鉤さまと呼んでゐる。そしてこの太吉の場合、その僅か一本の孟宗竹であつたのだ。——
それを見ると、太吉は突差に下駄をぬぎすて、着てゐた綿入のネンネコをかなぐり捨てて、遮仁無仁波にさらはれてゆく鉤さまに猛然ととびついて行つたのである。この場合にも、太吉は下駄やネンネコを濡らすことを惜んだのであらう。これは死後、下駄とネンネコがその場にあつたことから想像がつくのである。

——磯へ薪拾ひに出かけた（波でうち上げられた木の根だとか葭だとか、板切だとかはこの地方の村人にとつては貴重な燃料であつた。その薪拾ひをこの地方では磯まわりと言つてゐるのである）近所の作五郎と言ふ親父さんが、太吉ののこした下駄とネンネコを見つけて大騒ぎとなり隣り近所……やがては村中が海邊へ出て立ち騒いだのだけれど、もう後の祭であつた。山とくだける白浪、それが人一人呑んだと思へば、殊更に凄さと恐怖を驅りたてて……手の下し様がなかつたのである。小舟を出す術もなかつた。又よしや出してみた所で、何の役に立つたであらう。シマは、夫のとり残した下駄とネンネコを抱きしめて泣き喚き、餘り突差の出来事にとり亂し

た彼女は、夫の後を追つてその巨浪の中へ飛び込まうとして、近所の人の幾人かに總がかりで抱き押へられて居た。

濱ぐみの實

二三日來の雲がはれて、重い灰色の空の一隅に僅かながら青空がのぞかれたけれど、西風のもはげしく、大の男でも身をかがめてゐねば吹き倒されてしまふほどの風の日であつた。その朔風の中に髪をふり亂し、目をまつ赤に泣き腫らして、山とくだける日本海の巨浪に挑んで、

「お父ツつあ、お父ツつあ……！」
と絶叫するシマの姿と聲は、むしろ凄惨であつた。

秀治はその折、姉のハツの背中におぶさつてゐたのである。ハツは秀治とは六つ違ひの八つであつたのだつた。ハツは、村中の最上寺と言ふお寺のお御堂でナンゴイ（お手玉）をついて遊んでゐたのであつたが、誰が知らせたのか、

「ハツ、汝とこのお父ツつあ大變だぞ。海へ流されたつて言ふと」
と言ふ聲に、ハツは秀治をおぶつたなり、裸足で、そこからは四五丁ある海邊へまで子供ながら一息に駆けつけたのであつた。

ハツはどう言ふものか、母のシマの様に涙を流さなかつた。きつと餘りの驚愕のためだつたのであらう。そしてハツは唯背中の中を覗いて、

「秀、そら見れ、俺のお父ツつあ海へ流れて死んでしまつたがだぞ」
と、揺り起すのに狂氣の様であつた。

肩をかしげ、ネンネコをめくり、そして幼い秀治に、今しがた父を吞んでしまつたその海と白浪を見せようと言ふのである。

「秀、そら、見れてのに！」

すると秀治は、パツチリと目を開いたが、姉の狂氣の様に叫ぶ顔を見て、いつものアバアバをする時の様にその可愛い顔でニコリと笑つてみせただけなのであつた。

やがて、太吉を呑みこんでしまつた海の上には、心憎いほどの陽の光が射してきたのである。太吉の骸はどこか海邊へうち上げられたのか、遂にわからず終ひであつた。——かうして太吉は妻のシマと姉のハツと、當時まだ二つの秀治をのこして、あたら三十のうら若い生命を遂に捨ててしまつたのであつた。

濱ぐみの實

「太吉のけちびん（けちんぼ）奴、鉤さま一本で生命を捨てた」
 と、當時村人の嗤ひ草の種になつたものである。鉤さまと言つて、それは前にも書いた通り、自在鉤を通す孟宗竹一本でしかなかつたのだ。村人の物笑ひになつたのも當然のことであつたのに違ひない。

しかし太吉の場合は、單にけちびん（けちんぼ）とのみは片付得ないのではないか。

鉤さまの光つてゐるとゐないで、その家の値打が知れると、村では言ふ。だから氣丈のある女房連は競つてこの鉤さまをピカ／＼に光らせておくのである。

彼の女房のシマは、決して氣疎いと言ふわけではなかつたけれど、人一倍律義者の太吉にはそれを女房の手に任せておくことがどうしても出来なかつたのである。その鉤さまの孟宗竹一本で生命を捨てた……其處に太吉としての貴い人生が覗かれるではないか。

秀治の二度目の父は、竹箴と甘蔗畑一枚へだてた西隣りの、甚作と言ふ家の次男の卯作と言ふのが、入婿となつてやつて來たのである。これは入婿と言ふより、むしろ押しかけ婿であつたの

だつた。秀治が七つ、ハツが十三の春であつた。

卯作は年々冬になると、上州の高崎在のある迷り酒屋へ、倉男として出稼ぎをしてゐたのである。箸にも棒にもかゝらぬ與太者ながら才氣の勝つた卯作は、その酒倉で頭司をしてゐるんだと人前で吹聴をしてゐたのも、案外事實かも知れなかつた。

「關八州を股にかけた、高崎卯作を知らんがか！」

と、村で唯一軒の角屋と言ふ居酒屋で、酔ふといつてもこの唼呵の文句を吐きならべては村人の心を寒からしめてゐた卯作であつてみれば、太吉の家の財産を見込んで、氣弱なシマを威しこんで押し入つたのだと、村人の口が立つても仕方のないことであつたのだ。

それかあらんか、折角太吉が年柄年中瘦畑の焼砂の上を匍ひすり廻り、爪の垢をともして稼ぎ貯めた三段の田圃も、五段歩の甘蔗畑も村一軒の牛も、瞬く数年の内に、濱小屋の賭博金と直江津の砂山と言ふ町にある遊廓の白首を身受けするのしなと言ふ騒ぎの泡ぶく金とに代へられてしまつてゐたのであつた。――

「秀、さあ精出して掘れや。明日は中の町の市へつれてくぞ。」
夏内から楽しみにしてゐた中の町の市である。

中の町と言ふのは、頸城平野の田圃中にある町であつた。事實は中の町村といふ部落なのであつたが、そこには旅籠もあれば料理屋もあつた。雑貨屋もあれば登記所もある。そしてこの地方の村人はこの部落を、一口に中の町と呼んでゐるのであつた。

この中の町の市は九月下旬のイモ市から始まつて、雪解の三月頃まで毎月一回づつ開かれた。收穫の前の九月下旬に、折よく海岸地帯の甘蔗が出盛るのである。海岸の部落はこの甘蔗を中の町の市へ持ち出して近邊の農家へ賣るのであつた。だからこの市を、一口にイモ市とも呼んでゐたのである。

十月ともなれば海岸地帯では、餘りとれない里芋、大根、人参と云つた類を農家から持ち出して、海岸地帯の人はそれを買ひ出しに出かけるのであつた。——これが、この市の盛る所以であ

つて、この市の日には、近所の町の凡ゆる種類の商買人が入り込んできたのである。呉服屋、農具屋、金物屋、荒物屋、果てはこの日の混雑を當て込んだ小屋がけの蕎麥屋、一膳飯屋、時にはカラクリ屋なぞさへかゝることもあつた。

——明日は、いよ／＼待ちに待つたその中の町の市なのだ。……八月のお盆が過ぎて、丘の萱の葉先に秋風と覺えられるそよ風がそよ／＼と渡る頃になると、秀治は毎日甘蔗畑へ出るのが楽しみなのであつた。早く葉裏の赤みが増えてくれと祈る。早く甘蔗が熟れきつてくれと願ふのだ。中の町の初市に出ると、母はその歸りにはきつと、餡粉の入つた、赤や青の色どりのついた水鳥の菓子を買つてくれるのが常であつた。この菓子は中の町の市の名物であり、又市の土産といへば村人はどこの家でも、定つたやうにこの水鳥の菓子を子供達の土産に買つてかへるのが、慣しのであつた。

頬つべたのとれるやうなこの菓子の味覺と、その色とり／＼の美しい繪のやうな菓子の幻影とを村の子供達は幾月も幾月も思ひ畫くのだ。

——しかし、朝、市の出がけには卯作が忘れずに甘蔗の目方を天秤ではかるので、この水鳥の菓

子を買ふのは勢ひ肩イモを胡麻化して、それでシマはその菓子を買つてやるのであつた。シマは、この中の町在の狸平といふ山村から、五屋濱部落の太吉の家へ嫁いで来たのだつた。それが卯作を夫に迎へてからは、シマは一度も在所へかへることがなかつた。又在所の父も、母はその頃は亡くなつてゐたが、兄も……ならず者の卯作を恐れたのであらう、一度として濱へ出かけて来なくなつたのである。

だから、せめて中の町の市へ出かけることは、シマにとつては懐しい生れ在所の香をかぐことでもあつたのだ。中の町からは、尾神山つづきの小さい峠一つさへ越せば、そこに生れ在所の狸平の村があるのである。

狸平と言ふ部落は、米山つづきの尾神山といふ山の山麓にある貧しい山村であつた。貧しい村ながらシマの生家は持田も山田ながら一町近くもあれば、炭山もあると言つた、村でも指折りの物持の家であつたのだつた。

それが、太吉の人並外れた實直さを見込んで世話したハルと言ふ山家歩きの擔ぎ商ひの婆さんの仲人で、シマは四里も五里もはなれた五屋濱まで嫁入してきたのであつた。

秀治は幼い頃、二三度母につれられてその母の在所へ行つたと言ふことであつたが、記憶は臆氣にも残つてはゐなかつた。

母は、中の町の市へ行く度に秀治に言つた。

「秀、あの峠を越せば、母やんの在所だぞ。その内いつか連れてつてやるからな。」

さう言ふ母の視線を追つて秀治はいつも無言でその市峠と言ふ峠を見やるのであつた。——そこには、何か怪のあたゝかい梅が自分を待つてゐてくれる氣がしてならないのだ。まだ見ぬ祖父や伯父やの顔が、いつも優しくほゝ笑んで秀治に呼びかけてくるのだ。しかし、義父のことを思へば、その僅かな峠一つが越えることのできない、冒すことのできない高い山となつて、嚴然として意地悪く聳え立つてゐるのである。

母とても同じことであらう、と、秀治は思ふ。……木の尠い、山であつた。所々禿げた赤土の所があり、峰の松の木が盆栽の木のやうに佗しく、青空の下に隙けて見える峠であつた。——

「秀、さあ精出して掘れや。明日は市へつれてくぞ」
シマは、幾度でも同じ言葉をはいた。これは、秀治に言つてゐるのではなく、むしろ自分自身

に語つてきかせてゐる言葉であつたのだ。

秀治は、唯、ウンウンと呻つて母にうなづいて見せた。そして、顔をビツタリ砂につけるやうにして、小さい手で根かぎり甘蔗の蔓をひつばつた。嚙りついたら白い汁のポタ／＼と流れてきさうな太つた丸い甘蔗であつた。一つや二つ食べたところで、村から五六町もはなれた、しかも松林かげの畑であつてみれば、義父の卯作には判りさうにもないのであつたが、秀治はそれをしなかつた。いや出来ないのだ。シマも亦それをしなかつた。

仲秋の午後、日ざかりの中で、親と子は全身を汗ばませ、顔をほてらせ、唯黙々と甘蔗を堀りかへした。

米山の山姿は、秋を迎へて東の空にクツキリと青く、端麗であつた。

——秀治は、今でもまだ、義父が家へやつてきた當時のことを生々と覚えてゐる。——

秀治の家の竹藪で圍はれた坪庭には、太吉が生前辛苦して山家の村から運んできた榎柏やオウムの植込がよく根ついて、太吉はそれを自慢としてゐたのであつたが、それ等の植込の西側にも

う一つ村でも誇りの大きい椿の木が二本向ひ合つて立つて居た。

その椿の古木に、全木まつ赤に一重の椿の花が咲き誇つてゐた頃のことであつた。

卯作は或る日秀治の親戚の金造と云ふ親父と連れだつて、秀治の家へやつて來たのであつた。

「おッ母ちや、春のかしくなりやんしたね」

おッ母ちやと金造が呼んだのは、シマを指してゐたのである。金造は背の低い、痩せた、顔に天然痘の痕のいつばいある、「グジャ金」と綽名されてゐる親父であつた。

この「グジャ金」が、父の生前、よく父の太吉の前へ來てはペコ／＼頭を下げてゐたのを、秀治の姉のハツは覚えて居た。父から金を借りてゐたのであることも、ハツは子供心にも知つてゐたのである。

卯作との話し合ひで、金造は卯作をシマの亭主におつばめた、そして太吉からの借金を棒引にしてもらつたのだと、後々村人の口が立つたが、秀治は姉のハツからそれ等のことを聞かされて後でなるほどと合點が行つたのであつた。——

金造はツカ／＼と圍爐裡へ上りこんで、そして背後の卯作を促したのである。

「さあ、オッチャ（次男をこの附近ではかう呼んでゐる）上んなさい」
母のシマと秀治と姉のハツと、一家三人はちやうど夕飯の膳をならべて、熱いイモ粥をすすつてゐたところであつた。

卯作は、秀治の家の西隣りの甚作の家の次男で、もうその頃は三十をすぎてゐたのであつたが、無論前に書いたやうに村中の毛嫌ひ者であつてみれば、婿の口なぞ更にあらう筈がなかつたのである。

秀治は、まだ往還で一度も撲られたことも怒鳴りつけられたこともなかつたのであつたが、この卯作を見ると、唯もう、何やら、恐い異人がやつて来たやうな恐しさから、イモ粥の箸もそこに炬燵の中へもぐりこんで、壁際へピタリと身體をつけ、蒲團を願までひきよせて、この二人をチロ／＼と見てゐたのであつた。

「まだ、おまさんた（あなたの）家へ挨拶にも上らなかつたでも、昨日上州からかへつて来やしてね」

卯作は、首に黒いピカ／＼光るうすい絹の襟巻をまいて居た。

卯作は、倉男の期間があけて、村へかへつて来てゐたのであつた。身體も大きく顔もでかく、しかし卯作は鼻筋のとほつた、仲々立派な男前の男であつた。

シマは、自在鉤にかゝつた鐵瓶にくべた松葉の燃えざれのかゝるのを吹き吹き、お茶をついで、つまでも黙つて居た。

「さあ、これ、子供衆の土産だ」

卯作が風呂敷包みから取り出したのは、これはその翌朝母から貰つたのであつたが、秀治たちが今まで口にしたこともなかつた、香ばしい匂ひのついた軽いお煎餅であつた。多分、上州の磯部煎餅であつたのであらう。

やがて金造はその末に、ハツと秀治の方を見て、

「さあ子供衆、俺たちこれからおツ母ちゃんと大事な話があるだから、お前ちや、一寸の間どこかへ遊びに行つてきてくれつしやいのウ」

と、しなびたアバタ顔にとつてつけたやうな愛想笑ひを浮かべながら云つたのだつた。

秀治は、姉のハツの方を見た。それから二人そろつて、母の方へ、

「どうしよう？」

と、目を向けたのであつたが、母がかぼそい聲で、

「ちや、汝等、ちよつと外へ行つてこいや」

と、言つたので、二人は外へ出たのであつた。

外へ出て見たところで、もうトツブリと日の暮れた頃なので、どこと云つて別に遊びに行くところがあるのではなかつた。

明日も風であらう。生温い春風の中で、潮鳴りがのどかにひびいて居た。荒い冬の四ヶ月の間決して聞くことのできない、心うれしい静かな潮鳴りであつた。

秀治は、ハツに、

「姉ちや、どこへ行ぐや？」

と、訊ねた。すると、ハツは分別くさい顔で、

「馬鹿、黙つてゐれや」

と、云ふと、往還まで出た足を再び家の軒下へまでひき返して、そこで足をピタリと停め、家

の内の話聲をきき出さうと一心に耳傾けてゐる様であつた。その時はもう十三の春を迎へてゐたハツには、きつと母の身の上についての只ならぬ豫感が感じられたのであつたらう。

秀治はその姉について、やはり軒下へ佇んだのであるが、心は只、先刻卯作がくれた包み紙のことに及んでゐたのである。ハツは息一つ立てなかつた。秀治も姉の眞似をしてさうして居た。

空は砂をバラ撒いたやうな星空であつたが、耳をすませてゐると、家内の話聲は重い板戸に仕切られてゐることとて更に聞えては來ず、唯、裏の海の潮鳴りの音に交つて下手の方から、丘の鎮守様の杜からであらうか、梟が、

「明日天氣だ糊つけホウ、明日天氣だ糊つけホウ」

と、鳴いてゐる聲が、風にのつてかすかに聞えてくるのであつた。

その翌日からは、卯作は金造と一緒にあつたし、一人でくることもあつた。殆んど毎夜の様執に秀治の家へやつて來たのである。

秀治と、ハツはその度に、外へ出る悲しい慣ひがついてしまつて居た。

親戚として太吉の姉、これは隣りの雁子濱と云ふ部落へ嫁いでゐたが……を初めとして、村内

にも伍助、松太郎、一榮と云つた具合に夫々佛の血をひいた家が數軒ならずあつたのであつた。しかし、これらの親戚も、卯作の平素の行狀を思へば、全く臭いものには蓋をしるで、もし面と向つて反對でもしようものなら……その崇りを恐れたのである。蔭では青筋を立てたりブツ／＼と愚痴つても、唯泣き寝入りの形であつたのであつた。――

そして、卯作は遂に、秀治とハツの二度目の父として、秀治の家へやつてくることになつたのであつた。

母は、秀治にも、ハツにも二度目の父を迎へたことを、

「お前ら、すまんねや」

と、一度も言葉に出して詫びたことはなかつた。その代り、朝起るから寝るまでその目が、その物腰が、

「お前ら、勘辨せや。お父ツちやを貰つてなんぞしてねや」

と、詫びてゐることを、秀治は子供心にも鋭く讀みとつてゐたのである。

母の悲しい顔を見ると、秀治は妙に庭に咲いた赤い椿の花が思ひ浮ばれてくるのであつた。

義父が始めて金造親父とやつてきて、煎餅の土産をくれた夜、そして姉と二人で家の軒下へ佇んで聞いたお宮の鼻の鳴聲が、耳の底に蘇つてきてならないのであつた。

――中の町の市からの歸り、村を抜けて四五丁くると、鎮守様の森の崖下に、犀ヶ池と呼ばれてゐる沼があつた。松林の丘のふところに抱かれて、青い沼は小波一つ立てなかつた。

道から崖の藪をぐぐり抜けてそこまで態々下つて、その沼の水ほとりの泥柳の木の本蔭で毎年、筒粉の入つた水鳥の菓子を喰べる慣ひであつた。さも誰かを恐れてでもゐるやうに――さもしい食べ方であつた。一昨年もそこで食つた。昨年の市の歸りにもそこで食べたのであつた。

「秀、うんまいか」

秀治は物も云はない。學校へもろくにやらせられず、年百年中砂畑で陽に射つけられたり、潮風にたゞかれてはゐるのであるが、秀治はほんとに色白な顔をして居た。一重瞼の目が大きく鼻も太かつた。

「ウン、ウン」

と、生返事をしながら、その笛入りの水鳥の菓子を頬ばる秀治の目には秋空のやうに爽々しい涙の線が絹糸のやうに光るとしか、母親のシマの目には映つてならなかつたのであつた。……嬉しからう、美味しからう、一年に幾度と數へるほどしか口に入らないこの笛入りの菓子……シマは、夢中になつてその水鳥の菓子にとびついてゐる秀治の顔を見てゐると、己もやはり手にしたその菓子がどうしても喉へは通らないのが、常だつた。

——明日は又、いよ／＼その中の町のイモ市なのだ。

秀治が、突然、ぐつと腰を伸して叫んだ。

「おツ母ちや、俺もうくたびれたでのウ」

そして秀治は、大人のような視線で母親の顔をふり返つて、ニコリと笑つたのであつた。

「そか。くたびれたか。母やんもくたびれた。んだら一休みしよせ」

丘からは、中秋の空の下、日本海が青く青く眺められた。海には蒸気船が一艘直江津港から佐渡ヶ島の方へ向つて走つてゐた。

妙高山がうす青く、遙かに西空に聳えてゐる。

姉のハツは、今年はまだ家には居なかつた。去年の市のかへりには、三人揃つて、あの犀ヶ池のほとりの泥柳の木の下で水鳥の菓子を食べたのであつたが——今年の春から、ハツは、直江津町の舎と云ふ海産問屋へ飯焚奉公に行つてゐるのである。

秀治も一度だけ、母に連れられて、姉のゐるその直江津の町へ行つたことがあつた。その港の町の瓦屋根や、白壁づくりの蔵や家、町外れを流れてゐる荒川と云ふ川にかゝつた古い橋……さうした光景が、かうして眺めてゐると、そこはかたなく目の底に見えてくる氣配がしてきてならなかつた。

「ハツも、どうしてゐるかのウ」

秀治は、母親の言葉を耳に入れようともせず、遠い青い、果しなく擴がつた日本海をいつまでも眺めて居た。……父を掠つて行つた海、父を呑んだ海、しかし、さうした憎い、口惜しい感情は少しも湧いてはこない。……父が、まだその底に生きてゐるやうな氣がする。秀治は海がたまらなく好きであつた。秀治には、海はたまらなく慕はしいのであつた。

ハツが、直江津の海産問屋からかへつて来たのである。その翌年の春先であつた。

秀治の弟の甚吾が生れたためだつた。

「秀、お前、今日飯食つたか」

秀治は面と向つてよく、村人からかう云はれるのであるが、秀治にはその言葉の意味が、次第にわかつてきたのである。

「卯作の子が出来たから、可哀想に飯もろくすつぽ當てがはれないで」

と、言ふのであらう。

秀治はその言葉に會ふと、

「はあ、食つたさね。飯食はんで、どうして働けると」

と答へる言葉を、いつか覚えこんでしまつて居た。

しかし……かうした中に育ちながら、秀治はほんとに身心共に、蔭一つなくスク／＼と育つて

ゐたのである。歪みやいぢけは未塵ものぞけなかつた。

「……飯食はんで、どうして働けると」

と、秀治は持前の色白な可愛らしい顔に、一重瞼の大きい目をクリ／＼させて、笑ひながら云つてのけるのである。と言つて、それは決して作意のある笑ひでもなければ、腹の底にいぢけた反撥心を藏した子供以上の言葉でもなかつた。だから、

「秀、お前これ一つ食へや」

と、焼餅を出されると、素直に、

「おごつつをさん」

と、それを頂いて、秀治は貪り食ふやうにそれをパクついたのである。

焼餅と云ふのは、米の粉でつくつた團子であつた。これに鹽辛煮（大根おろしと鹽鰯をいっしょに煮込んだもの）をつけて食べたりしたら、これは村人の最上の御馳走であつたのだ。香んばしい米の粉の香ひ、舌の奥にまで泌みこんでくる鹽鰯の味……どんなに美味しいことであらう。

秀治はそれにありつくと、息をもせず貪り食つた。

そのさまがいぢらしいと云つて、縁筋の年老達は思はず涙をすゝるのであつた。

「秀、うんまいか」

秀治はものも云はないのである。

お父ツつやが生きてゐたらなあ——と、老人の目は語るのであつた。

もし親戚で物をもらつて食べたことが知れたら、拳骨くらゐはものやさしい方であつた。時には卯作は、割木(薪)をもつて秀治を追ひかけたりするのである。

「この野郎、汝は乞食の子か、朝から晩まで、のつ腹すつ腹食つてゐやがつて」

かうした場合、母が一言も辨解してくれないことが、秀治にはうらめしかつた。いや、父の恐しさを思つて何にも云へず、唯ヂイツと自分を見詰めてゐるだけの母の悲しい目が、秀治にはたまらなく切ないのであつた。

秀治はよく甘薯畑へ逃げこんで、甘薯の蔓の中で幾時間でもかくれて居た。時には、濱の舟小屋で一夜を明かすこともあつた。こんな時、秀治は夜が更けてくると、さすがに堪りかねて、自分の家の北隣りの孫右衛門さんの家の軒下へ立つことを、覚えこんだのである。孫右衛門は以前區

長をしたこともあり、區長を罷めてからでも村の重役をすつとつづけてゐる格なので、卯作もこの孫右衛門さんには、さすがに頭が上らなかつたのであつた。

秀治の影が戸口にうつるか、又その氣配がすると、孫右衛門さんはどんな夜更でもきつと表の板戸をガラリと開けてくれるのであつた。

「秀、また叱られたな」

頭のツル／＼禿げた、ものやさしい孫右衛門さんの手で頭をさすられると、秀治はいつもワアツと聲立てて泣き出すのだつた。……まつ暗な闇夜の甘薯畑の中で、砂の上に全身を匍ひつくばらせて幾時間でもヂイツと齒を喰ひしばつて隠れてゐる我慢強さも、生物の氣の一つ感ぜられない濱の舟小屋で、唯、ザブツ、ザブツと鳴る潮鳴りを聞いて眼をつぶつてゐる不敵さも、この孫右衛門さんの一言に會ふと、その強い感情がヘタ／＼と崩れてしまつて、秀治はただワアツと聲立てるのであつた。

すると、孫右衛門さんは秀治をつれて卯作の所へでかけるのである。

「南の家のお父ツつや、まあ／＼勘辨してやつてくれつしやう」

卯作はハイともウンとも云はなかつたが、それで秀治の詫びは大抵叶ふのであつた。

この場をとりなすのは、いつも姉のハツであつた。ハツは僅か一年、直江津の町で湯水を使つたきりなのであつたが、めつきりと大人つぽくなつてゐた。

「秀、さあ、お父ツつやから勘辨してもらつたんだから、もう泣かんでもいいぞ。早く寝れや」
寢間はまつ暗であつた。夜は圍爐裡の間へ二分蕊のカンテラをともししておくのであつたが、厚い板戸に仕切られると、寢間は毛筋ほどの光りもさゝすまつ暗くなるのである。
母は甚吾をつれて、と父いつしよに座敷で寝るのであつた。

秀治とハツの寢間は、納戸をそれにした鰻の寢床のやうに細長い三疊の間であつた。

藁蒲團の中に深々と顔をうづめて、秀治は姉のほの温い胸へ、肢體へ、グン／＼とその顔を、身體を押しつけて行つた。ハツは眠りもせず、まつ暗闇の中で眼をパツチリと大きく睜いて見えない天井を凝視めてゐる。

「日本海の高鳴りは、ザブリ、ザブリとただ單調でもの佗しかつた。

四

秀治の働き振りは、全く村人の驚異的だつた。

「わづか十を二つや三つ出たばかりの子供でのウ……」

と、村人は目を睜つたのである。

黍のサク切りや、煎菜畑の畦上げには、大人の使ふ鋤を一人前にふり上げて、腰もふらつかせなかつた。

桑摘にしても、一人前になりかけた小娘たちが、若衆の男前や品定め無駄ツ話になぞうつつてぬかしてゐたものなら、到底秀治には勝てるものではなかつた。

或る時——この五屋濱部落から小一里在方へ入つた長峰と云ふ部落の百姓家から、父の卯作が据風呂桶の古いのを買つて秀治はその風呂桶の板を運ばされたことがあつた。

「秀、板、水吸つてて重いだらうから、二度でも三度にも良えから、氣永にはこべや」と、母のシマも云つた。

それを、秀治は一度で運んでしまつたのであつた。据風呂桶丸一つの、側の厚い板、しかもまだ水気を多分にふくんでゐる板と云ふと、大人でも途中でいく度か息をぬかないことには運べさうもない重みである。

秀治は、産後で黄色く稠びた母の顔を見上げて、

「ウン」と、コツクリをしてみせたが、その瞬間に秀治は、

「よし、俺たつた一度でみんな運んで、母やんを驚かせてやる」

と、思ひこんでゐたのであつた。

母を驚かせると云ふことは、滅多に褒めてなぞくれたことのない父から、褒めてもらひたい。ただその一念であつたのだ。

部落からその長峰と云ふ部落へ行くのには、村外れの鐵道の線路をこえて松林を縫ひ、朝日沼といふ沼のほとりを通つたりして辿りつくのであつたが、秀治は行く道々、ここが休み場所だ、あそこの松の木の間へ荷を立てかけたら具合が良いと云ふ風に、あらかじめ休み場所を定め行つたのである。

行き先は太平と云ふ、杉の古木に囲まれた、長峰部落でも旦那さん（地主）格の家であつたが、その御新造さまは、秀治がその板を一度で運んでしまふと云つたら、目を廻して云つたのだ。

「何、一度に運ぶと？ 兄んちや、お前いくつだや？」

「十三」

と、秀治は、縄で板をくくつてゐた手を休めもせず云つた。

終ひにはその家の旦那さんまでがその話を聞きつけて、座敷から縁側まで出て來たのである。太平の旦那さんは、古びた縞柄の絹の薄羽織を着て居られたが、その秀治を見ると、懐手をしたまま御新造さまに云つた。

「こんな子供に、そんな無茶なことさしてどうなる。腰骨を折つてしまふわ」

すると、御新造さまは、その心配が一時につつて來たらしく、殊更眞顔になつて、

「濱の兄んちや、止しなさい。お前背骨でも折つたらどうするね」

秀治は色白な可愛い顔で、

「こんなもん、なんともないさね」

と言ふと、もうその、頑丈と云つてもまだ十三そこそこの彼の背中がその容積でいつばいになる程な大きい、重い荷を背負ひ上げてしまつたのであつた。

秀治は大人のするやうな紺の股引に素足鞋姿であつた。彼はのんびりと云つた。

「御免なさい」

御新造さまはやはり心配らしく、杉木立の門のところまで、まあ／＼と云つていつしよに出て來られたが、秀治は重い荷の背中を振り向けて、またもう一度御新造さまにお叩頭をしてみせた

「御免なさい」

それからは、五間行つては休み、十間行つては一休みであつた。何貫目あるのであらう、目方を計つてみる由もなかつたが、兎に角田舎の大きい据風呂桶丸一つの杉の厚板の重みである。當初の間こそ何糞ツと我慢をしてゐたのであるが、その内には痛いと思つた肩が感覺を失つてしまひその代りに目がくらみ出してきたのである。ヒタ／＼と目の中へ流れこむ油汗を、拳で拭ふ余裕すらなくなつてきたのだつた。足元がフラ／＼として、身體の中心がとれなくなつてしまつた

のである。

秀治は一足毎に、ウンウン聲を出した。

何糞ツ！と、負けず嫌ひの彼の小さい心は叫びつづけるのだ。産後の日經ちの悪く、黄色く、ぶす黒く、顔色の悪い母の顔が浮んでくる。この母に、この据風呂桶でお湯を立ててやりたいと思ふ。いや、それより願ふのは、

「秀、汝、^なんでもよくまあこの荷を一度で運んできたなあ」と、感嘆する父の顔であつた。

五月初めの、ボカ／＼生暖い氣候の頃であつた。松林の中には合歡木の赤い、綿菓子色のやうな花が陽炎の中でトロンと咲きくづれて居た。釣竿を持つた村の子供たちにも幾人か出會つたしかし秀治は背中の余りな重みで話を交すこともならなかつた。せい／＼足元二間か三間先を見つづけるきり、首を上ることもならなかつたのである。

十文字と云はれる、中の町へ行く道と、澤渡と言ふ部落へ通ずる道の交叉した個所もすぎた。「もう半分だ、もう半分だ」

と、秀治は心の中で叫びつづけた。齒を嚙みしびつた。目が流れこむ汗と全身の力みとでまっ赤に充血してしまつて居た。やがて、鐵道線路の踏切にかゝつたのである。ここまでくると、彼の部落はもう間もなくだつた。丘の上に段々に竝んだ村の墓場が見えるのである。秀治はそれを見たと、なんだか嬉し涙みたいなのが、鹽辛い汗といつしよに流れ出てくる氣がしてならなかつた。

ふと、日本海の青い波の色が、青い樺の木の梢の葉の繁みの間からのぞかれたのである。秀治はその身體、その目で、海の青い色をヂイツと見下した。この日頃、彼には海への堪らない慕情がヒタ／＼と迫り寄つてゐるのであつた。海の瑞々しい青い色の中には、母が聲も立て得ずにメソ／＼と吸り泣いてゐる悲しい顔もなかつた。父が猛り狂つてゐる恐ろしい顔付も見當らないのである。

父はこの頃、直江津の港町へ通ふ足數がひと頃に較べるとずつと減つたのであつたが、それはなんでも村人の口によると、村の角屋と云ふ居酒屋にゐるお品と云ふ茶屋女の元へ入りびたつてゐるためだ、と言ふことであつた。

父が一晚家を開けても、母は晝間のうちは何とも云はなかつたが、それがその宵ともなれば、母はさすがに秀治にかう云ふのであつた。

「秀、汝、角屋へ行つて来いや。甚が具合悪くて困るつてな」

角屋と云ふのは、村の丁度中程で、了蓮寺と云ふお寺の前で道が直角に曲つてゐるその角にあつた。店は雜貨屋で、油、ローソク、下駄、酒、醬油、駄菓子と云つた具合に凡ゆる品々を賣つてゐる重寶な店であつたが、その親父と云ふのは仲々の働き者で、その上道樂物で直江津の商賣女を女房にしてゐた位だけあつて、その雜貨店の傍ら、裏の離れ座敷で料理屋をやつて、白首の女までおいてゐたのである。

秀治は母にいひつけられると、角屋の裏庭へまはり、藤棚の下をくぐつて勝手知つたその離れ座敷の軒下へ行くのであつた。

「お父ツつや、お父ツつや、甚が案配悪いからね、母やんが早く歸つてきてくんないよ」と

すると、卯作は、御機嫌の良い時には、一錢銅貨の一つも抛り出して、——當時は、一錢銅貨一つあれば頬つべたのとれさうな大福餅が四つも五つもきたのである——

「馬鹿、お父ツつや今歸れるか。……もう直ぐ歸るからな、心配するなつて、おつ母ちや」さう云つとけ」

と、云ふのであつたが、御機嫌の悪い時には、

「何だ。……シマの阿魔奴、又俺を呪つてけつかるな、だから今日は目が出ないがだ。……野郎早く歸れ。そこら覗いてけつかると、背中の大骨ぶち折つてやるぞ！」

父の狂暴な暴力は、秀治は幾度となく受けてゐるのである。秀治はまつ暗い街道を毬のやうに逃げかへるので。こんな晩は、父は角屋の離れ座敷で賭博をしてゐるのであつた。

首にうすい絹の襟巻をした、荒い縮のドテラに甲斐絹裏のついた羽織をきた町の遊び人が、幾人もこの角屋に入りびたつてゐるのである。そんな晩には、父が母に與へる狂態は……秀治は云ふべき術を知らなかつた。

母の激しい啖り泣きの聲をききながら、秀治は唯まつ暗い、細長い寝間の中で、一人藁蒲團の微くさい襟を噛みしめながら、聲を殺して背中を波打たせて咽び泣いた。そして熱い息で、熱い心で咳くのだつた。

「偉くなれ、偉くなれ、偉くなつて母やんを安樂にしてやるんだ」

——あの青い海の中へ進んで行つたら、偉くなれさうな氣がする。秀治は今日も、肩の痛みも全身の焼けさうな疲労も忘れて、放心した様に海を凝視めてゐるのだ。

海へ行つたら偉くなれるんだ。……父が眠つてゐる海。……少しも見覚えがない癖に、かうして海を凝視めてゐると不思議と判然、海に吞まれて亡くなつた父の顔が青い波の間から浮び上つてくるのであつた。

——秀治はやうやうにして家へ辿りついたのであつたが、母は畑へ出かけたのであらう、家は居なかつた。

父だけ、火の氣のない圍爐裡で煙草をスバ／＼吸つてゐたが、秀治のその姿を見ると、

「秀、汝、ほんとに、それ一度で運んできたのか！」

と、云つた。

秀治は得意で、

「ハア」

と、父の顔を見上げた。卯作は素直に、
「さうか。それは偉いど、大したもんだ」
と、褒めそやした。

秀治は無性に嬉しかつた。そして、秀治はその父の顔に、子供心にも鋭く我家の凋落を看て取つたのであつた。——三段の田圃も、五段の甘薯畑も、その時にはもう既に卯作の手元を放れてしまつてゐたのである。牛も、中の町の博勞の手に移つてしまつてゐたのであつた。家邸も柿崎と云ふ町の農工銀行に擔保に入つてしまつてゐたのである。さうした些い點は、まだまだ子供の秀治には判る筈もなかつたが、一度、村では見かけることもない、黒い洋服を着て赤い鞆をもつた人が秀治の家へやつて来て、家中、果ては屋敷の周りをグル／＼廻つて見歩いたことから、子供心に秀治は只ならぬものを感じて知つてゐたのであつた。——

卯作は重ねて云つた。

「汝、よくまあこれ背負つてきたもんだな、これなら下手な大人でも一寸尻込みする大荷だでや」
父はとても御機嫌がよかつた。

秀治は、疲勞も何もかも一遍に消しとんで、父に甘えてみたい喜びをポツテリと血色よく肥つた可愛い顔に出して、ニコリと照れくささうに父に笑つて見せた。
据風呂桶は間もなく、村の佐吉と云ふ桶屋の手でタガをかけられたり釜もとりつけられたりして沸せる様になつたが……母は甚吾を抱いて、その風呂へ入つた。
秀治はその釜の下に松葉をくべて、松葉の煙の下から云ふのだ。
「おツ母ちや、お湯ぬるいかい？」
母は云ふ。

「いいや、丁度良え案配だぞ。ああ良えお湯だ。……秀、みんな汝のおかげだど」
「ふん」

と、秀治は返事やら喜びやらを一緒に現す。

風呂は家の庭先でたてるのであつた。

お星さまが頭のでつべんに眺められた。そして日本海の潮鳴りが、ザザザ、ザザザ……と、聞えてくるのであつた。

九月も半すぎると、この地帯の在方に點々とある沼の蓮の實が熟れ出してくる。村の子供達はみんなその實に群がりよつた。しかし、殆んど若衆のやうな畑仕事や蠶飼ひをしてゐる秀治には、その隙がなかつたのである。

ある日であつた。秀治はその日の午睡時間をぬすんで、朝日沼まで馳けつけたのであつた。朝日沼までは、十町近くもあつた。だから僅か午睡の休憩時間をぬすんで、そこまで蓮の實をとりに行くには、往復駆け通しでなければ、その時間から外み出してしまふのだ。父の叱言が恐ろしかつたのである。

平素から遊び仲間の尠い、いやつくらうと思つてもその時間のとれない彼は、學校を卒へて家業の手助けに専念する様になつてからは、殊更に孤獨になつてしまつて居た。

唯一人、吉平と云ふ、これは秀治の家の近所と云ふ譯ではなかつたが、屋根屋職人の藤五郎と云ふ家へ在方から貰はれてきてゐた子供であつた。在方の相當な地主だんなさんの家の箱入娘の不儀子

で、なんでもそこへ出入してゐた藤五郎が、大分の附金をもらつて引き取つたのだ、と云ふ村の噂であつた。

さうした、家庭的に不遇なと云ふ見えない糸が、秀治とこの吉平とを知らない間に結びつけてゐたのである。秀治は唯一人、この吉平とだけは大の仲よしであつた。二人は年も不思議と同年であつた。

次から次へと追ひまかれる家の仕事の、一寸した暇々をぬすんでは、小川へ雑魚や川蝦を掬ひに出かける時でも、夏の初め頃、海へ蟹すきに行く時でも秀治はいつも大抵吉平といつしよであつた。——その吉平が、今日は父の手助けをして柿崎の町の屋根屋仕事に出かけてしまつたと云ふので、秀治はその日は唯一人であつたのであつた。

鐵道線路を越え、松林を縫ひ、秀治は素足で夢中になつて沼へ駆けつけた。……蓮の實は、ホウロク鍋でほんがりと煎つて食ると、油分もあり香ひもあり、とても美味しいのだ。その食慾にそゝられて、秀治は一息に、十町の道を沼まで馳けつけたのである。

沼へ駆けつけてみると、幸ひどこの子供達の姿も見えなかつた。海へ出かけたのか。九月と云

つてまだまだ暑い日中を午睡を貧つてゐる仲間もあるのであらう。あたりは、松林から降つてくる蟬しぐれの聲だけであつた。獲物を一人占めに出来る喜びで、秀治は着物を脱ぐ間もどかしく、いきなりザブリと沼へとび込んだのだつた。残暑のきびしい。暑い太陽に射てつけられて、沼は死んだやうに静かに、無氣味であつた。

しかし泳ぎは、秀治の最も得意とするところである彼は巧に拔手を切つて沼の中心へと泳いで行つた。秀治は首にビクをくくりつけてゐた。剃ぎとつた蓮の實を、この中へ入れようためであつた。

ふと——秀治は、足に異様な觸覺をうけたのである。アレ、と思つて足を二三度ヂタバタさせる内に、その何物かは益々強靱に秀治の足に絡みついて來たのだ。素足の足がからみつくと言ふが、かうした案配なのであらうか。秀治は、もう抜きもさしも出来なくなつてしまつたのである。もがけばもがくほど、その糸は益々強く、而もねつとりと兩肢は云ふまでもなく、腰から腹から胸へまでからみついてくるのだ。秀治はもう、夢中であつた。

幾秒、幾分……この格闘の時が経つたであらう。秀治は、ふと思ひついたのである。じゅんさ

いなのだ。じゅんさいの根がからみついたので。と意識しても、焦れば焦るほど、その糸は猶も執拗に絡みついてくるのだ。

沼で子供達が生命を落すのは、よくこのじゅんさいの根に絡みつかれたがためであつた。

焦慮のために必要以上の力を出し盡してしまつたので、もう彼は電氣にうたれてしまつたやうに、両手兩脚が全く云ふことをきかなくなつてしまつてゐたのである。

聲を出して救ひを求めるにも、生憎犬の子一匹見えないのだ。と、今までは恐怖も何にも感じなかつた眞つ青い沼の水が、あたりの深閑とした情景が、云ひ知れぬ恐怖をそゝり立つてくるのであつた。

「負けてたまるか。死んでたまるか」

ふと、秀治は平素の逞しさを取り戻したのだ。瞬間、鋭い理智が矢のやうに彼の脳裡を走つて行つた。と、彼は既に盡きはしてゐた精魂の中から、異様な生命力の躍動を奮ひ立たせたのであつた。

彼は突差に、ザブリと水中深く潜つたのである。水中へ潜ると、秀治は自分の脚を腰を執拗に

からめたじゆんさいの根を手でひきちぎつた。齒で噛み切りもした。耳の底がチン／＼と鳴る意識がうすらいで行く全身が熱湯の中でもがいてゐるやうな感覚であつた。幾十分にも、幾時間も思へた死の格闘であつた。……秀治は、やがて水面にボカリと浮き上つたのである。すると彼は、水上へ仰向にひつくりかへり、手足を大の字なりにひろげたのであつた。そして放心したやうに青空をいつまでも見上げてゐたが、その内彼はガバリと、身を起すと、どうであらう。岸へは戻らずに再び沼の中心を目がけて奮然と泳ぎ出したのだ。圖太いと云へば、圖太いとも云へる彼の動作であつた。

やがて秀治は、あの格闘の最中にも幸ひまだ紐が解けずにあの首のビクに、蓮の實を一杯に剝いで岸へ悠々と泳ぎかへつたのであつた。

岸にはまだ人影も見えなかつた。その深閑とした、残暑のいきれた無氣味なひそけさの中で、秀治は土手の蓬の葉の中に腰を深々と埋め、そこで初めて、あの、自分の生命をすんでのことに奪ひ取らうとしたじゆんさいのありし彼方を、彼一流の大きい目でヂイツと凝視したのである。青い沼の前面に米山の山容がひとしく大きく端然と聳え立つて居た。……

その凝視の中で、そのひそけさの中で、秀治は今までに感じてみたこともない新しい力を、彼の一人一倍優れてガツチリ組み立てられた身體の中に、強く強く感じ取つたのであつた。

何か黙つては居られない。両手を大空に一直線に突き上げて、胸いつばい、腹いつばい絶叫してみたい衝動であつた。

——やがて秀治は又、素足で一散に村へ駈け歸つたのである。

村の習慣で、まだ残暑のきびしい正午の午睡を、父も母も涼しい海風の入る北口の窓部でつづけて居た。

秀治はその蓮の實を、素早く穴藏の一隅へかくしこんだのである。吉平と二人で、コツソリ楽しんで食べる所有であつた。

そしてこの沼の出来事は、秀治は誰にも一言も語らなかつた。永く、己一人だけの胸の中に秘めておいた。番一人、吉平にだけは後でそれを打明けたのであつた。

秋蠶が上簇ると、村はしばらく暇になつた。この頃になると、この瘦濱でも僅かながら、さすがに季節の秋蠶がとれるのであつた。漁師達はそれを煮乾にする。そしてそれを、直江津の海産問屋へ賣り込むのである。随つて、その駄賃稼ぎができるのであつた。

秀治は言つた。

「お父ツつや、俺、煮乾の駄賃稼ぎしたいどもね……」

卯作は、

「何？」

と言つて、秀治を見返したのである。僅か十三の小僧ツ子が、四里はたつぶりある直江津へ煮乾を運ぶ？　と言ふ疑ひと呆れを混ぜた目の色であつた。

「俺と吉平と二人で組んでね、車をひつぱるがさ。二人なら三俵ぐれえ曳けるつて」

卯作は、この健氣なそして分別の勝つた申し出に感心して、今度は返事もできずに居た。

——この頃には、いくら秀治が健氣に手助けをしようと言つたつて、シマは甚吾と云ふ幼児を抱えてゐるのであつた。僅かな繭の代位、目腐れ金ほどの西瓜や瘦甘蔗の上りがなんにならう。卯

作も、めつきりとみすぼらしくなつたこの頃の我家にいささか自省の色を見せて来て居たのであつた。かうした折にたとへ二十錢三十錢の賃金にしる、それを家計の手助けにしようと思つた秀治には、さすがに感心させられてしまつたのである。

酒つぶれのした太い濁聲で卯作は、

「さうか、やつてみるか」

と言つた。

父のその聲と顔色に會ふと、秀治は益々得意になつて、

「十貫目俵一俵十五錢だつて云ふねかね。三俵なら四十五錢だ。返り車は鹽を曳つばつてくるがさ。鹽は、返り車は割が悪くて一俵十錢だつて云ふども、二俵づつ運んできても、吉平と三十錢

余の山分けた。……お父ツつや、今夜甚左衛門さの家へ行つて頼んでみてくんないや」

甚左衛門と云ふのは、その煮乾の總メみたいなことをやつてゐる家であつた。

シマは、大根畑へ出てゐてこの場には居合せなかつたが、後で秀治のこの話を聞くと、
「秀、汝そんなとんでもねえこと云ひ出して、もし腰骨でも折つたらどうするや」

すると、

「おッ母ちや、なんとあると。おッ母ちやはまだ俺の力知らんがさ」と云つて、色白な顔でニマリ笑つてみせた秀治の顔は、たまらなく可愛くも、亦たのもしかつた。

卯作はその晩は、いつにない上機嫌で、甚左衛門の家へ出かけて行つたのである。そして秀治はその翌日から早々、吉平と二人で荷車での煮乾の駄賃稼ぎを始めたのであつた。

秀治がこの駄賃稼ぎを始める氣になつた原因は、さうした家計の手助けもあつたが、それにもまして彼が望んだのは、直江津の海産問屋にゐる姉のハツに會へることであつた。

つい目と鼻の先に居ると云つても、姉と會へたのはお盆の十五日、それもたつた一晚かぎりの逢瀬でしかなかつた。——姉はすっかり女染みてきてゐて、秀治は自分の姉ながらなんだか姉の顔を見るのが、眩しい様な氣がしてならなかつたのであつた。銀色の、ピカ／＼光る丈長の紙飾りを桃割の髪に巻いて赤い色の襦袢の襟をも色白な首にのぞかせて居た。

姉がお盆がへりで一晩泊つて、又直江津へ歸るとき、秀治は澤潟と云ふ村の停車場まで姉を送

つて行つたのであつた。

いよく／＼汽車がくるとなつた時、姉は秀治を驛の井戸の傍らに立つた松の木の蔭へ呼んで、

「秀、これ、歸りにな、小濱屋へ行つて大福餅買つて食つてけや」

秀治は、姉の赤い布の財布と眞鍮の指輪をはめた指先を見て黙つて居た。それから姉のくれた五錢銀貨を掌で固く握つて押し頂き、

「姉ちや、ありがと」

と、ニツコリ笑つてみせたのであつた。

ハツは、この弟の、少しの屈託もなささうにふくよかに肥つた可愛いらしい顔と、人一倍スク

／＼と頑健に育つてゐる様を睨ツと見て居たが、やがて、

「姉ちやも、又身を入れてうんと働くから、お前も辛棒しないや、ね」

と、他所行きの言葉で、秀治に云つたのだつた。それから、

「おッ母ちやも苦勞するねや」

と、落した聲で云ふと……秀治はその姉の一重瞼のさみしい鬢のである顔の目に、キラリと涙の

光つたのを見たのであつた。

二人は永い間、向ひ合つて立つて居た。

まだ日が登つてから間もない頃であつたが、驛の便所脇の無花果の木の青い葉の蔭で、もう油蟬がヂン／＼と鳴き盛つて居た。驛の向ふ側には小さい沼があつた。村の人が四五人群れてゐた夏蠶で汚した蠶菰を洗つてゐたのである。ゴヤ／＼と聲高に話し合つて菰を洗つてゐるその話聲と水の音が妙に鮮明に響いてきたりした。

「秀ちゃん、ちや姉ちや行くよ。父やんの云ふことよく聞いて、叱られないやうに……」

やがてハツは、小さいマッチ箱の汽車の窓の中から、くづれかかつた桃割の顔を出して、汗拭きの手拭をうち振りながら、次第にホームから遠ざかつて行つたのである。

秀治は、驛の柵から上半身を乗り出して、

「姉ちや、姉ちや！」

と、いつまでも叫びつづけた。涙がボタ／＼落ちて居た。

——直江津へ荷車挽きをやれば、その姉に會へるのである。

それともう一つ、直江津の港が見られるのだ。

桑畑から、西瓜畑から……松林越しに毎日眺めつづけてゐる北海道通ひの、或ひは佐渡通ひの黒い大きい蒸気船、その船を一度で良いから近々と見たい、秀治は永い間そのことだけを、唯自分の胸裡に秘めて念願としてゐたのである。しかし直江津へ遊びに行くことなぞ、夢にでも叶はないし、又そんなことを願ひ出たら、それこそ父から薪でぶん撲られても足りなかつた。

——ひたむきに海を好み、蒸気船に憧憬れる少年の心。今は海底で安らかに眠つてゐると信ずる父に會へるのだ。海へ行けば、今は不遇な母を幸福にしてやる事が出来るのだ。大きくなつたら、船員となつてあの蒸気船に乗らう、と秀治は望む。佐渡へ行くのだ。北海道へも行くのだ。いや、支那の國でも、又まだ見知らない遠い遠いどこかの國でも、そこで身を粉にして働くのだ。そして金を貯めるのだ。偉くなるのだ。母やんに樂をさして、その喜ぶ顔を見たいのだ。……

秀治はその意中を、或る時仲間の吉平に明したのであつた。

「吉、汝^な蒸気見たくねえか？」

「うん？」

吉平は撲つたいと云つた顔で、ニタリと笑つたのである。吉平は右の頭に大きい禿があつた。子供の時に、縁側から、運悪く蕨たたきの石の上へ轉げ落ちて頭を打つたのださうである。

吉平は、丸い團子鼻をフンと吸ひ上げて、

「どうして、見ると？」

と云つた顔で、唯秀治の顔を見上げて居た。

「直江津へ行くがさ」

「直江津？」

秀治同様、吉平にしたところで、そんなことは夢の中でも出来ないことだつたのだ。

秀治が煮乾の駄賃挽きのことを云ひ出すと、吉平は躍り上つてその説に賛成したのであつた。

「挽くともな、三依や四依位、秀ちやと組みだつたら平氣ど。秀ちや、俺今夜父やんに話してみ。直ぐ始めようさ」

吉平は茄子もぎをやつてゐたのであつたが、吉平の家の茄子畑の土手芝の上へ腰かけて、二人はこの楽しい相談をまとめ上げたのであつた。

この相談の間にも、濱の黒松林越しに、日本海が碧一色に初秋の日に照り輝いて居た。お盆がすぎると、海の色が變つてくると云ふが、ほんとに深い紺青の色であつた。十一月末ともなつて毎日々々まつ黒い空と、恐ろしい白波の姿に變貌してくる、あの無氣味な様はどこにあるのであらう。二人は無言で、夫々に自分の楽しい想ひを嘯みしめながら、その海をいつまでも眺めつゝして居たのである。

八

秀治と吉平は、毎朝、まだ暗い内から村を出た。直江津までは比較的平坦な道だと云つても、往復八里は裕にあるのである。それに煮乾俵三俵と云へば三十貫はあるのだ。いくら大人の半分荷を而も二人がかりだと云つても二人はまだ十二なのだ。それに日も大分短くなつて來てゐる。そしてこの一日の時間の中から、港を見よう、偶には姉のハツにも會はふと云ふのだから、秀治は梶棒を上げたら最後全く生命がけなほどの眞剣さなのであつた。

車を挽き出すと、大體目分量で半里づつ交替で、秀治が梶棒を握れば吉平は後押しにまはつた

吉平が挽き手になれば、秀治は後押しだつた。一番最初の丁場は三ツ屋濱部落の村外れまで、その次は九戸濱部落のとつ着きまでと云つた具合に目分量でそれを定めるのである。

毎朝夜の白々明けには、この煮乾挽きの手車が幾臺も幾臺もカラカラと村の往還を通つた。秀治と吉平の車に會ふと、村内の見知つた顔は、

「お汝でえらいどえらいど。さあ一緒に行こさ」と、もの優しく勗つたり勵したりしてくれた。

しかし秀治も吉平も、餘りのふん張りに返事の聲も出せなかつた。そして大人の車は後から後か
らと、みんな秀治達の車を追ひ越して行つてしまふのであつた。だから秀治達はこの大人の車に
負けないためには、どうしても一時間も二時間も早く、時には三時頃にはもう車を挽き出すので
あつた。

自家製の八角提灯をぶらさけて、二人の車はゴトゴトと蚯蚓の匍ふ様に砂路を軋んで行くので
ある。

母のシマは毎朝定つて、村の出外れの宗左衛門の竹藪まで後を押して送つてくれるのであつた
「秀、御苦勞だねや。ぢや行つてきてくれや」

一度として笑ふのを見たことのない母の顔——この頃の母の顔はめつきりと年をとつて、稠び
て見えた。母のやさしい一聲を背中に受けると、秀治は前日の腰の痛さも足の疲勞れも忘れて、
もりもりと新しい力が湧いてくるのであつた。秀治は梶棒を力みながら喉からふり絞つたが、元
氣いっばいの聲を出す。

「ハア、行つてくるでね」

そして秀治の車は、佗しい八角提灯の灯をたよりに、まだ寢靜まつた部落の往還をガタゴトと
進んでゆくのである。シマは、その八角提灯の火が隣り部落のとつ着きの大榎の邊まで進んでゆ
くまで、うす汚い頬かむり姿で涙をすすり上げながら睨ツと突つ立つてゐるのが常であつた。

手車は秀治の家を用ひたのである。毎日々々殆んど缺かさず三十錢づつキチリキチリと持つ
てくる吉平の働きに、父親の藤五郎も大ホクホクになつて、

「卯作のお父ツつや、お前とこの荷車を貸してもらつてるんだから、毎日五錢づつでも車の損料
として差つ引いてもらつて、その後を兩方で山分けと云ふことにしてくんないや」と、或る晩秀
治の父の所へ持ち込んで來たのであつたが、執作は遊び人だけあつて、かうした折には仲々物判

りがよかつた。それに卯作とて藤五郎同様、子供業とも思はれない秀治の毎日の稼ぎにすつかり氣をよくしてゐたのである。米一升八錢から九錢で買へた頃なのだ。

卯作は、シマに圍爐裡へ松葉をドンドンと煙べさせ、長い眞鍮煙管でうまさうにスバリスバリとやりながら、

「藤五郎さ、そんなもん何すると、車なんて大して減るもんぢやなし……第一家の秀がこの稼ぎが出来るのは、みんなその吉平さのおかげだ。秀一人ではとてもこの藝はうてるもんでねえ」すると藤五郎は、すり切れた紺股引の兩膝を圍爐裡のふちへにちらせながら、禿げかつた垢だらけの頭へ大仰に手を上げて、

「なにして、なにして。それはこつちで云ふ言葉さね」

さう云ふと、藤五郎は次に、焼酌でも一杯ひつけてきて居たのであらう。上機嫌な顔をツルリと一撫で撫でて、突然大聲にハハハと笑ひ出したのであつた。卯作も何と云ふことなしに、平素のむづかしい顔を崩してハハハと笑つた。

その藤五郎の様子が可笑しかつたのであらうか、シマは膝の甚吾に乳をふくませながら、黄色

古城と呼ばれてゐる、直江津から荒川橋と云ふ橋一つへだてた町の町外れに茶店があつた。そこが秀治と吉平の辨當場所になつたのであつた。と云つてそれは、他の大人達がみんなさうするから、いつか二人もそれに倣ひ出したまでのことである。

く稠びた顔でいつになくクスリと笑つたのである。秀治は母のその笑ひを素早く見てとつたのだ。そして自分もニヤリと笑ふと、その笑顔を母にふり向けて見せたのであつた。

秀治は、圍爐裡で丸い白い頬を焚火にほてらせながら、この話を聞いてゐたのであつたが、この母の笑顔、いつにない上機嫌な父の顔を見ると、火箸で何やら灰の上に字を書きながら、わけもなく心の中で、

「俺働くど。俺働くど」

と、呟き通したのである。

しづかな夜であつた。遠い方近くの松林を縫つて走つてゐる汽車の汽笛と軋りが、風に乗つてハッキリと大きく聞えて來た。秋がヒタヒタと進んでゐるのであつた。

初め、茶店で辨當を使ふことなど、子供の二人には空恐ろしかったし第一何錢か費ふそのお金が二人には親達に憚られたのだ。

二人はその茶店とは離れて、まだ町へ入らない碧あとの松の老木の根に腰かけて、冷い柳行李の辨當の蓋を開いてゐたのであつた。この碧は、往時春日城の出丸であつたさうである。この邊には滅多に見られない太い松の老木が、亭々と幾本も大空に聳えて居た。

秀治は、二三度ならず、荷車仲間の他の大人達から、

「秀、汝等も福太茶屋で辨當使へや。こんな大働きしてゐて、二錢や三錢の金が何とある」

と、父の卯作に面と向つて抗辯でもしてゐる様な語勢で誘はれたのであつたが、秀治はその度毎にいつも白い丸い顔でニヤリと笑つてみせて、

「ううん」

と、遠慮つぼく斷つて來たのである。その誘ひから逃げて、秀治は辨當時になると、てんで福太茶屋のまはりへは寄りつかないことにして居た。

姉のハツに會つた時に、秀治はそのことをまつ先に口に出したのであつた。

「姉ちや、仲間のお父つや達が、俺にも福太茶店で辨當使へ使へつて、云ふどもね」
するとハツは、やはり村の駄賃挽きの衆の大人達と同じ口振と語勢で、
「さうさね。秀ちやも茶店で使ひない。二錢や三錢何てであると。もしお父つやが叱つたら、姉ちやが良いつて云つたつて、さう云ひない……」

秀治はそれから、福太茶店で辨當を使ひ出したのである。

——初めて姉のところへ會ひに行つた日、**刃**と云ふ海産問屋へ車の荷を卸したのであつたが、荷を卸して駄賃を受取ると、生れて始めてかうした銀貨などを稼ぎ上げた喜びと、幾月振かで戀しい姉に會へる喜びとで、秀治は吉平を誘つて、**刃**からはつい目と鼻の先の、姉の奉公してゐる會と云ふ海産問屋へ吹つ飛ぶ様に駆けつけたのであつた。

その家の餘りに立派な店構へ——以前姉がこの店へ始めて奉公に出る様になつたとき、母に連れられて一週來るには來たことがあつたのだが、かうして今この店の前に立つて見ると、その店の立派さに今更の様に威壓されて來て、どうしても足がすくんでしまふのであつた。

瓦葺きの、舎と黒く印の浮き上つた白壁の土藏、店の前にある青銅の大きい用水桶、奥行き

深い深い石畳の土間……秀治はその店へ入る術もなかつたのである。姉はきつとお勝手にゐるのであらうと、家の裏の勝手口へ廻つたのだが、やはり足が縮んでしまつて、格子戸を開けて訪れることもならなかつた。幾十分、さうしてお勝手口に立つてゐたことであらう。遂にその日は、姉には會へずにひき返してしまつたのであつた。

三日目であつた。その日も亦、戸を開けて中へ訪れる勇氣が出なくやはり返さう、ひき返さうと思つて、思ひ迷つてゐたのであつたが、すると、ガラリとその格子戸が開いたのだ。瞬間、秀治は傍らの掠の木の蔭へ身をひそめたのであつた。

姉であつた、姉であつた。白い前垂をかけて、手に箆を持つて……。

「姉ちゃー！」

さう呼ぶと、秀治はなんだか泣き出してくるみたいで、それをゴクリと呑み下したのである。

「秀ちゃ……」

姉はいつもの淋しい顔で、しかし唇を浮べてニコリと笑つたのであつた。

「どうしたがね？」

と、此處へ突然、それこそ唐突に現れてきたいといふ弟の出現をいぶかつてゐる姉の目に應へて秀治は弾んだ聲で、

「姉ちゃ、俺、煮乾の駄賃挽きを始めてね。この吉平さと組さ」と、説明した。

「まあ、秀ちやが……」

嬉しさと驚きをまぜた眼差しで、秀治を睨つと見詰めてゐるハツは、もし傍らに仲間の吉平が立つて居なければ、やをら秀治に飛びついてその身體を抱きしめないとも限らない息切れ方であつた。

「さあ、中へ入らない」

しかし、秀治は猶も中へ入ることを躊躇つたのである。

「入らないつてのに……」

やがて會のお勝手の間へ通されて——吉平と二人で黒砂糖を一かけづつ貰ひ、お茶も注いでもらつたのであつた。そこには堅炭がまつ赤におこされて、お湯がチン／＼沸きたぎつて居た。こ

の間で幾人かゝる番頭さん小僧さん達が御飯を食べるのださうであつた。

「まあ、秀ちやが駄賃挽きを……」

その姉に、秀治はその福太茶店のことを話しに出したのである。そして姉の言葉に始めて、よし明日から福太茶店で辨當を使つてやらうと、決意をしたのであつた。

「さうさね。秀ちやも茶店で使ひない。二錢や三錢、何てあると。もしお父ツつやが叱つたら、姉ちやが良いつて云つたつて、さう云ひない……」

さう抗辯したハツの目には、キラリと細い涙が光つて居た。そしてハツは、事新しく弟の顔をうつまでも眺めつづけたのであつた。

歸り際に、又黒砂糖を二人に紙で包んでくれて、ハツは、

「秀ちや、お前これから毎日直江津へ来るがだる。そしたらこれから毎日ここへ寄りないや。姉ちやは待つてるからね」

と、秀治の頭をさすつたのである。

しかしそれから、決して毎日は姉を訪れられなかつた。車のはかどらなさま、荷運びの時間の

都合やら又何となく田舎の家を訪れるのに氣が負けたりして、三日に一度、果ては五日に一度と云ふ按配であつた。すると姉の方で堪りかねて、刃の店やらウ印と云ふ問屋やらへ、見當をつけてその時間には自分の方から出向いて来て、甘蔗のふかしたのをくれたり、時には飴玉をもつてきてくれたりするのであつた。

——福太茶店では、熱いお茶を出してくれて、それに豆腐の汁であつた。今まで口にしたことのない醤油の汁なのだ。うす赤い汁の中に、四角く切つた白い白い豆腐が浮いてゐる。その他葱が入つてゐたり、香ばしい牛蒡の千切りが入つてゐたりした。その汁を一杯のんで、それで二錢五厘であつた。他の大人の中には、その汁を二杯も三杯もお代りする人があつたが、秀治と吉平は葎子張の店の隅つこの松板のベンチの端つこに遠慮つぼく腰かけて、決して一杯よりは吞まなかつた。——今まで一度も味つたことのない美味さ、舌の上へトロンとくづれて行く白い豆腐の味、もう一杯吞んだらさぞや、と腹の虫が鳴くのである。しかし秀治も吉平も、決して二杯とは口にしなかつた。

その汁を思ひ切つて初めて飲んで二錢五厘費つてしまつた時、秀治は怒鳴りつけられるのを覺

悟で、その日の稼ぎ高を父の前へ恐る恐る差し出したのである。

「他の大人衆がみんなさうせい、さうせいって云ふもんだからね……」

姉の言葉は一口も口に出さなかつた。

すると、卯作は案外素直に、

「そか、仲間衆がさう云ふんなら、その位の無駄使ひは仕様あんめい」

と、云つたのである。

母のシマもそれをとりなし顔に、

「秀、どうだ、福太茶店の豆腐汁は美味かつたかや」

と、笑顔を振り向けたのであつた。

秀治は父に叱られなくてすんだ喜びに、わけもなく嬉しくなつて母に甘えて、

「ハア、美味いだて美味いたて……口の中とけさうであつたでね」

と、滑稽に頬をふくらませて見せたのである。そして、平素のさもしい癖が出て、識らず父親

の顔をチラリとぬすみ見たのであつたが、——ニコリと苦笑ひしてゐる父の顔から、

「お父ツつやも、この頃貧乏つたらしくなつたでや」

と、秀治は泌々と感じたのであつた。

福太茶店の直ぐ前方が港であつた。大きい蒸気は遙か沖に停つてゐて、荷物の上げ卸しは舢舨でするのであつたが、福太茶店のすぐ前の別倉川の川口を堀り込んだ箇所へは、小さい蒸気船が入ってくるのである。

大人達は晝飯を食べ終ると、ここで一服するのであつた。煙草を吸ふもの、講談本のさし繪に見入るもの、將棋をさす者、しかし秀治と吉平は辨當行李の蓋をするのもそこそこに、汀へ駆けつけるのだ。

——此處では主に石炭の荷卸しが多かつた。すぐ間近に石油會社があるからであつた。

赤いペンキの輪を塗つた黒い煙突から、黒い煙をモク／＼と吐いてゐるのである。秀治はその煙を見るとわけもなく心を掻きむしられるのであつた。青いツボンに青い服を着た船員達が、狭い舷側の板の上を手放しで歩いて居る。

「吉、あれで船員の人等、水の中へよく落ちないもんだねや」
と、秀治は我事の様子に氣を揉むのである。

「うん」

と、吉平は生返事をしたまま、夢中になつて蒸気船に喰ひつく様に見入つて居る。
遠い沖に浮んでゐる、あの大きい汽船を見たらどんなに素晴らしからうと、二人は話し合ふのだ。いや、それに乗つたら、どんなに楽しからうと、二人はそれからそれへと夢中になるのであつた。

直江津の本町で、あれが船長さんと云ふのだらうか、身にピッタリとついた胸の開いた洋服を着て、帽子には金モールの錨の記章がついてゐるのである。腕には金筋が幾本も入つて居た。その姿を二人は二三度見かけたのである。

「吉、あの人はきつと船長さんだつたんだねや」

と、秀治はその印象を目の裏に浮かべながら、事新しく話し出すのであつた。

「さうだらうねや。船長さんて偉いんだらうねや」

「そりや偉いさ。船の中で一番偉いがだぞ」

そして、二人の話はつきないのである。

濱つづきの砂山かけには、濱ぐみの藪が匍つて居た。――炎天に叩かれ、潮風に撲られこの木は強靱にも砂山の蔭にその細い根を張つてゐるのである。そして可憐な小さい小さい實をつつましくつけるのだ。うす赤い地肌白いポツポツが斑になつて散つて居た。

この頃が濱ぐみの實の熟れ時なのであつた。

二人はこの濱ぐみの實をつまみつまみ、話し合ふ。そして話がつきると、砂の上へ仰向に寝ころがつて、中秋の大空を見上げるのであつた。それから又ひっくり返つて、頬杖をつきながら沖の方を見る。

と、遠い沖合には、この堀割で見る蒸気船の幾層倍も幾十層倍もある様な大きな汽船がモク／＼とまつ黒い太い煙を沖天に吹き上げてゐるのだ。そのまだ／＼遠い沖にはうす青い佐渡ヶ嶋が夢の様にほんのりと浮いてゐる。その佐渡ヶ嶋なんて、海のほんの口元だと聞かされる。すれば、海と云ふものは、一體どんなに廣いものなのであらう。と二人は又話し出すのである。――

その海の上を縦横無盡に走り廻る汽船……さう考へると、秀治と吉平はもう堪らなくなるのであつた。

夜明の三時から荷車を挽き出して、砂土の中に破れ草鞋の指先をめりこませながら、それこそ一寸一寸匍ふ様に重い荷車を挽くことの苦しみも、全身の節々の堪らない痛さも忘れて、このお晝休みのひと時は、二人にはほんとに夢の中の様に愉しいひと時なのだつた。

日は高く、空は青く、そしてこの二人の前途を祝福してくれる様に、妙高山の端麗な秋姿が、いつも日に照り輝きながら、港町の瓦屋根のうしろに毅然として聳え立つて居た。

九

北國地方は、どこの國とて同じであつた。十一月ともなれば木枯し、時雨、氷雨、それから雪となり、吹雪となるのである。

十二月の聲を聞くと、もう満足に陽の目を拜むことはできなかつた。重い低い暗黒色の空の下に、まるで凡ゆる生物を一呑みに呑みつくさうとでもする様な物凄い形相を呈し、海は終日無氣

味な白波を泡立たせて磯に挑みかかるのだ。秀治の父の太吉の生命を呑みこんだのも、この狂暴な波であつたのだつた。

夜となつても白一色に塗りこめる白魔を衝いて、その凄惨なそして佻しい波の音は、夜もすがら村人の身を襲つた。

この、強いシベリヤ風と波の音と吹雪の中で、村人は唯ひたすらに春を待ちつつ、薬仕事に鐵道の除雪人夫の賃銀稼ぎに、女共は細織物の下請の内職、都會地向きのカーテンや壁かけの裝飾細工……と云つた具合に、それからそれへと凡ゆる錢稼ぎに執拗に喰ひ下つて、それこそ爪の垢をとぼしながら、自然の猛威に敢然と闘争をつづけるのであつた。

秀治は、大人の群れに混つて、鐵道の除雪人夫に出だしたのである。父から強要せられたと云ふよりはむしろ自分からすすんでその難行を買つて出たのであつた。

十三の春を迎へたばかりと云へ、メキ／＼と丈も伸び肉もつき出した秀治は、その年輩の子供とはどうしても思へぬ身體附きになつて居た。その故もあつたし、もう一つは秀治の家の事情を秀治の健氣さ、いぢらしさに動かされた人夫頭の思ひ入れからであつたのであらう。秀治は女の

大人並みに一日三十五錢づつ貰つて来たのである。

五郎造と云ふ人夫頭は、女共をつかまへてよく云つた。

「女衆、お前等お父ツつやの惚氣話や詮議立にうつつをぬかしてゐるもんだから、ほれ見さつしやい、子供の秀兵に敵はんねか」

女共は、

「禿親父、俺達が秀公に負けるつて？」

と、五郎造が立ち去つてしまふと、蔭口を叩くのだが、と云つて決して秀治をくさしたり、その風當りを秀治に持つて行く様なことはしなかつた、秀治は誰にでも可愛がられ、又同情を買つて居たのである。だから女共は、唯秀治をチロと見返るだけのことであつた。そして、誰云ふとなく、

「五郎造親父奴、この頃嫌さ亡くしてるもんだから、妬げくさつてのう」

それから皆して、荒れ狂ふ吹雪の中でキヤツキヤツと笑ひこけるのである。

秀治はさうした場面に行き當ると、シャベルの柄に一心に嚙りついてゐる丸い顔をヒョイと上

げて唯ニンマリと笑つてみせるのだつた。そのくせ秀治は、彼の勝氣と根氣強さから、
「あんな嫌さ共に負けてゐるもんか。無駄ッ話ばかりしてゐやがつて……」
と、辨當時間の二三十分だけを除いたら、終日殆んどシャベルの柄に嚙りつき通しだつた。
辨當時になると、人夫達はみんな工夫小屋へ集つた。そこには火だけは薪がドン／＼燻られ、お湯もチン／＼沸いてゐるのであつた。が一塊り二十人三十人、時にはそれが四五十人と云ふ様な大人數では、たとへ半杯のお湯さへ満足には當らなかつた。又僅か二間そこそこの工夫小屋へそれだけの人數が入れる筈もないのである。だから秀治は、雪の中に箕姿の腰を下カリと据ゑてお湯さへなく冷い黍飯を掻きこむことが多かつた。飲水の代りに雪を嚙つて、それで喉をうるほすのだ。

村からは、秀治がらみの子供は、後にも先にも唯秀治一人きりであつた。彼の唯一人の相棒の吉平さへ、さすがにこの仕事には加はらなかつた。又終日雪の中に立ち通し、或ひは吹雪に顔から頭から全身を撲りつけられて除雪する、大人でも一寸僻易する様な荒仕事をどうして十三や十四の子供にできやう。

しかし秀治は、

「可哀想に、繼父だつて云つての……」

と云はれることが、よし口で云はれなくてもそれを目の色に出されることが、堪らなく癪であつたのだ。

「秀、汝のお父ツつや、汝に雪堀人夫に出れつて云つたがか？」

そんな言葉を耳にしようものなら、秀治は猛然とそれに突ツかかつて行つた。

「俺お父ツつや、なにしてそんなこと云ふど、俺錢稼ぎたいから出るのさね。こんな仕事なんともめると。寒くも辛くもねえ」

そして云ふだけ云ふと、秀治は相手にニンマリと笑つて見せるのだつた。と云つて、朝から日の幕まで雪の中に立ちづくめなのだ。息抜きに少し腰を伸ばすと云つても、やはりそれは雪の上であつた。藁靴も雪の冷たさの通さないのは初めの一二時間、永くて二三時間であつて、やがてはその冷さが足から腰から全身へと突き上つてくる。秀治はその冷たさがブルツブルツと來ると兩肢をふん張り、腹にグツと力を入れて二三度武者振ひをするのだ。……

「くたびれたらう。明日は休めや」

と言ふと、

「なあして。おツ母ちや一日中ボタン作つても、十錢にしかならんもん。俺は三十五錢もらへる」

鐵道線路は、村からは十町近くも離れて居た。一日中、大人と同じシャベルを握り通して、一日中吹雪と寒さに叩かれ通した後で歸るこの十町の、而も雪道はどんなに辛いことであらう。しかしその疲労も寒さも、母の一言に會ふと、秀治はみんな忘れてしまふのであつた。

母は圍爐裡に松葉をドン／＼焚き、炬燵に着換の着物を煖めて、秀治の歸りを待つてゐてくれた。父は大抵は家に居なかつた。恐らく、どこかの賭博場へ入りびたつてゐるのであらう。

「秀、かへつたかや」

降る雪に藁帽子を冠つて、門口に停んでゐる母の温い聲に會ふと、秀治は元氣よく、

「ハア」

と、答へる。

と、大人の仕草の様にニツコリ笑つてみせるのだつた。

ボタンと云ふのは、カーテンに縫ひつけられる白い木綿糸でつくる小さい飾り玉であつた。それを一足(百)つくつて十錢であつた。このボタンを一日に百つくるには、食事の時間も惜まねばならないのだ。と云つて、十錢あれば米一升は樂に買へる時代だつた。だから除雪人夫に出られない様な女共は、終日このボタン作りの内職に眼の色を變へて居た。

かうした或る夕であつた。

シマは心待ちに秀治の歸りを待つてゐたのである。炬燵に着換の襦袢をぬく／＼と煖めておいとくれ、そしてこの夜は鱈を煮込んでおいてくれたのであつた。秀治は腹へ泌みこんでくるその何とも云へぬ香を嗅ぎつけると、いきなり圍爐裡へ馳けよつてその鍋の蓋を剥きとつた。

「おツ母ちや、鱈け？」

シマは態と落着いてみせて、

「おー」と、ものしづかに云つた。それから聲を落して、

「汝が、いかい苦勞をしてくれるからねや。……今夜はお父ツつやも居ないし……」

父は又昨夜から家を開けてゐるのである。

この二人は、かうした父の出先を一々詮議立することはしない悲しい癖が何時かついてしまつて居た。

この鱈は西濱と呼ばれてゐる、直江津向ふの名立とか筒石とか云はれる漁場から獲れるのであつた。二匹づつを藁でくくり、これを一かけと呼んで、一かけいくらと云ふ具合に賣買されて居た。一かけは略米一升の値段であつた。したがつてこんな高値な鱈を口にするのは一年に一度か二度、嫁取騒ぎか家の建前か、そんな時でもなければ、どうして滅多に香を嗅げるものではないのだ。

「ホウ、おツ母ちや鱈買ったがけ？」

秀治は大仰に、突狂な聲を出してみせた。

海からとれて間もない生きのいい鱈、白い柔かいトロ／＼と溶けさうな身、ほんとにこの雪國にふさはしい魚の味であつた。

「うんまいの。うんまいの」

秀治は息をもつかずに、黍飯を七八杯かきこんだ。そして母の背中に厚い縮入のネンネコで深々と背負はれてゐる弟の甚吾の口へ、その鱈と熱い御飯を交互に箸で持つて行つてやつた。

「ほら甚、汝も食へ。……どうだ、うんまいか」

甚吾は父に似てキリツと鼻の高い、女の子の様にやさしい顔立の弟であつた。甚吾は兄から箸を突き出されると、その顔でニコリと笑ひ、母の背中で足をバタ／＼させながら、コックリコックリをしてみせるのである。

「秀、汝鱈の骨甚の喉にささせるなや」

そしてシマは目を細め、鼻まで鱈の茶碗につつこんでその汁を吸ふのであつた。

「あゝうまかつた」

箸をおいて、圍爐裡へ近々と立膝をついて、のんびりと煖まつてゐる秀治へ、

「なあ、秀……」

と、言葉を持つてきた母の顔は、今までの母の顔とは全く別な、むしろきびしい目附の顔であつた。

秀治は目を上げて、

「何、おツ母ち……」

シマは、まるで大人に對する様な口振りでその相談を持つて來たのである。

「俺はな、今年の春から信州行きを始めようと、思ふがさ」

「信州？」

「うん。……汝にもこんなに苦勞かけるしな。……信州行きをせば、うんと金儲かる、……」

自分で自分の言葉に誘はれて、シマは筒つぼの袖で漢をシコンとこすつた。

又、吹雪つてきたのであつた。一吹き一吹き、周期的に襲ふ風と吹雪の音が、固く閉ざした板戸にチリチリ、チリチリと吹き寄せた。

秀治はなんだか悲しくなつてきて、言葉も出せなかつた。

この痩せ枯れた砂丘の村から、春になると、豊かな信州の村々へ幾人か、又は一家を擧げて幾軒か雪崩れこんだ。直江津の海産問屋へ北海道や越中の伏木方面から入つてくる、數の子、鹽鮭、鹽鱈、昆布、干鱈、さう云つたものを仕入れて、それを信州の豊かな山村で商ふのであつ

た。この行商の群は恰も渡り鳥の縁に、春出かけては、冬になると又この吹雪と波の音の村へかへつてくるのである。

秀治は突然、喚くやうに母に目を剝いた。

「んだて、おツ母ちや信州へ行けば、俺さびしいもん」

しかし、決然とした固い決意のほどが稠びた瘦せた母の顔の眉見に刻まれて、どうにも動きさうにもない顔色を見ると、秀治はオロ／＼泣き聲になつて、

「んだら、俺もおツ母ちやと一緒に信州へ行ぐ」

シマは初めて聲を出した。聲がかすかに震へて居た。

「汝はな、汝はな、家に居るがど。んでなけりやお父ツツやの飯師まんぢは誰がすると……」

自分が居ない後——夫の無精者では御飯も炊くまい、洗濯もすまい。又それを幸ひに、どこかの性悪女でも家へ曳きすり込まれたら、どうしよう。……

秀治は曇みかけて、尖つた聲を出した。

「んだら、甚は？」

「甚は連れてくさ。甚は小さい者だもん」

秀治は弟が急に憎くなつて、いつにない驍の御馳走に御機嫌をよくしてニコ／＼してゐる弟の顔を、グツと睨みつけた。喉佛の所がえ辛くなつてきて……又聲も出せないやうになつてしまつた。

「直江津からハツを呼びかへしてな。……丸子の大門村へ行ぐがさ。おツ母ちやは新屋敷のお父ツツやによく頼みこんであるがど」

もう秀治は返事もしなかつた。

シマの云つた新屋敷と呼ばれてゐる輝吉の一家は、信州の丸子町在の大門村と云ふ村へ、もう幾年も前から一家を擧げて信州行きをしてゐるのであつた。シマはその新屋敷の家から直江津の荷を分けてもらつて、その近在へ新場所を拓いてそこで商ひを始める肚なのである。

丸い目へ涙をいつばい溜めて、言葉も出せずに自分を凝視めたつきりの秀治の顔へ、シマはとりなし顔に、そして氣兼ねた口調で云つた。

「秀、その代り今年の秋はな、おツ母ちやうんと金儲けてきてやると。……さうせば、さうせ

ば、おツ母ちやは汝にもこんな雪掘り人夫なんかさせもしねえ」

秀治はワツと聲立てて泣くと、いきなり自分の寢床の藁蒲團の中へ、着物も脱がずそのまま潜りこんでしまつたのだ。

幾分も、幾分も……秀治は女の子のやうにシク／＼と忍び泣いて居た。

裏の松林を唸らせる吹雪の音と、それから日本海の波の音が囁みつくやうに、しかし佗しく秀治の枕元を襲つた。

+

春になつた。

秀治の家の庭の椿は、まつ赤に咲き誇り、そしてボタリボタリと散つて行つた。秀治の實父の太吉が、生前自慢の椿であつたのだ。

太吉が死んで十年、椿の木の幹と枝は一段と見事に太り丈り、花の色も一入落つきを見せて來てゐて、美しかつた。

そんな日の朝、秀治は信州へ旅立つ母と姉の竹行李を荷車につんで、驛へ向つたのだつた。

これが別れと思ふと、母と一緒に歩くことが、なんだか無性に腹が立つやうな、又うら悲しい氣持にもなつて、秀治は一人首を下げたまま、母達をすつと後にして無闇と荷車を曳きこくつた。

父の卯作もさすがにこの朝は早く起き、そしてシマとハツを見送りに驛まで出たのである。新屋敷の輝吉の一家との同勢であつた。

信州行きの女達は、眞新しい白い手紙を肩にかけた。これは髪の毛が晴着について汚すのを防ぐためか、それとも飾りの一つなのであらうか、とにかく旅立をする女達はみんな白い手拭を肩にかけるのである。——シマもハツもその眞似をして、やはり肩に白い手拭をかけて居た。

秀治は荷車を停めては、時折背後をふり返つた。そして遠目にもクツキリと白い、母と姉の手拭を見ると、無性に悲しくなつてくるのであつた。

父は脚へ煙管をスパリスパリとやりながら、輝吉親父と何か聲高に話しては笑ひ合つて居た。姉は弟の甚吾を背中に背負ひ、赤い着物と赤い前垂をかけ、そして桃割の髪に新しい丈長をか

けて居た。その髪の銀色の丈長が時折ピカリピカリと朝日に輝いた。

母は——それが母の癖であつた、首を落したまま小刻みに一人スタ／＼と歩いて、首を上げようともしない。……秀治は又、荷車を全身の力で自棄徒に曳つぱり出すのである。——信洲の丸子町とはどんな所であらう、どんなに遠い所なのであらう。……母とは會へないのだ。姉とは會へないのだ。……

米山はまだ眞白であつた。尾神山も。そして遙か行手の妙高山も、まだ白い残雪が厚く、藍色の朝空にくつきりと聳えて居た。

やうやうに春を迎へて息吹き返したこの貧しい砂丘の地は、その青い春空に雲雀が高く囀りわたり、そして海邊の空には、奴風や障子風がいくつもいくつも風に乗つて搖いでゐる。——秀治の曳く荷車の輪の音が、砂地へ喰ひ込んでギンギン、ギンギンと物悲しく響いた。

やがて秀治は、一行よりは先に唯一人、驛へ着いたのであつた。と秀治は、そのまま荷も卸しもせず、「澤潟」と白いペンキに黒く浮き出したその驛名の標識と、遙かな遙かなレールの行方を呆然と凝視めて、只何時までもさうやつて突つ立つて居た。

新しい旅立をする人々の高い笑ひ聲と、賑かなさざめきが、待合室からホームを抜け、果ては前のしづかな沼の水の上へ、遠くさやかに響いて行く。

秀治は、なほ何時までも驛の木柵に凭れて、唯一人ぼんやりと突つ立つて居た。

十一

シマとハツが遠く信州へ出稼ぎに旅立つて行つた當座、卯作もさすがに懸命に働き出した。シマ達への氣兼ねもさることながら、第一には家計が最早どうにもならないどたん場にまで、來てしまつてゐたからなのである。

家屋敷が、柿崎町の農工銀行へ擔保に渡つてしまつたのは疾のこと、たとへ甘蔗一貫目とするにしても、それは皆人の持畑を借りねばならぬ破目になつて居た。村のこととて質屋稼業の家もなかつたが、その代り卯作は、シマやハツの目慾しい持物はみんな、隣り近所果ては隣り部落までのしで、これで米二升、これで豆二升と云つた具合にはたいしてしまつて居たのである。

——自分の家の甘蔗畑の大半は、村の小料理屋の角屋へ渡つてしまつてゐたが、その畑だけは

角屋から小作に貸して貰つて、そこへ甘蔗を作つて居た。シマとハツが旅立つた後、卯作は最早小一人前の秀治を怒鳴りつけ怒鳴りつけでも、とにかく懸命に畑をさくつたり、甘蔗苗を一日中砂にまみれておろしたりした。

五月になると、さすがにこの瘦海でも、能登灣の方から流れ出してくる大葉鰯がかなり多量に獲れるのであつた。これをこの地方では、流し鰯と呼んで居る。この時期は、漁師達の一年中で書入時であつた。

卯作は毎日この流し鰯の舟に乗り込んだ。何しろ身體つき腕つ節の減法強い彼は、性來の小器用さも手傳つて、いざ働くとなるとこの舟にでも重寶がられたのである。

秀治は父がもらつてくる鰯の分前を、母がよくしたやうに目籠に入れては天秤棒で荷負ひ、毎日在方の百姓家へ賣りに出かけるのであつた。村の天秤棒仲間のお嬢連は、子供のくせに殆んど自分等にも劣らない商ひをする秀治のかうした姿を見ると、嫉妬心も手傳つて、

「魂消るねや。まるで子供のやうでねえてがさと、唾をとばし合ふのであつた。」

——二三ヶ月、かうして眞妙に働いてゐた卯作が、やがて又元の木阿彌に返つてしまつたのだ。シマとハツが天秤棒一本で日夜稼ぎ溜める貴い血と汗の金が、ぬく／＼と爲替で送られて來始めたからである。

これだけならまだしも——もう直江津の砂山の女郎屋の女郎も、村の角屋の白粉くさい青瓢箪も、無一文の卯作はてんから相手にしなくなつてゐたのだが、その代り卯作が今度手を出したのは、この村へ流れこんで來て住つてゐた御嶽行者の後家さんであつた。

何處から來たのであらう、やはり信州の木曾からでもあらうか、御嶽さん御嶽さんと一口に村人に呼ばれてゐたその御嶽經の行者は、よく祭の時のニワカの天狗様の格好のやうに、高い一本齒の足駄に杖をついて、占ひや祈禱に村を歩いてゐたものなのであつたが、その行者が盲腸とやらで亡くなつてからは、後へ残つたのは子持たすのナツと呼ばれる後家さんであつた。この女は只者でない、専ら村人の評判であつたが、やはりこの後家は村人の推量通り、きつと水商賣上の女なのであらう。色も鄙びて白ければ、小肥りに顎もくくれ、まだまだ色模様の羽織の二枚もひつかけようと言ふ案配の女盛りであつた。

父がどこへともなく出かけて行つた後、又夜つびて家へ戻つて來ない夜、秀治は我家にたつた一人とり残された淋しさに——遠い信州の母や姉や、又可愛い弟の甚吾の笑顔やらを思ひ浮べて、つくねんと佗しい波の音に聞き入るのであつた。

この後家と卯作との仲が、いつかバツと村人の口に登つてきた、秀治はよくその言葉を耳にしたり、時によると冷笑されさへするのであつたが、しかし父に向つて、

「お父ツつや、どこへ出かけるが？ 俺一人で淋しいもん」

そんな詮議立なぞしたものなら、それこそ薪で肩をどやしつけられても足りなかつた。

父が出かけてしまふと、秀治はよく相棒の吉平をお連れに誘ひに出かけた。終ひには、吉平は秀治が迎ひに行かなくても、夕飯がすんだ頃には定つて、

「秀さ、お晩だのウ」

と、小若衆のやうな挨拶を口に出してやつてくるのだつた。偶に、圍爐裡で煙管を啣へてゐる卯作の姿を見ると、そのまま二十日鼠のやうに軒下からコソと姿を消してしまふのである。

二人は卯作にかくれて、煎鍋で米あられをこしらへて、それを頬張りながら、話と云へば定つ

て直江津の港の話、汽船の話、金モールの錨の記章の入つた帽子をかむつた船長の話であつた。

「秀さ、又秋になつたら荷車の駄賃稼ぎはじめようさ」

「うん」

「福太茶店の豆腐汁はうんまいなや」

吉平は右の頭に盃ほどの小禿があつた。小供の頃に縁側から轉げ落ちたとき出來た傷痕ださうである。少し吃りぐせの吉平は、吃り口調で目尻に皺をよせながら、忘れることのできない直江津の福太茶店の豆腐汁の味を思ひ浮べる。あの福太茶店のすぐ前の、堀割の船の出入の情景、赤いペンキの輪を塗られた煙突からモク／＼と上る黒い石炭の煙……舷側の板の上を小生意氣な腰つきで、水の中へ落ちもせず器用に渡つて歩く少年船夫の持子——今にもポー、ポーと胸の湧き立つやうな氣笛の音がこの場へ響いてくる錯覺を、この二人に起させるのである。

しかしこの前の時のやうに縁側に出るのではなしに、手ぶらで直江津の港へ遊びに行くことなど、秀治にしる吉平にしる同じであつた。

「この野郎、直江津くんだりまで汝何しに行く。官員様の坊ちやんみていたこと吐しやがつて」

さうした罵聲は、云はずもがなであつた。

「早く秋にならんかな。俺待ち遠しいて」

鬼の居ない間の洗濯、吉平は圍爐裡の間の藁の上へ長々と寝そべつて、米あられを頬張つて、そしてまだ來ぬ秋と、遠い直江津の町の情景とを思出すのであつた。

かうした夜の語り草は——この少年等の心に海への憧憬を刻みつけずにはおかなかつた。それは遠い遠い山の彼方の夢の蘭生を夢見るやうな憧憬であつた。否決然と海と戦つて海を征服する、そして秀治の場合は早くあの金ピカ姿の船長となつて母を喜ばせる、早く偉い人間となつて母を安樂に暮させたい一念であつた。吉平の場合はその當がなかつた。あれがお前のおつ母さだでや、と村人の噂に聞く人はあつたが、母と呼ぶには餘りに彼の感情は澁滞して居た。吉平はただ船に乗りたかつた、海へ出たかつた。洋々と何一つ妨げる物のない青い青い海、その彼方には測り知れない幸福と希望の光りが、燦々と照り輝いてゐるのである。……

春ともなれば、初夏ともなれば、この日本海の波の音もさすがに物しづかであつた。むしろそれは、トロトロと眠りに誘ひこんでゆく子守歌のやうな響きであつた。

秀治は吉平と同じやうに、やはり藁の上へ仰向けに寝ころがりながら、直江津港の情景の他に、このしづかな佗しい波の音を聴きながら、もう一つ——たとへ夢にしるまだ一度も見たことのない、裏の海の波に攫はれて行つたと云ふ父の顔、それから信州の丸子と云ふ母と姉の姿、その二人の肩にかかつた白い白い手紙の様を……眞暗い煤だらけの天井板の中にヂイツと思ひ盡くのであつた。

十二

お盆がすぎると、御嶽行者のナツ後家は、おほびらに秀治の家へやつて來るやうになつたのだつた。

秀治が、自分の寢床の藁蒲團の中へもぐりこんでからやつて來ることもあつたし、又眞つ晝間、秀治が畑から忘れ物でもして家へ取りにくると、そのナツ後家が家へ上つて居て、父と圍爐裡で煙草を吸つてゐることもあつた。思ひがけない秀治の出現に遭ふと、

「兄んちや、精出るね。お父ツつやはかうした怠者だから、お前はお前はお父ツつやの分まで働いてく

んないや」

と云つて、ハハハと人を喰つたやうな、そして又色つばい笑ひ聲を出すと、その尻には父の顔へチロリと流し目をくれるのであつた。

卯作は苦虫を噛みつぶしたやうな顔をつくつても、かうした場合さすがに平素のやうに、劍もホロロに我鳴りつける様なことはしなかつた。

まだ宵の口からこの御嶽が来たやうな晩、秀治は夕飯も食はずに家を飛び出してしまふのだつた。發育盛りの彼には、一日中砂に塗れて鉄をふり上げ通したり、又は天秤棒商ひの綿のやうに疲れた身體に、夕飯を一食ぬくことは、泣き出したいほどの苦痛であつたのだ。

彼はよく、暗がりでも様子知れた自分の家の西瓜畑へ行つて、西瓜や眞瓜を貪り喰つた。しかし、これと目慾しい大きい西瓜なぞ割つてしまふものなら、父はこの畝には幾つ、隣りの畝には幾つ、とチャンと數を記憶してゐるのである。まだ碌たま實りもしない青つこを喰べるのが關の山であつた。

どうしても家へかへる氣のしない晩、濱の舟小屋で、そのまま疲勞れて眠つてしまふ晩もあつ

た。しかし、秀治が面當に家を開けたとすると、卯作は只ではおかぬのである。「この野郎、大人くせい眞似をしやがつて、……」だから秀治は、いくら外で夜を明かしても、父の知らぬ間に、夜明け迄にはきつと盜棒猫のやうに自分の寢床にもぐりこんで居ねばならぬのであつた。

秋になつた。

裏の海邊の砂丘の砂かけに、又濱ぐみの實がポツリと實る頃となつたのである。冬期間四ヶ月と云ふものゝ日本海の荒い潮風に叩かれ、夏ともなれば幾十日となく炎天に焼きつけられて……しかしこのささやかな木は強靱であつた。何物にもめげず、焼砂の中にその根を張り、冬となつては、つつましやかにその細い首を傾けて、しかし荒い潮風と吹雪に敢然と生活の計ひを挑みつづけてゐるのである。……くすんだ地味な、ほの赤い小さい丸らな實、ほんとはこの木にふさはしい可憐な實り方であつた。

この地帯一帯の砂山かけには、この濱ぐみの實がいたる所實つては、村の子供達を喜ばすので

ある。そしてこの濱ぐみの實が實る頃には、この地方にも幾日も、幾日も紺青一色に晴れ渡つた秋晴の日がつづくのであつた。

こんな或る日の午後、秀治は全く思ひがけない、母と姉からの嬉しい贈物をとどけられたのである。母達の面倒を見てゐてくれる新屋敷と一口に呼ばれてゐる家の輝吉親父が、直江津の間屋まで商用で出向いてきた序に、村へ立ち寄つたのであつた。

「秀さ、精出るのう。ほれ、これ母やんの届けもんだぞ。これはお父ツつやの分、こつちがお前の分。何が入つてゐるかのう……祭の晴着かも知んねえて」

さう云ふと、輝吉親父はぬくぬく温い秋日射の中で、出ツ齒をむき出しながらハハハと笑つてみせた。

秀治は、畑から上げてきた甘蔗を、上物と屑物の品分けをやつて、上物をセツセと俵に詰めてんでゐたのである。この上物はやがて仕分けのつき次第、秀治は昨年の秋まで母がしてゐた様に、これを中の町の市や在方へ賣りに出かける肚なのであつた。

卯作はどこへ行つたのであらう。朝日沼へ落鮎でも釣りに行つたのかも知れなかつた。

秀治は今日も唯一人、温い秋の日射の中で全身快く汗ばんで、庭先でその仕事に打込んでゐたのである。

秀治はヒョコリと首を上げると、輝吉親父の顔を眩しさに見上げ、挨拶もせず言葉も出さず、ぼんやりと突つ立つて居た。全く思ひがけず母が届けてくれた品、そしてこの人は母と同じ所に住んでゐる人だと思へば、そこに母の顔が偲ばれ、母の體臭が匂ひ出して、喉がつまつてしまつたのである。

「ほれ、何してるの、早く取らんかな」

村では滅多に見ることもない、薄物の絹の羽織を着、首に甲斐絹の首巻をし、帯の所に懐中時計の鎖をダラリと下げた輝吉親父の顔を重ねて凝視めて、それから秀治は始めてニコリと笑つて甘えて見せた。ほんとに甘えたのであつた。

「だつて、俺、手汚いもん」

「ハハハ。さうか。直ぐ手洗つてこいや。……母やんもハツも達者でのう、二人とも揃つて働き者だで、いや働くとも働くとも。秀さ、母やん達は今年はうんと儲けたぞ」

輝吉親父が立ち去つてしまふと、秀治は手の砂を落すのもそこそこに、早速その紙包みを開けにかゝつたのだつた。輝吉親父の云つたやうに、油紙包みは秀治の分と卯作の分と分られてゐたのである。包みを卷いた麻繩を齒で噛み解いて、秀治は奪ひとるやうにその紙包みを開けたのだ。……紺緋の着物であつた。十月十七日の秋祭ももう間もなくであつた。生れて始めて與へられた、そして腕に通してみる紺緋の着物なのだ。村の子供の中で紺緋の着物を着る者と云つては、小山の旦那さんが最勝寺の坊ちや位のものであらう。そしてその着物の下には信州の干栗が一包入つて居た。

「母やん」

と、秀治は浮すつた大きい聲を出した。

しかし、

「御馳走さん」

と云ふ次の言葉が、どうしても喉から出せなかつたのであつた。

大粒の涙が二三滴、秀治の砂埃のついたまつ黒い頬にポロ／＼と流れて居た。

卯作は、秀治が、父の自分の許しも得ずに勝手に包みを開けたのが、いけないと云ふのだつた。

「この野郎、汝誰に斷つてこの包みを開けたがだ……」

節くれだつた腕の拳で五つ六つづけさまに張り倒されて、秀治はぶつ倒れてしまつたのである。泣きもせず聲も出さず、俯伏になつてゐる秀治の耳元へ、卯作は重ねて怒聲を投げつけた。

「シマの阿魔も阿魔ど。水臭い。親子の間で、なんでこれが俺の分、これが餓鬼の分と包みを二つに分けてよこす必要がある」

身を震はせて突つ立つてゐる父の足元から、秀治は突然脱兎の如く素足のまま外へどび出したのである。かうした折、どんな狂暴さを與へるとも知れない父の恐ろしさからと、もう一つは云ひ様のない深い大きい悲しみとからであつた。

日はとつぷりと暮れて居た。

盲滅法に海邊を走つて、やがて秀治は息切と疲勞から、ドタリとその砂の上へ倒れたのである。そして始めて、ワツと大聲を出して泣き崩れたのであつた。……

海空には、佐渡のあたり、島影こそ見えなかつたが、その空に青い大きい星が輝いて居た。すぐ頭の上の空にも、直江津港の夕灯の空の上にも、いつばい降るやうな星屑であつた。ヒタ／＼と冷い秋氣が流れて來た。

秀治は、幾十分も幾時間も、そこにさうやつて蹲まつて居た。どうせ今夜は亦、家へは歸れぬのであつた。

秀治は、しづかに判斷してみるのである。——父の罵聲と狂態は、第一は自分が父と御嶽後家のことを手紙で母の元へ知らせたやつたと、父が誤解してゐることであつた。……幾度、それを書いて知らせたらうと、思つたか。尋常四年までしか出ないのである。それに四六時家事の手傳ひに追ひ廻されて、學校へ出る日よりは休む日の方が多かつた秀治であつたが、しかし秀治は學校でも頭がすば抜けて良いと、直右衛門先生から始終褒められ通したのであつた。手紙位ならどうやら郵便屋さんの困らない程度に宛名をちゃんと書けるのである。しかし、どうして、この

大きい悲しみを母の元へ知らせてやれようぞ。秀治は書く度に、父の目を盗み盗み藁半紙に牛蒡筆で書いたその手紙を、ひき千切つては圍爐裡の火の中へ素早くコツソリ燻べつづけて來たのである。

——もう一つは、自分の包みの中に、母が金を入れてよこしたのではなかつたかと、父が推量したのだと云ふことであつた。しかし事實、金は一錢も入つてはゐなかつたのである。

母も亦、若しそんなことをすれば自分の身代りに、秀治がどんなことをされるかわからないこと位、ちやんと思慮のつく惻い母であつた。……

秀治は砂に腹匍つたまま、最早大人に近いさうした推測をあれこれと思ひめぐらしてみるのであつた。

砂はもう冷えきつて、夕飯を食はない空腹へは、その冷たさがヒタ／＼と傳はつて來るのである。

ふと秀治は、うす暗がりの中で、目に入つてきた藪を、手でまさぐつてみたのであつた。濱ぐみの藪であつた。そして濱ぐみの小さい丸らな實であつた。甘酸つばいその味が堪らなく美味し

く、又堪らなくうら悲しく、秀治の舌の上に觸れてきたのである。

濱ぐみの實をつまみつまみ、秀治は直江津港の方を見た。晝間はその町影は見えないが、夜ともなつて港の町の灯が點り出すと、その所在が定かに判るのであつた。

信州とは、あの直江津の町を通り越した、遠い遠い所である。山の多い、山ばかりの所だと聞く。母の居る、丸子町と云ふ村の在る村とはどんな所なのであらう。……

ふと、秀治は其處に、黛色にボヤけて浮んできた信州の山影と、母と姉と、弟の甚吾の元氣な楽しさうな笑顔とを見たのであつた。

中秋の夜を徹して、日本海の波の音は、ザブリザブリと磯を打つた。

最早雁の群が、北へ北へと、幾群か秀治の頭上を、天の川の下を翔び去つて行つた。——秀治は、いよ／＼家出を、村からの出發を、決意したのであつた。船員なのだ、金ピカの服と帽子を冠つた船長なのだ。——

十四

時雨がハラ／＼と降つて居た。

今夜も波の音が高く、佗しく鳴りつづけた。間もなく、又あの陰惨な永い冬の期間がやつてくるであらう。

卯作の出かける、而もかうした時雨の夜の機会を、秀治と吉平はためつづけてゐたのである。

卯作は恐らく、時雨の中を歸つてくる鬱陶しさから泊つてくるのに違ひなかつた。

今年も亦二人でつづけた直江津への煮乾の駄賃稼ぎや、秋先の甘蔗賣りのくすね金やらで、二人ともやうやうに最近、横濱までの旅費を貯めこみ得たのであつた。

村人の口が餘り五月蠅くなつたので、御嶽後家は夏頃のやうに秀治の家へ泊りにやつてくるやうなことはしなくなつて居た。その代り、卯作がコツソリ出向いて行くのであつた。

「秀さ」

コトリと、雨戸を叩いた吉平の聲を聞きつけて、秀治はこれも落し聲で、

「晚いねか」

詰つたのである。そして二人はニコリと目で笑ひ合つた。

「だて、いざとなると仲々出にくいや」

秀治も、もうすっかり身仕度をして居た。——直江津と云ふと遂目と鼻の先、ここから船に乗つたのでは、すぐ足のつくことは必定だつた。二人は丹念に小心に、直江津の駄賃稼ぎの折、機會ある毎にぶら／＼歩きの船員をひつ掴まへては、船員になる手順を聞いておいたのである。

横濱と肚を定めたのも、さうした船員達からの入智恵からであつた。横濱へ行けば、どうして、こんな直江津の港で見るやうな小つぽけな船でなしに、こんな船の幾層倍もある船が岸壁へピタリと横附になると言ふ。そしてさう云ふ船は、佐渡や新潟や北海道や、又越中の伏木港や、そんな内海を廻つてゐるのではなしに、支那から印度から、果ては南洋と云ふ遠い所やら、想像のつかない遠い海まで悠々と航海するんだと聞かされて、二人の胸はもうどうにも押へきれないのだ。——

吉平は煤ぼけた小さい柳行李を一つ持つて來た。

「俺、これ甘蔗穴の中へ藏ひこんでおいたがさ。甘蔗喫いど」

吉平は、甘蔗の臭ひのつく筈もないその行李を嗅いでみる眞似をして、ハハハと笑つてみせ

た。

「馬鹿！ なにして甘蔗の臭ひつく。そんなこと云つてる間に、早く握り飯握れや」

秀治が、父の出かけた後直ぐさま手廻しよく炊いておいた一釜の飯を、二人は梅子を入れては、足元から鳥のたつ様な仕草で握り飯にこさへた。

その握り飯を大風呂敷で腰にギユツと結へつけ、行李は肩に、二人とも股引の足にキチリとした、ま新しい草履穿き、そしてその頭から雨具の毛布をスツポリと冠つた粉装であつた。

秀治も吉平と同じやうに、古びた小さい柳行李を肩に背負つた。その行李の底深く、母が屈けてくれた紺緋の着物を藏ひこんだのである。まだ一度も着たことのない着物、秋祭の日にもそれは着なかつたのであつた。……

雨戸を開けて外へ出ると、先に立つた吉平は愚圖ついゐる秀治を促すのだが——秀治は貧る様に家内を幾度も幾度も眺め廻した。これが最後の家の佛であつた。

——母と二人して鱒汁を食べた圍爐裡、カンテラの燈の下で、母と二人してボソ／＼といつまでも語り明した炬燵——母に、姉に、甚吾に、一目會つて行きたいと思ふ。しかしそれはこの決

意を、この雄圖をいつべんに打ち碎かれてしまふのである。

母達は十二月の聲を聞くと、間もなく村へ、家へ歸つてくる手筈であつた。父のこの行狀を、この大きい悲しみにぶつかつて、母は何とするであらう。母のさうした悲しみを慰めてやらすに、その場にぶつかふことの居堪らなさから逃げ出してゆくとは、なんと不幸者であらうと、悲しくも既に大人心を持ち合せた秀治は思ひつづけてゐたのであつた。しかし今の自分には、母を慰める手段がないのである。父の狂態暴狀を止めるには、自分は餘りにも幼すぎるのだ。

——今に、今に、もう暫く經つて、この大海を、南洋とやら云ふあの大海を乗り切るやうな立派な自分になつた時に、母を始めて心から慰めてやる、働つてもやれるのだ。——

「秀さ、何愚圖々々してゐるがだ？」

「うん」

秀治はこれが最後の我家の雨戸を、それがちやうど母の身體に觸れるやうに、もの柔かくピタリと閉めると、

「吉さ、お待遠さま」

と、見えない闇の中でニカリと笑顔を吉平に見せた。

どこまでも暗黒の空から、時雨がペラ／＼と激しく降りつづけ、木枯の唸りも強かつた。二人はこれから直江津の町まで駈けるのである。そして横濱へ夜行の汽車に乗るのだ。

「さあ、んぢや駈足だぞ」

「うん」

二人は、後をも見ずにヒタ／＼と砂を蹴つた。

この二人の前途を祝福するやうに、祈るやうに、そしてその別れを惜しむやうに、秀治の實父の太吉が生前手づから植えた椿の木が二株、夜目にも木枯と時雨の中に毅然として突つ立つて居た。

戯曲にゆんさす 一幕

いさんゆじ

人

五 大 シ マ 利 正 甚
郎 衛 門 瀧 ツ 枝 吉 吾 吾

村 所 縁 次 長 父
會 筋
議 の の
員 母 娘 男 男

同 同 町
看 藥 の 病
護 劑 若 院
婦 師 醫 師

所

信越國境に近い、俗に上越と呼ばれてゐる地方の、日本海の海岸線から少し山手へ入つた地にある、或る沼ほとりでのこと。

舞臺

沼ほとりにある甚吾の家

上手——母屋の一部、と云つても母屋の居室は二つほどしかない。家の大部分は、「じゆんさい」製造の、セメント塗りの三和土にとられてゐるのである。その三和土の棟の一部と、それにつづいて鍵なりにできた母屋の一部が見えるのである。煤ぼけたガラス障子のはまつてゐて、母屋の内部は見えない。

中央、格好な所に押上ポンプがある。水盤ができてゐて、傍らに大きい水桶がある。水盤では勝手元の洗ひ物をやり、大きい水桶は主にじゆんさい用の瓶を洗ふのである。

三和土の棟の軒下に、トタンの桶が一本立てかけてあるが、これは雨や雪の日の洗ひ物

に、水を家内へひくためである。

廣々とした庭。

下手——納屋の一部。それをおぼつた滴るばかりの新緑の木々。

六月中旬の日の、明るい午後。

田植が終つて、農家では「農休み」と云つて、二三日のびくと足腰をのばしてゐる時期である。

青い空。日に輝いた青い沼が、のぞまれる。

利吉が、押上ポンプの傍らの水桶で、空瓶を洗つてゐる。これは、やがて新芽のじゆんさいを詰める用意である。ビール瓶が多い。たまには一升瓶もある。

利吉には右手がない。左手で洗つてゐる。利吉は傷夷軍人なのだ。歸還してから、まだ二三月しか経つてゐないのである。世間に甘へたくはない氣負ひが、顔にも物腰にもうかがはれるが、まだとても危つかしい手附である。

雪と吹雪と雪と……あのながいながい冬期間の暗さを思へば、この初夏のこの地の、この明るさはどうであらう。陽にキラ／＼輝いた青い沼、滴るばかりの緑、小鳥の聲があちらこちらでする。……利吉、洗ひしなに、時々顔を上げて青空を仰ぐ。

間――。

近くの町の病院の若い醫師と、藥劑師と、看護婦がやつてくる。この沼へ釣にやつて来たのである。藥劑師は一本竿だが、若い醫師は都會風なつき竿や釣道具を背負つてゐる。藥劑師だけは、利吉とも顔馴染なのである。

藥劑師 今日。今日は。

利吉 (顔をあげる) あ、先生……。

藥劑師 おう、おつちやん(次男を云ふ)か。御苦勞さまだつたね。何時、かへられましたか？

利吉 (立ち上る。ほく笑みつつ) ハッ。三月におゆるしができて……。

藥劑師 (利吉の右手の様子に氣付き)、あ、そうでしたか。(改めてお叩頭をする。うしろの醫師も、看護婦も藥劑師に做ふ)

利吉 いえ、なに、ほんの……。

藥劑師 さうでしたか。年中藥箱をひつかき廻してゐるもんで、つい世間のお噂にも疎くなりましてな。いや御苦勞さまでした。(三人、重ねてお叩頭をする)……それにしても、右手とは、何かと御不自由でせう。

利吉 なあに、腕ぐらゐですから。(三人の目が、なほも自分の右手の跡に濺がれてゐることに氣附くと、軽くはづして) 失生、今日は釣でありますか。

藥劑師 ハア。いやどうも。今日は久々で半日お暇が出たもんですからな。(背後をふりかへつて) それに今日は、この新任の町井先生を、私の穴に案内して、ひとつ私の腕前のほどを大いに實證しておかうと思ひましてな、ハハハ。

醫師 道具だけは一人前だが、僕はまだまだ駆出しなんですよ。今日はどうやら、山田さんに白旗を上ることになるらしいな。

薬劑師 町井先生、さう急に逃げを打たんでもよろしい。先刻の、あの鼻息で、今日は是非ともひとつ腕くらべと行きませうや。(背後の看護婦をふりかへつて) ねえ、永野君……。

看護婦 え。(ほく笑んでゐる)

利吉 いや、お楽しみでありますな。……(薬劑師に) 先生、まだなか／＼釣れますよ。今年は雪が深かつたもんで、それだけ喰ひも延びたわけなんでせうか。

薬劑師 それは有難い。少し時期が遅れたんで、内心どうかと、とても心配して來たんですが。……たつた二人つきの、同僚の若い人が、やはりつい先月應召しましてね、まだその後釜が來ないもんだから、今日までどうしても、竿をかつぎ出せなかつたんですよ。……さうですか、釣れますか。(竿をしごく)

利吉 昨日も、町の鐵道の人達が四五人見えましたがね、皆さん、なか／＼上げて行きましたよ。

醫師 そう聞くと、もうムズ／＼するな。さあ、山田さん、早速はじめやうぢやありませんか。(うしろの看護婦を促して) 永野さん貴女にも今日は、手ほどきをしてあげますからね。

看護婦 え。

薬劑師 よーし、ぢや、初めやう。(利吉に) おつちやん、時にまた舟をたのみますよ。

利吉 舟ですか？

薬劑師 (その顔色をみてとつて) それは困つたぞ。

利吉 先刻、親父さんが、見廻りに乗つて行つたんですがね。……そろそろ、新芽の時季ですからな。

薬劑師 さうでしたね。……そいつは、残念だな。

醫師 ぢや、こちらは、あのじゆんさいの、……

薬劑師 さうなんですよ。

醫師 それで、分つた。(三和土の棟をのぞきこんで) 先刻から、空瓶をあんなに何にするのかと思つてたんですがね。

薬劑師 旅出ですよ。東京やら關西方面やら、この頃では、とても手廣く捌けるんですよ。

醫師 さうですか。

利吉 なあに、大したこともないんですがね、……(沼の方をのび上つて)しかし、もうそろそろ上つてくる頃ですよ。芽の出具合を見るだけですから……あんた方が、岡で二三分もやられてゐたら、ちき上つて來ますよ。

醫師 さうですか。ちや山田さん、しばらく岡でやつてゐやうぢやありませんか。

藥劑師 さうですな。(利吉に)ちや。お父つあんの上つて來られるまで、岡でやつてゐますわ。

利吉 さうして下さい。まだ陽が大分あるから、今からでもまだゆつくり釣れますよ。

藥劑師 ちや。

三人、會釋して納屋脇へ消えかかる。利吉、うしろから……

利吉 精々釣つておいで下さいよ。もしかしたら、今年がこの沼の釣り納めになるかも知れませんがね。

立ち去りかけた藥劑師の山田、聞きとれぬままに、「え？」と、ふりかへるが、利吉は不用意に吐いたものの、二の言葉を重ねて聞かせたくない肚から、ほゝ笑みながら、

「まあ精々釣つてきて下さいよ」と勵ます。

藥劑師たち、拾言葉で、元氣よく釣場へ出かける。

間――。

馬の鈴の音が、はるかに聞えてくる。これは、沼の對岸の街道を、在方の荷馬車が町へ荷物をはこぶのである。

小鳥の聲。

マサ枝、ひっそりとやつてくる。

マサ枝は、甚吾の家とは縁筋に當る、藏吉といふ家の姉嬢であるが――親同志の間では言はず、語らず、利吉の兄の正吾との婚約をとり結んでゐるのである。

利吉の應召中、何かとマサ枝が甚吾の家へ手助けにきたのも。そうして親達の下心からであつた。しかし、マサ枝と利吉の心は既に利吉が應召前からそこはかとなく、結ばれてゐたのである。――

マサ枝、手に風呂敷包をもつてゐる。この地方で、毎年農休みと言へば、どこの家でもきまつてつくるちまき(笹餅)である。

マサ枝 今日日は。

利吉 (顔をあげる)

マサ枝 これ……。 (風呂敷包を差し出す)

利吉 (受とつて) ちまきだね。御馳走さん。

マサ枝 兄ちゃん、まだ歸りなんないの？

利吉 うん。もう、そろ／＼歸る頃だと思ふども……。どうも、仕事が手につかん。役場から呼出しがあるからには、きつと縣廳から色よい通知があつたのに違ひないと、思ふがさ。

マサ枝 さうだと、兄ちゃんも張合だどもねこの沼の埋立では、兄ちゃんもどんなに苦勞なすつたか。

利吉 兄貴も偉いな。もつとも、これが成功すると、——兄貴の一生一代の大仕事さ。何しろ三十町歩の水田がたちどころに開かれるのだからねや。

マサ枝 ほんにね。

利吉 (信頼の面持。空をみつめる。それから、沼の彼方を見やりながら) でも、家の親父さんに

してみれ、兄貴の熱意と説に動かされて、遂に承諾はしたといふものの、内心はやはり心残りなのさ。……今日の沼の見廻りだつて、それだ。兄貴が、役場から呼出しをうけて、村會議員の大瀧さんや五郎衛門さんと連れ立つて役場へ行く、その結果が吉と出るか凶と出るか、今日と言ふ日は、ほんとに關ヶ原なんだ。何もその今日に限つて新芽の見廻りに出ることなんてありやしない。……そりや親父さんだつて今の御時勢や日本の立場を理解してゐるからこそ、何せ今のこの増産のやかましい時だからねや、三十町歩の田ができる、……他村と違つて、砂地の瘦せつ細しか持たないこの村に、突然三十町歩の田甫が降つて湧いてくるとなると……兄貴の説に否でも應でも賛成しなけりやならん譯だが……何と言つても、親父さんはこの沼で生れこの沼で育つてきた人間だ。而も、縣下ではまだ何處でも「じゆんさい」のじゆの字も言はなかつた時分に、この沼のじゆんさいの旅出しを初めたんだ。それ以來二十年と言ふもの、親父はじゆんさいの採取と販賣に、ほんとに身も魂も入れて來たんだからな。……處が、今そのじゆんさいを失ふことになるんだ。親爺さんの氣持も、無理ないと思ふ。……

マサ枝 さうだわね。……でも、兄ちゃんの歸らない前に、お父つあん上つて來てくんるとい

ゝがね。……若し兄ちゃんが歸つて來ても肝心のお爺つあんが沼見をしてたんぢや、お互ひ氣まづいものになるもの。

利吉 さうなんだ。おれもそれで、先刻からヤキモキしてるがさ。と言つて、おんつあんをわざ／＼止めだてに行くことも、氣が負けるし……いや、おれがやはりこんな瓶洗ひなど、今日と言ふ日に限つてははじめたことも、それなんでや。みんな、お父つあんの氣持を酌んでの上のことなんだ。……

二人沈黙。

小間——。どこかで盆唄の聲がする。

利吉 (考へこんだマサ枝の氣をひき立てやうと)しかし、お父つあんも、もうそろそろ上つてくる時分さ。それより肝心なのは、兄貴の話の方だ。ほんとにお上から許可が下りてくれると良いがなあ。……俺はこの間ずつと家をあけて居たんで、何も分らないが、俺が歸つて來てからにしたつて、この三月と言ふもの、兄貴はそれこそこの仕事の爲に、文字通り寢食を忘れてかかつてゐるんだからなあ。

マサ枝 おまん(あなたほどの訛)が戦地へ行かれた翌る年から、兄ちゃんこの仕事に三年越しだわ。何しろ仕事があまり大つかいのと、それに若い人達の手も足らなしするし、村の人達、みんな尻込みしてしまつてね……

利吉 自分の村の悪口を言ひたくはないが。何せこの村と來たら、昔からまるでひつ込思案なんだからねや。新しいことと言へば、障子の張替をすることも嫌なんだ、恐いんだ。他人の顔色をうかがつてでないと、出來ないんだからな。……兄貴も随分と骨を折つたらう。

マサ枝 どんなに御苦心なすつたか。……

小間——。

利吉 まあ／＼、ここでかうして井戸傍評定をしてゐても、はじまらない。それより、ここへ持ち出した奴だけでも、早く洗つてしまはう。お父つあんももう上つてくる頃だ。

利吉。瓶を洗ひにかゝる。

マサ枝、それを止めて……

マサ枝 止めなさいや。おまんそんな不自由な手で……。若しこんな仕事をなさるがなら、私を

一寸呼びに来てくんなればいいのに。どうせ今日は、農休み、一日遊んでゐるんだもの。

利吉 (残された左手を大きく振りながら) なあに、こんな仕事、俺にちようど打つてつけさ。(傍らの風呂敷包をさして) その代りほれ、ちまきを御馳走ごちそうになれたねかや。家は女手もなし……ほんと言ふと、マサちやの家からくれるのを、當にしてゐたがさ。(ハハハと、明るく笑ふ)

マサ枝も、目で笑ふ。

利吉 (ふと、眞剣な表情になり) 女手と言へば、ね、マサちや……今日はちうよどいい折だ。今日言はう、明日言はうと、この機を待つてゐたんだが……。

マサ枝 (ヂイツと、利吉を見つめる)

利吉 おまん、早く俺家の嫁さんになつてくんないか。……

マサ枝 (みつめてゐる)

利吉 兄貴の嫁さんになつてもらひたいんだ。

マサ枝 えッ!?

利吉 (獨白のやうに) 出征の間、弾の下をくぐりながら、クリークの泥水にひたりながら……俺

いつも、ふと、その事を考へてゐたんだ。決して僻みや嫉みぢやない。俺はほんとに、家の兄貴を心から信頼してゐるんだ、……そ、それに、マサちや、兄貴は、おまんが好きなんだ。

マサ枝 (無言)

利吉 俺は知つてゐる。兄貴はおまんが好きなんだ……(小間)俺が萬々一武運拙く、無事で村へかへつた時に、おまんを見貴と。一緒になつてゐてくれたらいいと、……。

マサ枝 (うらめしい眼ざし)

利吉 それに、俺はこんな身體になつたんだ。こ、こんな手になつてしまつたんだ。

マサ枝 おまん、そ、そんな悲しいこと言ひなつて……。 (ふいと、堰をきつて忍び泣き出す)

間——。

小鳥の聲。新緑を射た初夏の午後の明るい陽射。

正吾が知らぬ間にきてゐる。喜びの色で、急ぎ足で役場から歸つてきたのであるが、この二人の様子に、ふと納屋かげに身をひそめてゐたのである。

正吾、つかく〜と進み出て、唐突に――

正吾 (はげしい語調で) 利吉、こんな身体とは何だ。こんな手になつて、とは何を言ふんだ!

利吉 アツ、兄ちゃん……

マサ枝 兄さん……

正吾 そ、そんな御勿體ない言葉を、なぜ一言でも口にするのだツ!

利吉 す、すみません。(不動の姿正をとり、深く首を垂れる。)

問――。

正吾 利吉、今日はちようどいい機会だ。マサちやも来て居てくれる。……お前が歸還してからと言ふもの、このことを切り出さう切り出さう、と思つてゐたんだ、が何しろ埋立工事に追ひ廻されてゐて、ついぞの折がなかつたんだ。……(強く)利吉、お前はマサ枝さんと一緒になるんだぞ。

利吉 えッ……!!

マサ枝 ……?!

正吾 利吉、俺がこの三年間、嫁をとらずにゐたのは何のためだつたと思ふ。勿論、お前が戦地で苦勞をしてゐてくれるのに、兄貴の俺が嫁とり騒ぎなど……さうした氣兼ねもある。しかし知つての通り、俺の家は女手がない、手不足だ。又銃後のお務の上から言つても、むしろ嫁を貰ふのが至當なんだ。そんな氣嫌なぞ今日考へてゐる場合ぢやない……。

利吉 そ、さうなんです。

正吾 家のお父つあんも、どの位すすめたか知れぬ。マサちやのお父つあんお母つさんも、幾度ここへ足を運んで来てくれたか……。早くマサちやを貰つてくれつて……

利吉 兄さん、私も戦地で、いつもその事を願つてゐたんです。

正吾 まあ待て。……それを振りもぎつて、今日まで嫁入をしなかつたのは、一體何だと思ふ。

……お前が、お前が若し無事で歸るやうな日が來たら……その時こそ、マサちやと一緒になつて貰はうと思つて……。

マサ枝 兄ちゃん……。 (前よりはげしく啜り泣く)

いさんゆじ

利吉 兄ちゃん、俺は嫌だ。私は嫌です。そ、そんな事が出来るものか。

正吾 出来るも出来ないもない。三年の間。不自由をしのび、お前の歸る日をヂイツと待つてゐた。俺のこの氣持が、お前には分らないのか。……そ、それにお前は貴い右手を、立派に皇國にささげたんぢやないか。

利吉 兄さん、こんな腕の一本や二本ぐらゐ……。

正吾 いや、さうでない。貴い腕だつた。……マサ枝さんは、お前のこれからの右腕だ。お前が皇國にささげた腕の代りに今度は神様がお前の新しい右腕として、マサ枝さんを與へて下さつたのだ。

利吉 兄ちゃん！

正吾 マサ枝さん、これで俺の氣持がわかつてくれたと思ふ。弟には右腕がないんだ。おまゐは弟の右腕となつて、影身はなれず、どうか一生面倒みてやつて下さい。

マサ枝、一層はげしく泣く。

利吉も泪ぐむ。

間——。

また馬の鈴の音が、さやかに響いてくる。日が少し翳つたやうだ。

正吾 マサちや、泣くことはない。これでいいんだ。これでいいんだ。……さあ、さうと定まれば早速この話をすゝめねばならん。……利吉、時にお父つあんは？

利吉 ハア……今しがたまで、ここに居られたんだが……。 (少し狼狽える。)

正吾 さうか……利吉、喜んでくれ。話がうまく行きさうだぞ。

利吉 (はづんで) 縣廳から許可が下りましたか？

正吾 いや、まだそこまでは行つてゐない。近い内に縣廳の技師の方が、實地踏査に来て下さると言ふんだ。

利吉 そ、さうですか。

マサ枝 まあ！

正吾、利吉、俺の提言がきつと容れられるぞ。朝日沼へ水を落すんだ。崖一つ破りさへしたら、

いさんゆじ

良いんだからなあ。それに朝日や長崎の沼は摺鉢式にまん中が深いが、この沼は幸ひのんべらだ。水深だつて知れたもんだ。なあ……。

利吉 さうです、さうです。……しかし、兄さんは偉いなあ。俺達なんか、やはり起きるから寝るまでこの沼を見てゐるくせに、その點にちつとも気がつかなくつたんだから。

正吾 技師さんが、一週間足らずの内に、来て下さる。そして測定の結果、若し工事が可能なら、すぐにでも許可して下さると言ふ、御通知なんだそうだ。さうなれば、勿論お上で補助もして下さる。役場でも、村長さん初め皆さん、とても喜んでくれてな、偉い騒ぎさ。……（強く）利吉、さあ村中が丸となつて、この工事にぶつかるとだぞ。村中が揃つて鉄を振ふのだ、モッコをかつぐんだ。トロを押すのだ。……嗚呼、田が拓ける、田が出来る……。

利吉 兄ちゃん、素晴らしいなあ。俺もやる。たとへ腕が一本でも、モッコかつぎなら平氣だ。……私もやります。……さうだ、お父つあんに知らせて來やう。お父つあんも、どんなに喜ぶか。

馳け出さうとする。

マサ枝。とどめて。

マサ枝。私が行つて來ます。

利吉 さうか、ぢやたのむよ。

マサ枝、駈け出してゆく。

正吾、その様を、ほゝ笑をもつて見送つてゐたが……やがて空を仰ぎ、沼の彼方を瞞めて、

正吾 あゝ、これで俺の苦心も酬いられたんだ……正吾の大風呂敷奴、何をとてつもないことを言ひ出してと、てんで馬の耳に念佛だつた村の者を、毎夜一軒々々に戸を叩き説き伏せて廻つたんだ。そんな晩が幾十夜つづいたか。あんまり張合がないんで……まつ暗な雲の晩や雪中、村からの歸り、この沼ほとりをトボ／＼歩きながら……俺はこの仕事を幾度ぶん投げ出してしまはふと思つたか知れぬ……。

利吉 兄ちゃん、よく分ります。

正吾（キリツと振り向いて）利吉、しかし、そんなことはどうでも良い。努力はこれからだぞ。お前もこの兄ちゃんの片捧を、しっかりと擔いでくれ。榮譽ある傷痍軍人のお前が、まつ先に

立つてくれたら、この仕事はどれほどはかどるか知れんぞ。……何しろ大工事だからなあ。
利吉 やりませうとも、やりませうとも。

正吾 一匹一人前の身体をしてゐながら、不幸まだお上に召される順番に恵まれない俺は戦地に
立つたつもりで、ほんとにこの仕事に精魂をさゝげるんだ。抜身の銃剣を握つたつもりで、血
のにじみ出るまで、鉞を握りしめるぞ。

喜びと興奮の沈黙がつづく。

甚吾、マサ枝に促されて馳けてくる。

甚吾 正吾、良かったなあ。

正吾 お父つあん、聞きましたか。

甚吾 うん。(馳け出してきた疲労に傍の石へドカリと腰を卸す。……正吾の顔をヂイッと見上げ
て) お前もこの仕事では、随分と骨を折つたが……。

正吾 お父つあん。骨の折るのはこれからですよ。今までの苦勞なんて、物の數ぢやない。

甚吾 そりや、そうだ……。

小間――。

正吾 (改まつた口調で) お父つあん、しかしいざとなると、やはりお父つあんには、なんだかす
まない氣がする。

甚吾 (立ち上つて) 正吾、また、な、何を言ふんだ。

正吾 いえ……お父つあんはこの沼で生れた人間だ。この沼で育つた人だ……。

甚吾 そ、それは、お前も利吉も同じぢやないか。

正吾 いえ、私の言ふのは、そのことぢやない。……お母つさんを失つてこの方十幾年、お父つ
あんは男手一つで、幼い私達二人を今日まで育てて来て下すつた。而もその初め、田をつくる
にも人手はなし、蠶を飼ふにしても同じこと、……傾きかけた家を持ちこたへて来たのは、皆
お父つあんのお力だ。いや、この沼のじゆんさいのおかげだつたんだ。

甚吾 正吾……。

正吾 ところが今、お父つあんはそのじゆんさいを失ふことになる……。

甚吾 あ、ありがと。(強く) 正吾、ところが、今は違ふぞ。……この沼がつぶれて、じゆんさい

が採れなくなる、それが何んだ、それは俺達一家だけのことに止まることぢやないか。考へて
みりや、じゆんさいなんて、都會地の、それも口贅澤な人間の精々ビールのつまみになる位
が、關の山だ、それが今、大事なお米をつくる田圃に代るんだ。而も何町歩も、何十町歩も。
…何百年の昔から、この沼の周圍にも村はあつたんだらうが、この沼をつぶして田圃をつくる
なんてことを考へ出したのは、正吾、お前が最初で、而も終りだぞ。

正吾 お父つあん、あんまり褒めないで下さいよ。なんだか眩しくなつてきた。

甚吾 眩しいことがあるものか。俺はさう思ふと、鼻が高いんだ。

利吉 兄ちゃん、ほんですよ。

甚吾 俺は何故、もつと早くこのことに氣づかなかつたかと、此頃熟々考へてゐるんだ。その
爲、お前の説に頑固に反對もした。随分氣苦勞もかけたことと思ふ……。

正吾 お父つあん……。

甚吾 正吾、ゆるしてくれ。……いや、ゆるしてくれるか。

正吾 な、何をお父つあん、ゆるすもゆるさないもあるもんですか。今のお父つあんのそのお言

葉だけで私はどれだけ力が出たか……。

甚吾 ありがと。ありがと。……實はなあ正吾、今日俺はお前が役場へ出かけて行つた後、今ま
ですつと沼へ出てゐたのさ。……新芽の出来按配を見て居たんだ。……

正吾 えッ？

利吉 (心を動搖さして)、お父つあん、何もそ、そんなことを……。

甚吾 しかし、これは誤解して貰つちや困るぞ。俺は今更じゆんさいに未練が出て、それで見廻
りになぞ出かけたんぢやないんだ。俺は今日、役場からのお達しで、お前が出かけて行くとな
つた時、この事の成功をちやんと見抜いたんだ。となると、なあ正吾、利吉、……このじゆん
さいは今まで二十年、俺をも、そして幼いお前達二人をもみんな餓もさせずに、食べさせて來
てくれた大恩人なんだ。……。

利吉 そ、さうです。

甚吾 それから、たとへ僕のやうな者の手で作り出したこの沼のじゆんさいでも、それを永年最
負にしてきて下すつた顧客の間屋さんや、又名々のお客さん達、先刻は言葉のはづみで悪口も

申しとたが……考へれば有難いと思ふ、御勿體ないと思ふんだ。……だから今年は、御最負の皆様への最後の心盡しだ。僕は、今年は腕に撚りをかけて、是非とも上等品をつくらうと……。

正吾 お父つあん、よく言つてくれました。よく言つてくれました。

甚吾 いや。……ところがなあ正吾、喜んでくれ、今年の芽の出具合はとても素晴らしいぞ、芽も多い。しかも柔かだ。みんな雪のおかけさ。今年は何年もない大雪だつたからなあ。

正吾 さうですか。それは良かったですね。……さあ、さうなると、私達もうんと腕を振はなけりやならんぞ。

利吉 さうですとも、實は今日は、私もお父つあんと同じそんな気がしたもんで、見て下さい。

(洗ひかけの空瓶を指して)先刻から瓶洗ひを初めてたんですよ。

正吾 なーんだ、お前瓶洗ひをやり出したんか。しかし片手で瓶洗ひは伸々骨だらう、ハハハ。

利吉 なーに慣れますとも。私達の疋棟に、迫撃砲でやられて、両手とももぎとられてしまった戦友が一人居たんですがね、その戦友は足で字を書く練習を初めたんですよ。それが終ひには、一人前の右手で書く他の戦友達と結構おつかつ位になつてしまつちやつたんです。

正吾 その意氣だ。その意氣でやつてくれ。工事が許可になつたとしても急いで精々秋蠶上り頃が、關の山だらう。今年の荷出しは充分できる。ねお父つあん、今年は利吉が加つてくれて一家三人だ。三人揃つて腕を振つて、最後に、分印の一等品をひとつ送り出さうちやありませんか。

甚吾 さうともな。さうともな。

正吾 あ、お父つあん、一家三人と言へば、……家の嫁御もいよ／＼定りましたよ。

甚吾 (乗り出して)なに、嫁御が、そ、さうか。……お前も遂に決心がついたか。この話ではお前お父つあんを随分手古擻らせたからなあ。……(マサ枝の姿をふり返り、その顔を見て)さうだつたな、マサちやが来てゐたんだつたな。餘り話に夢中になつて、おまんのゐることをすつかり忘れて居つたわい、ハハハ。

マサ枝 (面を伏せる)

正吾 しかし、お父つあん、私ぢやないんですよ……。

甚吾 な、なに？

正吾 私はこの通り、一匹一人前の身體です。利吉は右手を失つて、不自由な身體だ。而も榮譽ある傷痍軍人です。利吉がまづ先に嫁を貰ふのが、順序です。

甚吾 そ、それもさうだが、しかしお前……。

正吾 私は三年間、ヂイツとこの日を待つて居たんです。ね、お父つあん、これだけ言へば、もう何もかも分つて下さると思ふ。マサちやは利吉の嫁です。利吉の嫁御になつて貰ふんです。

利吉 兄ちゃん！

マサ枝 (再び顔を掩つて、泣き出す)

甚吾 さうだつたのか。……いや、分つた、分つた。正吾、僕はお前にほんとに頭が下るぞ。……

……利吉……。

利吉 ハイ。

甚吾 お前は良い兄ちゃんを持つて、仕合せだなあ。

利吉 ハ、ハイ。

甚吾 マサちや、さあ何も泣くことはない。何もかも、みんな目出度いことづくしだ。さあ、涙

を拭いた、拭いた。

マサ枝 ハイ。

村會議員の大瀧と、五郎衛門が汗をふきく、急ぎ足にやつてくる。この二人は、正吾と一緒に役場へ行つて来たのである、二人とも、まだその支度を解かずにある。

大瀧 やあ、甚吾のお父つあ、お目出度う。

甚吾 お、これは旦那さん方、今日は又大役を、御苦労さんでした。

五郎衛門 御挨拶を言ふのは、こつちの方さ。みんな正吾さんのおかげだ。何にしても目出度

い、目出度い。

利吉 お目出度うございました。

大瀧 お、これはおつちやん……偉い話になりましたわい。もう兄ちゃんから話は聞いたでせうが、近々縣廳から技師さんが来て下さるちゆうとな……。

利吉 さうですつてね。

大瀧 何ぞ増産増産ちゆうて、喧しい時だから喃……いや役場でも村長初めみんな大變な喜び方です。おかげで、地元の儂等も男前を一枚上げさして貰ひましたわい、ハハハ。

五郎衛門 その寶の山を目の前にしてゐながら、正吾さんから口の酸っぱくなるまで説きつけられる前までは、そんなこと夢にも考へたことがなかつたんだからな、いやはや、お恥しい次第です、ハハハ。

大瀧 技師さんが来てくれれば、もうこつちのもんだ。素人が檢分したつて、正吾さんのお説の通り、(沼の右手を指して)あの崖を破つて、朝日沼へ水を落す段になると、わけない話だからな。……いや正吾さん、儂等は改めて、おまんにお禮を言はなければなりませんわい。

正吾 そ、そんなことあるもんですか。

五郎衛門 どうして、どうして。……時に正吾さん、儂等は今二人で手別けをして、役員連中に夫々連絡をつけて来たんだが喃、今夜は早速臨時部落常會だ。農休中だから、人集めにはもつてこいさ。今日の事を早速報告し、併せて今後の細々したことを相談せにやららん。此の際、

村中の者から禪の紐をしつかりと、締め直してもらはんことには、何せこりや大工事だから喃。……勿論お上から補助のある事は受合だが、と言つて肝心の村の者の禪の紐がゆるんでゐたんぢや、お上に對してお申譯がない。……。

甚吾 そ、さうですとも。

五郎衛門 そこで正吾さん、何と言つてもおまんが今夜の立役者だ。元青年團長のおまんが、まづ若い者の心をぐつと一しめ、しめめつけてくれれば、後はもうこつちで引受ける。ひとつ威勢のいいとこ、頼むでね。

正吾 承知しました。今夜の常會には、家中で第一番に馳けつけませう。

五郎衛門 大瀧さん、時に先刻の話ね、御まんからひとつ……。

大瀧 うん、さうだ喃。(甚吾に)なあお父つあ、今も五郎衛門さんと道々話して来たんだが、今夜の常會では、そのなんだ、おまんに家のまあ生活保證つて言ふのかな、その事も皆の相談にかけるつもりでゐるんだ。

甚吾 生活保證？

大瀧 生活保証つて言ふと、具合が悪いども……つまり、なんだ、この沼を埋めることになる

と、おまんがこれまで辛苦してやられてきたじゆんさいが駄目になる……。

甚吾 ハハア、旦那さん、そのことですかい。それだつたら眞ツ平だわね。僕は御承知のやうに
一徹者だから、一旦心にかうと定めたら最後、挺子でも動かない人間だ。それだけは旦那さん
方が何と言はれてもお断りだ。初つから判然さしておいた方がいいからな。

正吾 大瀧さん、そのことだつたら、今、家のお父つあんの言はれた通りです。村から借りて居
た地籍を村へお返しするまでのこと、生活保証の何んと、そんなこととんでもない。

五郎衛門 さうむきになられたんぢや、困るなあ。この工事の爲に、おまんた家の今までの生活
の道が途絶えるんだ。それを頬かむりしてゐたんぢや、この村にや人は居ないのかつて、他村
から指されても、口が開かないことになる……。まあまあいい。今ここでいざこざ言つても初
まらない。結着は、今夜の常會にかけての上だ。ハハハ。

猶も大瀧達が甚吾や正吾と掛合をしてゐるところへ、マサ枝の母のシヅがやつてくる。

マサ枝 ハイ。(歸りかゝる)

甚吾 おつと待つた。マサちや。……ちようどいい折だ。肝心のおまんに行かれたんでは話にな
らん。(正吾に)なあ正吾、どうだらう、目出度ついでに……。

正吾 さうですね。

シヅ 今日は、沼の家で、今しがた使ひ走りの木太郎さから聞いて、駆けつけて来やしたが、お
目出度うござんした。兄ちゃんも随分骨折られたが……よかつたです喃。(大瀧たちを見て)
お、こりや旦那さん方もお揃ひで。

五郎衛門 宮下の家のおつ母ささ。それで今夜は早速部落常會だ。聞いたか喃？

シヅ ハイ、聞きやした。家のお父つあんも虫齒はらして、今日は町へ出かけたんだが、歸つた
ら早速傳へますわね。

甚吾 さうか、そりやいかん喃。ちつとも知らなかつたが……。

シヅ なーに、虫齒のたぐひ……。 (マサ枝に) マサや、お前歸つて、そろ／＼夕飯の支度にかゝ
れや。

甚吾 旦那さんが居たつていいぢやねか。

大瀧 何だ喃、内緒話なら、僕等はこのへんで御免するが……。

甚吾 いや、御免どころか。……ね、大瀧の旦那、おまん合憎この場と來合せた災難だと思つて……。

大瀧 (ニヤ／＼笑ひ出して) 何だね、うす氣味が悪い喃。

甚吾 おまんからひとつ、出雲の神様をおねがひしたいんぢやが……。

大瀧 何、出雲の……そ、それはまた幸先がいい喃。讀めた、つまりこのマサ枝さんと、ここの家の……。

正吾 そ、さうなんです。

五郎衛門 あ、さうですかい。そりや又現代式で良い。なに、かう言ふことは、明らさまに手つとり早い方がいいんだ。それにおまんとマサ枝さんの事は、村中誰でも、どうして早く式をあげないんだらうと、傍の者が却てヤキモキしてゐた程なんだから喃。

甚吾 いいえ、それがその……。

正吾 さあ利吉、マサちや、恥しいことはない。村會議員の大瀧さんが、お仲人になつて下さるんだ。こんな結構なことはないぞ。

利吉 兄ちゃん！

マサ枝 おつ母さん！ (何故とも分らず、忍び泣き出す)

正吾 大瀧さん、御覽の通り……自分で弟のことを言ふのは可笑しいが、利吉は立派な青年です、而も榮譽ある傷夷軍人です。どうか貴男のお仲人で、右手のない弟を、このマサ枝さんから末長く面倒みて頂くやうに、しつかり結んでやつて下さい。

大瀧 (感動して) そ、さうでござしたか。いや、分りました。分りました。私のやうな者の仲人では御不服でせうけれども……喜んで、この結構な縁組の橋渡しをさして貰ひませう。

甚吾 (新たな感動をかくしおはせず) な、何分よろしくお願ひいたします。

正吾 (シツに) 宮下のおつ母さん、お聞きの通りです。おまんもお父つあんと御相談せねばならんでせうが……。

シツ (心につよ／＼うなづく) 家のお父つあんが、この結構な縁談にな、なんで反対いたしませ

う。……それより兄ちゃん、俺は、俺は、なんにも言ひますまい。……傷夷軍人の利吉さんから貰つて頂くとは、マサはどんなに幸福ですやら。どんなに幸福者しあわせものですやら……。……（泣き出す）

利吉（感きはまつて）あ、兄ちゃん！

間――。

遠く、ラツバの音が聞えてくる。

正吾（沼の彼方を見やりながら）ほう、青訓の連中だな。今日は薬師様へ、農休の行軍に出かけた筈だが、もう歸つて来たのかな。（しづかに振りかへつて）さあマサちや、おつ母さん、どうも女の人は困るなあ、すぐ泣き出したりして。目出度い門出だ。さあ笑つたり、笑つたり、ハハ。

（再び沼の彼方をキツと覗め）さあ、みんなで大仕事だぞ。この沼をつぶすんだ！ 田圃を拓くんだ……。

利吉（兄の正吾に竝んで、沼を覗めながら）やりませう！ 兄ちゃん、俺もやるぞ……。

夕日にかはる頃ほひ。

沼一面……新緑を背景に涼々たる夕日。

マサ枝の一際はげしい、忍び泣の聲のうちに

――しづかに暮。

耕地分合以前

新潟の驛前の、長岡屋といふ商人宿で一泊して、二番の長野廻り上野行の列車にのつて長野の驛へ着いたのは、午後の三時近い頃であつた。

矢崎はそれから、役所の退けないうちにと、走るやうにして縣廳へ駆けつけたのである。昔の農學校時代の恩師であり、今は縣農會に出てゐられる徳山技師を訪れるためであつた。ところが、もしかと思念した不安が不幸にも當つて、技師は松本へ出張してゐるとの、室の人の言葉であつた。何しろ朝に夕に縣下中を飛び歩いて、文字通り席の温るひまのない人なのである。手紙か電報を出しておいたらと思つたのだが、矢崎の性來からして、假にも恩師をひつつかまへて、何日何時にお訪ねするから御在廳ねがひたいとは、どうしてもできかねる相談であつた。いくら滿洲から歸つてきた身だと云つても、それに甘えて——縣農會の大切な役目を守つて寸分の暇も惜く、縣下の農事のために飛び歩いてゐられる人に對して、それは余りに不遜すぎることはないか。

幾日来、連絡船の中でも、新潟の宿でも、先づ何はさておいてもすべては恩師である徳山技師の御指導をうけてからと、それをひたすらに望み、氣負ひ立つてゐただけに、訪ねる人が居ないとなつた失望も大きく、恐らくそれが顔色に出たのであらう。技師の不在を告げた若い、國民服を着た技手らしい人は、徳山技師の出張日定をめぐつてくれて、

「あ、今夜はかへられますよ。かへられますよ」

「かへりますか。……それはどうも……」

矢崎は、いつべんに生氣をとり戻した形であつた。

徳山技師の家は、前に二三度訪れたことがあるのである。善光寺裏の、箱清水町と呼ばれてゐる、裏にすぐ山を背負つた閑静な住宅地の中にあつた。四年振りに善光寺へおまゐりをして、近くの蕎麥屋で腹をこしらへると、日の暮れるのを待ち兼ねて、矢崎は勝手知つた技師の宅を訪れたのであつた。

——村が荒れてゐる。この悲しい報告が、この夏、遙々矢崎達の營む満洲王家屯の開拓村へもたらされたのである。團長樋口氏の計ひで、原村と満洲の分村との有機的なつながりを圖るため

に、毎年交替で幾人かづつ信洲へかへることに定めてもらつてあるのだが、この年の夏、原村富士見村の御射山といふ部落の出である町田龜治といふ次男坊の青年が、嫁を貰ひに歸村しての土産話に、この村の山野が荒れてゐるといふ事實が報告されたのであつた。

それまでにも、そのことは故郷からの便りの端々に、

「人手が足りなくて……」

と、間々見えたこととて、開拓村の誰しもは、心に秘め、或ひは遂に口に出しまでして、ひたすらそのことを危惧してゐたのであつたが、それがこの御射山部落出の龜治の言葉で、動かすことのできない確定的なものとなつてしまつたのであつた。

——昭和十三年の六月、矢崎の郷里である信州諏訪郡富士見村といふ村からは五十二戸が富士見村開拓團として、満洲國濱江省木蘭縣の王家屯へ渡つたのであつた。この分村計畫は翌年の十四年には二十戸、十五年には二十八戸、つづいて十六年には實に百一戸といふ多量の家族が一度に移り住んでゐるのである。その上、云ふまでもなく、幾十人の若者が聖戰の野に、銃をとつて立つてゐることであらう。——この勞力不足から押して、それは無理からぬことだを片付けてし

まへばそれまでだが、しかしそれは單に富士見村一村の興廢といふやうな小さい見解からでなしに、もつと大きい見地から、寸時もゆるがせにはしておけない問題だ——といふのが、開拓團の團長樋口隆造氏はじめ二百一戸全體の動かせぬ意見であつた。

長野縣下、否全國幾十幾百ヶ村 開拓團を送つてゐる原村が、今、ともすればこの問題に行き悩んでゐるのではあるまいか、と矢崎は危惧するのだ。すれば、今富士見村へ立ちかへつて、この問題を立派に克服できたら、いや絶體にできる、——それは、をこがましくも、開拓團を出してゐる幾多の原村への何らかの示唆になりはすまいか。

矢崎は、樋口團長の指命によつて、と云ふのでなしに、自らこの大役を買つて出て、遙々滿洲から信州へ歸つてきたのである。渡滿以來四年を経た、昭和十六年の十一月であつた。

矢崎は、富士見村の大平といふ部落の出身で、隣郡の伊那といふ町の農學校を卒へると、村の小學校の高等科の兒童の農業の教師をつとめ、傍ら村の農事指導員として十五年近く村の農事指導に當つてゐたのである。團長樋口隆造氏は當時現職の村長だつたのだが、身を以て第一回五十二戸の開拓團を率ゐて渡滿された偉丈夫であつた。そんな關係から、矢崎は勢ひ渡滿後は樋口團

長の女房役といつたところで、此の歸村にしても亦、彼を措いて他に適任者がゐなかつた、とも云へるのである。

——矢崎は徳山技師の宅を訪れて、恩師の書齋である八疊の間に通されると、つつましくいけられた螢の火のやうな火鉢の火を相手に、無闇と煙草の煙をふかしつづけながら、恩師のなつかしい聲音にひたすら聴き耳を立てて居た。この山國の十一月の夜空に滾々とひびく、窓下を流れてゐるさゝやかな水音も、四年振りで聞くなつかしい音であつた。——村が荒れてゐる。かうして落着いてゐる時間は、それが寸刻の間にも、その焦燥に似た、又それを敢然はじけ飛ばすムラ／＼とした力が總身に漲つてくるのだ、と思ふと、王家屯の開拓村の人々の顔が一つ一つ、こと新しく眼底に浮び上つてきたりするのであつた。

徳山技師の歸つてきたのは、既に十一時近い頃であつた。恐らく終列車であつたのであらう。

矢崎は師の聲音と聲を耳にすると、主人の上つてくるのが待ちきれずに、自分から階段を駆け降りて、茶の間の襖をガラリと開けてしまつたのである。

「先生、私です。矢崎です」

「なんだ、君か。とても珍しいお客様だと云ふんで、誰づらと思つただぞ。實際、珍しい。……また、なんで、来るなら来るで手紙でも電報でもよこしておかないだに。」

「いや、どうも……」

手こそ握らなかつたが、矢崎はこそばゆいほどの嬉しさに込み上げられてしまつて、なつかしい恩師の、下唇の厚い、鼻の丸い、日焼した顔をシゲ／＼と見上げた。何時になつても、昔の農学校の先生時代と少しも變らない、屈託のない、そして頑健な顔形であつた。

「先生も、いつもお元気で……」

「ありがたう」

技師も同様、この教子の逞しい總身を改めて見上げ見下して、

「君も随分肉づいて來たね。滿洲の風に吹きさらされると、かうも變るのかな」

技師は、ハハハと大きく聲に出して笑つて、この教子の肩と云はず腕と云はず、撫でまはしてやりたいほどの愛情をその眼の中に見せたのである。

「樋口村長は、お元氣かい？」

「え」

矢崎は又、晴々とした笑顔を見せて答へた。全幅の尊敬と信頼とを、樋口氏なるその人に示さうとする心みちた笑顔であつた。

「村長は大したものですよ。義勇軍の若手連中が手を舉げて參つてしまふほどの張りきり方です。ね」

團長樋口隆造氏は、皇農精神を身を以て實踐し、まつ先に村民の陣頭に立つて渡滿した貴い先驅者の一人なのだ、矢崎はもとより、二百一戸の拓土の人々は、みな一様にこの樋口團長を父と仰ぎ支柱とたよつて、希望の村を建設してゐるのである。顎のゆたかな、眼の毅然とした、堂々たる體軀の、見るからに挺身村長といふ名にふさはしい壯年村長であつた。

徳山技師は和服の帯をしめながら、

「君んとこの奥さんも、お丈夫かい」

「え、この頃ではすっかり滿洲の女になりきつてしまひました。秀司のていふ滿洲ッ兒も一人新しくもうけました」

「ほう、それは目出度いな」

「先生、環境に順化つて段になると、どうも男より女の方に團扇があがるらしいですな。家の奴など、遠目で見ると、どことなしすつかり満洲女になりきつて来て居りまして、自分の女房ながら、あれあれとよく見直すことがありますだに」

「ほう。それでなくちやいかな。矢崎君、一番大切なことはそれだぞな。氣候、風土、習慣……まるつきり變つてゐる土地へもつて行つて、内地の生活をそつくりそのまま移さうとする。そこに摩擦が起てくるのは當然だに。先づ、目の色が變つて來なくちやいかな。さう云へば、先刻から君の目の色を注意して見てゐるのだが、君の目の輝きもどことなし満洲人つぽくなつてきたぞ」

「いや、どうも先生……」

「笑ひごとぢやない。是非さうなくちや、いけないのだに」

技師はゆつたりと茶撫臺の前に安坐をかくと、四年振りで見ると昔の教子の顔を、さう云つてニヤニヤ笑ひながら見詰め出したのである。

この二人の應待は、まるで傍らに夫人なきが如しと云つた態の、裕達なものであつた。

學校を出てから後も十五年間、矢崎はこの、土そのものの中に全身全靈をぶち込み、そしてさうした激務の傍ら、瞬時も研究と勉強を怠らうとはせぬ徳山技師には全幅の尊敬をよせて事々に謙虚な教示をうけて來てゐたのであつたが、富士見村開拓團の渡満當時、殊更に何くれとなく面倒を見てくれたのは、實にこの徳山技師であつたのだ。縣廳のある長野市と、南信の彼の村とは汽車でも祐に四時間近くはかゝるのである。其處をこの徳山技師は、そのことのために態々幾度往復してくれたことであらう。……

技師は、急に思ひ到つたらしく、

「それはさうと矢崎君、又なんで急にひよつこり歸つて來ただい。何か不幸でもおきただかい？」

「え。……」

矢崎は、ニコリと笑ひで濁すより他に手がなかつたのである。胸いつばいに詰つたものに打負かされて、矢崎にはどこから話の糸口をほどこいていゝか判らなかつたのであつた。——矢崎は惟ふ。今自分が村へかへつて行つて、

「皆さま、しつかりしておくんなあ」と、村人に口を切ることは、

「折角、わし等が遙々滿洲へ渡つて苦勞してゐるつちゆうに」

と、自分達の勞苦と氣構へとを押賣することになるかも知れない。しかし、そんな逡巡は、今の場合考へてゐるときではないではないか。自分達はよい、しかし第一それは、現在身を挺して聖野の矢弾の中に立つてゐる村の幾多の若者に——いや矢崎達も遙か滿洲の地で幾度となく聞いたのである。そしてその都度、形ばかりの氏神様の祀ではあつたが、その前へ開拓團全部の人々が集つて慰靈祭を嚴かに執行してゐるのだ、團員の兄に當る人も居た、伯父に當る人も、倅に當る人も……それ等護國の御柱に對して、何として顔向けができやうぞ。

——矢崎は若い憚んだ心で、今その警鐘を打つて打つて打ちまくらうとして、遙々滿洲から歸つてきたのである。全身、身震ひのする思ひであつた。そして彼のうち鳴らすその警鐘の音を幾百里の遠い空、王家屯の開拓村の畑のさ中で、家々の窓邊で、樋口團長はじめ二百余戸の人々が、心耳をすませて聞き出さうと、耳かたむけてゐるのではないか。

「先生……」

暫く口籠つたのち、矢崎は長い旅行でクタククになつた國民服の膝を一膝のり出すと、その心のありたけを、恩師に對して心おきなく一息にまくし立てたのである。そして何の笑ひともなくニタリと目元を崩すと、やをら節くれだつた掌について、頭をベコリと下げたのであつた。

「何分一つ、又よろしく御指導と御援助をおねがひ申します」

徳山技師は、矢崎の熱つばい語調の長い言葉の間中、眞顔にひきしめてゐたのをやうやうに崩すと、云つた。

「さうか。さうだつただかい。……んだが、まあまあ、急かなんでもいいだに。今夜は夜つびて君のこれからの計畫案やら、又向ふの土産話を聞かせて貰はずよな。ちやうど今夜は馬肉のお土産を貰つて來ただに、滿洲では豚肉はふんだんに喰べれるづらが、馬肉は珍らしいづら。君の來るのが虫が知らせたか、まだ手つかずの一升壘も二本からとつてあるぞ」

「それは、嬉しいことござりますな」

奥さんがまだ寝もやらず、仕度してくれた肉鍋をつつき、四年振りで喰べる馬肉のなつかしい

味と匂ひに接すると、矢崎は故國へかへつた思ひが、始めてほの／＼として來たのである、中へ煮込んだ黄シメジの味も別なら、日本酒の色と舌觸りもたまらなかつた。

「どうだ、美味いづら？」

「え。何とも……」

「家の英一の奴も、時々馬肉の味を思ひ出す、と云つて書いてよこすだに。どうも信州には、馬肉の味は切つても切れぬものらしいなえ。ハハハ」

「御息も？」

徳山技師は矢崎にグツと盃をさすと、チラツと窓外へ目を遣つた。山國の晩秋の更けた夜空を滾々としたせゝらぎの音がひとすぢ、走つて居た。

國みなが、大きい營みの中にあることを生々と事新しく感じ、そして恩師の子息が北支の虎林縣の守りの任務についてゐられることを聞かされると、矢崎はこの恩師夫妻に對して殊更に身近なものを感じずはゐられなかつたのであつた。

「さうでしたか。それは御苦勞さまですな」

矢崎は、師へ、夫人へ、そして窓外の星空に向つて丁寧な頭を下げた。暫く話が杜絶えたが、徳山技師はツと口を開き、

「矢崎君、どうだ……共同作業もよからず、共同炊事も結構、共同播種もいい、綿羊の飼育又大賛成……しかし、それにもう一步を進めて、耕地の交換分合、ここまで導いてゆく元氣は出ないかね」

「え、耕地の分合？」

矢崎もここまでは考へてみねば、樋口團長にしる開拓團の人々にも言傳てはゐなかつたのである。否、思はぬではない。矢崎とて、二十年間をひたすらに農事の指導にさゝげてきた身である。なんでそれを今日まで思はぬことがあつたらう。唯それは現實の問題として余りに遠く、手を染めてみるよすがもなかつたのである。

平野地で耕地整理のできるやうな處なら、この問題も比較的樂にはこべるかも知れぬであらう。いや、それにしても事、耕地の分合となつたら、その土地々々の先達者はこの問題のため、どのやうに苦勞に苦勞を重ねたか知れないのだ。それが信州のやうな山國にあつて、一枚の

田と田の土地の高低が甚しく、耕地整理などの及びもつかないやうな處にあつては、どれほどの困苦が横はるか知れないのだ。――

「先生、耕地の分合ですか？」

徳山技師は、盃をピタリとおいて、

「さうだよ。……君ならばやれる、必ずやれる。いや、富士見村の衆ならばきつとやりとげらるるだに」

矢崎は、眼をつぶつて、この師の雷のやうな言葉の尖きを、突差に嚙みしめてみた。

「耕地の分合……」

と、再び心の底で呟いてみて、それから改めて師の顔を見上げ、師の次の言葉を慎妙に待つて居た。

徳山技師は、同じ言葉をくり返した。

「君ならばやれる。富士見の衆なら必ずやれるだに。いや、これはどうでもやつてもらはねばならぬ。……」

富士見村の衆ならば――既に三百何十年の昔、寛永年間、松目澤部落は今日の謂ふ分村計畫を斷行して出来た部落ではないか。松目といふ部落は、矢崎の部落である大平とは土橋一つへだてた隣り部落であつた。當時は僅かに四戸、これが時の諏訪藩の家老諏訪美作守、圖書なる人の持説にまつ先に賛同し、耕地面積のきはめて尠い木ノ間といふ部落を捨て、いやその耕地を原村の人々にゆづつて、今日の地積へ移り住み、開拓して出来た部落ではないか。

栗生新田といふ部落も亦、分村によつて新しく出来た部落であつた。

矢崎の出である大平部落の地籍には、貯水池があり、これが今日部落全體二十八戸の灌漑にどれほど大きい貢献をしてゐることであらう。これも既に安永年間の昔、村人全部の打つて一丸となつた共同作業によつて出来たものだと言ふではないか。……富士見村には血が通つてゐる。幾百年來脈々として、敢然土に挺する貴い精神が貫き通してゐるのだ。――

矢崎の瞳には、新しい感情の炎が燃えるやうに輝き出して居た。

「先生、やつてみませうか？」

「やるか」

と、徳山技師は一語だけ云つた。

二人の言葉が杜絶えると、善光寺の御堂で啼く鳩の聲が、深閑とした夜空を傳はつて、かすかに聞えて來た。

徳山技師の言葉は、生々しく熱して來た。五十年の生涯を只土にささげてきた人の言葉であつた。

「土は百姓の血だ。肉だ。一寸の土地、否一粒の土塊にも幾百年來の父祖の血と汗が滲み出てゐる。息が通つてゐる。誰がこれを手放せるものか。そこだ、日本の百姓の貴さと偉さは……」

「……………」

矢崎は、酔ひも手傳つてゐたのであつたらう。師のうれしい、力強い言葉に思はず眼頭があつくなつてきたのであつた。

「しかし、耕地の交換分合と云つて、それはこの貴い精神を微塵も殺すのではないぞ。この精神をこそ更に更に大きく生かすのだ。殺して而る後に生かすのだ。この信州のやうな山國にあつて、土地の交換分合——これほどの大きい努力の補充が亦とあらうか。しかし、悲しいかなまた

何處でもやつてゐない。いや、今云つた土地へのはげしい執着から出來ないのだ。……と云つて、こつちの山のてつべんに桑畑があるかと思へば、あつちの谷底に田圃がある。その一つをとり上げてみて、田圃の水見をするにしたら、追肥一桶かつき上げるにしたら、……どの田もどの畑もみんなてんでんばらばら、大變な勞苦だ。……この手間をふり向けたら勘くとも一束の草は余計に刈れる、一貫目の桑は余分に摘めるのだ。……」

「……………」

「そしてその中から、堪らない痛さにヂイツと齒を喰ひしりながら大手術を斷行して、その中から増産し得た一粒の米、一粒の黍、……なあ矢崎君、貴いぢやないか。増産と云ふ文字には血が通つてゐる。貴い皇農精神が一區劃一區劃、隈から隈まで貫き通した、頭に推し戴いて伏し拜みたいほどの貴い文字でなければならぬ。亦これあつてこそ初めて、逞しい、聖なる神兵が續々と土の中からとび出して行けるのだ。……わかつてくれるね……」

「ハイ」

矢崎は、改めて師に盃をグツと突きつけた。不遜なくらゐぶつきら棒な、直情的な盃のさし方

であつた。——やります、必ずやりませう、と誓ふ決意のほどを重ねて示した無言の誓ひと感謝の心とであつたのだ。

十二時は疾く過ぎてしまつて居た。奥さんが寢室へ退き下つて行かれた後、技師は自らお勝手へ行つて一升壺を提げてくると、ドカリ安坐をかき直して云つた。

「もう一杯やらう。……しかし矢崎、これは仲々容易なことではないぞ。耕地の交換分合、と一口に云つてしまへばそれまでだが、この長野縣下殆んどまだそれを耳にしたことがない。いや全國でも、これを完全に成し遂げた村はいくつと云つて數へ立てるほどしかないぞな。何せ、お百姓の生爪をはぎ、場合によつたら兩手兩脚まで切斷しようといふ大變な切開だからなえ」

師の言葉は、ともすれば軽々に、これから村へ飛び歸つて忽ちにそれを村人に突きつけやうとはやり立つてゐた矢崎の心を、グサツと一抉り、抉り取つたのである。矢崎は、二三歩ツツと後退りをし、そこで再びギユツと丹田に力を入れ直したのであつた。

「大變な仕事だと思ひます。慎重に慎重を重ねてかゝります。……しかし、きつとやり遂げますだに。いえ、この仕事を成し遂げないうちは、私は一年が二年、二年が三年……王家屯へは決し

てオメ／＼とは歸りましねえ」

「その意氣、その意氣、要はただ君の熱意と努力だけだ。及ばすながら、この私も出来るだけの助力はする。必要とならばいつ何時でも、手紙でも電報でも云つて寄越し給へ。何はさて措いて、すぐに飛んで行くだに」

この一夜、矢崎とこの徳山技師との談合でとり定めたのは、先づ最初の手初めとして、所有權にまで立ち到らない耕作權だけの耕地分合であつた。

——邸の隣り合つた同志、朝晩、飯が少し炊き不足だと云つては、お隣りでおまんまちいつと貸しておくんなあ、と井ばちを持つてぢきにかけて、お隣りでお湯がたつたでお入りなして、と云つた親身以上の仲が、こと一度土のことになるや、隣りの家の垣根のサワラの枝が五寸でも自分の家の邸地へ伸びてきたと云つては目をむき、一尺伸びて來ようものなら、あんな枝ぶつた切つてしまへと、家中の者が血を沸すのだ。畑の隣り合つた同志、畑の畦が二寸三寸、いや一寸でも喰ひ込みでもしようものなら、それこそ畑の胴まん中で、作物も糞もあればこそ、取つ組合

の喧嘩をおつ始めることぐらゐ朝飯前の事であつた。かうなつなら最後、區長が飛びつけて來やうが村長が仲へ入らうが、容易には仲のをさまりさうもない幾月幾年越しの確執となるほどの大騒動となるのである。——この百姓ならでは到底理解しかねる土へのはげしい愛着と尊敬の念に對して、いきなり所有權までの耕地分合などを説き出したら、それこそ恐らく忽ちに村拂ひをも受けかねまいことになるだらうし、第一それは餘りにも無慘な、たとへてみれば、大寒の眞つ最中に、素ツ裸にした身體にいきなり頭から眞水をぶつかけるやうなことになるのである。夫づ手初めに、その肩にそろ／＼と水をかけ、兩手兩脚から次第に水に馴染ましてゆかねばならぬ。

「耕作權の耕地分合……」

矢崎は白々と夜の明ける頃まで眠りもできず、善光寺の御堂の屋根裏で啼く鳩の聲をききながら、一人心中でそれを叫びつづけてゐたのであつた。

二

矢崎は、徳山技師の厚いもてなしにひき止められるまま、お晝近くの列車で長野市を發つた。

松本、岡谷……と四年振りできく懐しい驛々を過ぎてくると、車窓には次第に高原の秋氣が濃くなつてきて、計算にすれば僅かに丸三年餘りといふことにしかならないのだが、矢崎にはその自分の郷里の山景と高原の深い青い秋空とが、思はず、ホウ——と見改めずには居れない美しさと鮮明さをもつて、彼の行手に擴つてきたのである。

身體いつばいに生々しい熱情が沸り、頭いつばいに眞新しい設計圖がくりひろげられて來るのだ。汽車が富士見驛にはまだ二つある茅野といふ驛をすぎたあたりには、矢崎はもう座席につくねんと座つてゐることが苦痛になつてきて、やをら荷物を棚から卸すと、もう車橋に立つてしまつたのであつた。

やがて、矢崎はなつかしい故郷の富士見驛に下りたのだつたが、彼は暫しどうしてもその驛の歩廊を立ち去ることができずにゐたのである。四年前の六月、茲から連絡港の新瀉へ向け下りの汽車に乗つた時、小學校の生徒から青年團、婦人會……殆んど村中の人と云つていいほどの人々が手に手に日の丸の旗をうち振りうち振り、萬歳を絶叫して、華々しく彼等第一回分村の拓士の晴れの首途を見送つてくれたものなのであつた。

今、十一月、蕭々とした高原の秋氣の中に、神々しいまでに澄んだ八ヶ岳の山容が毅然として東の空に聳え……人なきか、故郷の山河聲をひそめ、肅然として彼を迎えたのである。幾人、幾十人の若者が聖戦の野へ發つて征つてゐることであらう。思ふにつけても——矢崎は自分の計畫を矢も楯もなく實現しなくては居れぬ熱意を新しく感じたのだ。故山を荒れさして、なんで前線の兵士に顔向けが出来やうぞ。

この勞力不足に抗して、村人はひたすらに土と四つに取り組んで唯だ耕しに耕してゐるのだ。その眞情と現實の様が、伏し拜みたいほどの實景となつて、今生々と彼の眼前に現れてきたのである。しかし、悲しきは、ふる里は新しい合理化された形をとり入れることを心附かずにゐる。思はずにゐるのだ。それをとり入れさへすれば、この悲しい現實は立派に、忽ちに除去できるのではないか。否、除去せずにはおかぬ。——

矢崎はふと、誰か自分の方へ駆けよつてきた氣配に、ツと背後をふり返つた。この驛の驛長の三井氏であつた。

「やつば、基秀さかい。どうもさうらしいとは思つたが、何せあんまり突飛なもんだでない」

「いや、どうも。しばらくでござりました。驛長さまもお元氣で」

驛長は、帽子を左手に、禿げ上つた頭をツルリと右手で撫でて、

「若い者がみんな出かけてゐて下さるで、わし等もチヨロツコイことは云つて居れましねえ。んだが、お前エさまはよくお歸りなしたなえ」

此の突然な矢崎の歸村を審か^いる氣配が、その眼にありありと見えたのである。尤も、前にも書いたやうに、樋口團長の心厚い計ひで原村と分村との有機的な連絡を圖るために、毎年一人二人づつ交替に歸村しては往復はしてゐるのだが……。

矢崎は、え、とお茶を濁し、それから驛長室へ強てといふ驛長の言葉を斷りかねて、番茶の接待にあづかつたのである。

「んでも、村へは何にも通知はしてなかつただかい」

遙々と滿洲からかへつてきた、謂はば歸還勇士にも等しいこの矢崎に對して、出迎へ一人出ぬのは不都合きはまるではないか、と執固くこの老人の語調であつた。この村では、滿洲へ渡つてゐる拓士の家には、出征家族と同じやうに「拓士の家」と書かれた名譽の木札が夫々その厩口に

かゝけてあるのである。

村へかへることは役場と主家へは知らせてあつたが、日も時間も知らせてなかつた。村の人を騒がせたくなかつたし、それよりは第一に、縣廳へ寄つてどうしても徳山技師に會つてかへらう、場合によれば二晩でも三晩でも長野へ泊つて師を待たう肚だつたので、したがつて役場へも生家へも日時は少しも知らせてはなかつたのであつた。

この驛長の三井氏は、矢崎と同じ大平部落の人で、家は奥さんから子供さんから一家を擧げて百姓をしてゐるし、驛長自身非番の日には金筋の入つた帽子と服をかなぐり捨てて、まつ黒くなつて百姓をしてゐるのである。次男の源治君と云ふのは、隣り村の本郷といふ村の小學校で先生をしてゐて、應召されたのであつたが、その源治君が除州作戦で華々しい戦死を遂げられたことの通知を受けて、矢崎達も開拓村のささやかな神社で慰靈祭を行つたものなのである。今亦長男の利吉君が應召最中なのだといふ。矢崎は、肉附のいい、饅饅としたこの驛長の姿を眼のあたりに見て、頼もしい限りのものを感じたのであつた。

この僅かなる戸数の村から二百一戸といふ大量の家族を滿洲に送つた後、幾十人といふ若者を

聖戦の野へ捧げてゐる中、その後を一手にひき受けて誰も彼もがまつ黒くなつて唯黙々と業を營んでゐる姿——之を聖と云はずして何と云はう。それを思ふと、矢崎は一刻も猶餘してゐられぬ衝動に似たものを再び感じさせられて、スツクと腰を上げた。

「どうも、御馳走さまになりました」

「なんのなあ。それちや今夜はノウウ〜と生家の疊の上でお休みなして。お父ツさまたちもさぞ喜ぶづらで」

驛長の好意で、手荷物は後でとどけて貰ふことになつて、矢崎は遮仁無仁、役場への道をいそいだ。

鐵道線路に沿つた道をひとすじに一軒ほど進むと、役場への道はその陸橋の所から左へ曲つて丘にかゝるのであつた。都會地の人は、これを「高原の村」とでも呼ぶのであらう。——亭々たる白樺の木が落葉松林の中にうち交り、ふと足を停めると、文字通りの絶景の地であつた。既に眞白く雪をいただいた槍、穂高の諸峯が折からの夕陽を浴びて西空に聳え、霧ヶ峯、鷲ヶ峯へかけての山々も一目であつた。そしてこの部落のすぐうしろには、入笠山のなだらかな山脈が、

この部落々々の朝夕を愛でさするやうに、柔らかな線をゑがいて横たはつてゐる。この入笠山には、矢崎も度々、所要で又は氣晴しによく登つたものだつたが、入笠山牧場といふ牧場があるのである。

渡満後一二ほど経つた頃でもあつたらうか、矢崎も心に落付きとゆとりが出てくると、誰しもが一度はきつと罹るといふ郷愁病といふ奴に、つい不覺にもとりつかれてしまつて——その折、眼をつぶるともなくつぶると、今かうして眺めてゐる、この形容のできない美しい、なつかしい山景が眼前に髣髴として浮んできたものなのであつた。

「ほう！」

矢崎は、思はず溜息に似た吐息をもらした。それほどに、この村は素晴らしい自然の還境に恵まれてゐるのだ。

矢崎は、この近くの出身である森岡汀川氏といふアララギ派の歌人に、その素朴な、そして内に土への燃えるやうな情熱をひめた歌を買はれ愛されてゐる農民歌人でもあつたのである。このことは、ともすれば荒まふと走る開拓團の若い人々に歌の道を教へて、それに濡ひと憩ひをあ

たへるのに非常に役立つてゐるのであつた。

役場へつくと、名取村長はじめ十人近い吏員が、みんなまだ居残つて居た。大抵は皆見知つた懐しい顔ぶれであつたが、中には一人二人見知らない人の顔も交つてゐた。

壯年村長樋口氏の渡満後、これに代つた名取村長は、もう七十近い人であつた。役場の書記を振り出しに、區長、消防組頭、村會議員といつた具合に、もう名譽職を四十年近くつづけてゐる人なのである。今度の村長は三度目であり、この人などはもう疾くに樂隠居をきめこんでゐる筈の人なのであらう。しかし、驛長の三井氏と同様、

「チヨロツコイニとなぞ云つちや居れねえわい」と、その瘦軀を押して毎日恪勤してゐるのである。

「村長さま！」

矢崎は、この村長の見馴れた白い鬚の深々と生えた横顔を見ると、思はずさう大聲で呼びかけてしまつた。そして、まるで自分の生家へ歸りついたやうなこみ上げてくる嬉しさで、ツカツカと板敷の上へ上つたのである。

「今、戻つてめいりました」

あちらこちらから懐しいいくつもの聲が同時に起り、椅子がガチャ／＼と鳴つた。

「やい／＼、基秀さだぞや」

「来たなえ！」

「どうして、汽車の時間を知らせねえだい。お前エさまの歸エることは、樋口村長さまからも御通知があつたが……汽車の時間はおろか日にちさえ知らせねえなんて、水臭エぞ」

と、早々に難詰の矢を放つたのは、モンヤ／＼の不精髭に極度の近視眼鏡をかけた、戸籍係の五味といふ吏員であつた。

矢崎は、ただ微笑をもつてこの好意に應へるしかなかつた。矢崎は在村當時、この五味吏員と机を並べてゐたのであつた。この五味吏員の長男の義一といふ今年十九になる青年は、此の年、青少年義勇軍の一人としてやはり王家屯へ渡り、今は矢崎と起居を共にしてゐるのである。

「義の野郎もいろ／＼とお世話さまになります。夏の内少し具合エが悪いと云つてよこしただが、どんな按配エづら。今は元氣になつたと云つてよこしてはあゝるがなえ……」

「五味さ、義さならちつとも心配エはいらねえ。まだ向ふの氣候に馴染まなかつたもんで、まあ寝冷みたいであつたんだづら。若い者は我武者羅だで、つい無理をしてしまふでなえ。今はしても元氣だ。すつかり體軀ができてしまつて……お父ツさまに渡してくれつて、あづかつてきた品があるだに。荷物は直き後から來るでねえ」

「さうかなえ。どうもいろ／＼と」

古びた硝子窓、煤けた天井、小川射山翁の書……農事指導員として幾年か過したこの室は、殆んど昔のままだつた。矢崎は挨拶がすむと、事務の娘が立つてくれた自分の昔の椅子へ、ヤレヤレと聲を出して腰を投げ、その長い脛を突き出した。

「基秀さ、今夜は早速だぞやい。お前エさまが歸エるちゆうもんで、一二升チャンと用意しておいたぞ」

五味とは机を並べてゐた以外に、亦矢崎とは飲み友達でもあつたのだ。

「少しあゆつくりしてゐられるだづら、向ふも收穫は終つただづらで……樋口村長さまから、一月位はおゆるしが出ただかい」

と云つたのは、兵事係の小林である。

矢崎は、ニヤ／＼と笑ひながら云つた。

「いんにや、一年だぞやい」

「一年？」

皆も、此奴歸る早々冗談をと、初めはウストラ／＼と笑ひつづけてゐたのである。

——矢崎は實際、このことの實を見るまでは半年が一年、一年が二年でもここに踏み止まる心で来たのであつた。王家屯の方のことは、「二年が三年でも……」決して氣にかけるなど、樋口團長をはじめ全村の人々が出發のとき激勵してくれた言葉だつた。事は單なる富士見村のことではないと、矢崎は心に氣負ひ立つてゐるのだ。思ひ上りを赦してもらへるならば、これは拓土を送つてゐる長野縣下、否日本全國の村々の當面の生々しい問題であると、それだけに矢崎は異状な決意と自負とを持つて遙々と海を渡つて来たのである。——信州の山村の、殊にかうした高原の村であつてみれば、自分等が今滿洲の廣漠たる土地を相手にやつてゐる大農主事は及ぶべくもない。せめては新潟、秋田といふやうな廣い豊かな平野を持つた土地ならばと思ふのだが、根

が、土地の高低のひどい、猫の額ほどの耕作面地しかもたぬ文字通りの山村のことではないか、それになぞらへることすら難しいのではあらうけれど……しかし今はその困難を克服して、たとへ僅かであつても、それに接近させること以外には、この事實を征服する手段はないのである。又それを斷行することによつて、それは立派に成し遂げ得られると確信した上での熱情だけを土産にひつつけて、彼は王家屯からやつて来たのである。——間もなく土産として着くであらう中耕除草機カルチベーターもその一つであつた。

——土地の荒れると云ふことの原因の一つとして、金肥が仲々手に入らないと云ふことを村の衆が口にするすれば——紫雲英といふ素晴らしい滋養物のとり入れを、まだ／＼この地方では愈つてゐるのではないか。この栽培は、彼が在村當時口を酸くして説いて廻つたものであつたが、まだ／＼金肥謳歌の昔の夢がぬけきらないのである。今度こそ、やがて富士見村中の田圃といふ田圃を、この花の眞赤な絨氈で埋めつくさしてやらうと、彼は胸をつまらせてゐるのである。しかし、何せ輕井澤にも劣らない寒さのはげしい土地なので、冬期間折角の紫雲英の芽が凍しみにやられてしまふ危険は充分にあつた。それを防ぐために薬を敷くのである。この敷薬は

又そつくりそのまま堆肥に還元せられるのだ。彼はこの栽培法を在村當時から既に實行し、又村人にも説いてゐたのであつた。

——刈草はふんだんに恵まれてゐるではないか。高原の村、といふ平野の耕地にたち較べた不得點は、一方において刈草に恵まれすぎるほど恵まれた得點を持つてゐるのである。村中で、草を刈つて刈つて刈りまくるのだ。間もなく、中耕除草機といつしよに着く筈の緬羊は、この無限の堆肥を産み出させる、現在の數の尠い牛馬の力強い増援部隊である。反當り三百貫の堆肥は、どうしても確保してもらはねばならぬ。

——緬羊は、輕井澤と竝んで凍みのはげしいこの土地では、柔かい豊かな、毛が房々と生えるであらう。この毛をお國のお役に立てるならば、これは亦この土地にびつたりと合つた重要な副業の一つとなるではないか。

——彼は又自分の家を、彼は次男として生れたので、生家とは邱つづきの畑地に新しく一戸を構へ分家してもらつたのであつたが、そして彼の渡滿後、それは丸々と空いてゐるのである。

これを先づ自分の大平部落の共同炊事場、部落共有農具の置場として提供するのである。ここ

で、田植時と收穫時の部落二十八戸全部の煮炊き一切を行ふのだ。

松目部落は、やはり王家屯の拓士となつてゐる矢左衛門の家を提供してもらふことを、本人から赦しをもらつて來てゐるのであつた。

——リヤカーでも荷車でも、場合によれば荷馬車でも自由に通れる農道を切り拓くのだ。

——大平部落の貯水池は、これを尠くとも今の倍の面積には擴げやう。そしてこれは、單に大平部落だけの獨占物でなしに、松目部落の地籍へもその恩恵を施さねばならぬ。こと、水となつたら、他部落どころか田圃の隣り合つた同志の間にさへ、今でもともすれば見られる鋤鍬でさへ振り廻しかねないやうな忌はしい事實は、このことからでもそれを除去できる導火線となせないものか。若しこれを實現したら——今を溯る百五十年、安永年間の昔に部落民全部の貴い共同作業によつて出來たこの池も、新しい意味をもつて新しい時代に豁如として浮び上つてくることになるではないか。

——今こそ村の衆から新規時直し、一様に立ち上つてもらはねばならぬ。村を荒らすどころか、まだまだ田を起すのだ。畑を拓くのだ。大平にしても松目にしても、入笠山麓の地味豊かな

黒土の原野を、まだくふんだんに持つてゐるではないか。

——耕地の交換分合、彼は先づそれを最初の企てとして、一番手近な自分の部落の大平と、それにつづいた松目部落とを對象に斷行させやうと思ひ練つてゐるのだ。この二部落が成就すれば、他部落、御射山、原ノ茶屋を入れた十ヶ部落もこれに倣つてくる。富士見村がこれを斷行すれば、これは諏訪郡下一帯に、筑摩へ、伊那へ……それは春先の野火のやうに、べら／＼と燃えうつて行くであらう。

さて、大平、松目の二部落がよしやそれを斷行したとして、その面積を他地から云はれる段になれば、丸々それを算盤に入れてみたところで、大平が高々水田十六町五段、畑地が三十七町歩、松目にしてからが水田が僅かに十三町六段、畑が二十七町歩……新潟や秋田、山形と云つた地方の一戸で一町二町、はては三町、四町と云ふやうな大作りをするところからみれば、大平、松目とも大同小異、僅々田圃の耕作面積が一戸當り六段足らず——さうした大百姓のところから見れば、ほんとに苦笑にもひとしい僅かな計算にしかならないのである。しかし、今矢崎が望むのは、そして縣農會の徳山技師が涙を浮べてさへ力説したのは、その量でなくしてその本質なの

だ。はげしい痛さをヂイツと怵へながら、根づよい傳統精神に大切解のメスを入れ、その美しい貴い母體を更に強く、大きく、深く立ち上らせるところの「戦ふ日本」の新しい農村を更生する、その精神と努力の偉大さに無限の價値が存するのである。……

——矢崎は、今度の歸村の理由、計畫抱負、昨夜の縣農會の徳山技師との談合のいくさりを、短刀直入一息に喋りまくつたのだつた。

この古ぼけた村役場のただつ廣い部屋全體を見る見る生々とした生氣が押し流し、異狀な嚴しさが漲り渡つたのである。そして、矢崎が語り終つた刹那、

「よし、やらさあ！」

と、一室の沈黙を破つて第一番に椅子から立ち上つたのは、矢崎と兄弟のやうにしてゐた五味戸籍係であつた。

矢崎も勿論、叱咤するなぞといふ思ひ上つた感情などは、微塵も持合せてはゐなかつたのである。又語られた相手、村長にしる助役にしる同僚誰一人として、矢崎のこの言葉を歪んでとるやうな者は一人として居なかつたのであつた。この場合の、双手を舉げてといふ形容は、唯一言、

「戦つてゐる日本人」といふことから出る以外に、何があつたであらう。勝たなくてはならぬ。一粒でも余計に米をとらなくてはならぬ。一枚でも余計に桑の葉をふやさねばならぬのだ。……それ以外に、今の日本の百姓に何があらう。――

矢崎は、實の親父に面と向つて喋言る氣安さで、名取村長の太い白眉毛の、艶のいい顔を見上げて云つた。

「村長さま、どうぞござりませう、わしをひとつ、經濟更生主事にしてもらへますまいか」
名取村長は、銀煙管の雁首を二つ三つボン／＼とつづけ打ちにし、うす笑ひを見せながら云つた。

「いいともな。いんにや、お前エさまからどうでもこの大役をひき受けてもらはざあ、誰が出来ずよ。……よし、わしもひとつ、元氣のいいお前エさまの後について、村の衆を説き伏せて廻らず。こりや、どうでも村中の衆から一勢に立上つてもらはねえちやならねえだぞ」

それで、役場の意向はすべて一致したのであつた。

丈の短い柳澤助役が、古びた背廣の上衣を机の上へかなぐり捨てて、立上つた。

「皆さま、どうづら、一つ、ここで手を打たず。明日から、基秀さを先頭に押し立てて、みんなでやらかすだわい。だがこりや、よつぼどしつかりかゝらねえと、仲々の難事業だぞな」

ヨイ、パンパンパン、ヨイイバンバンと、三度爽やかな拍手の音が、古ぼけた村役場の窓部から、晩秋の高原の冷々とした黄昏の山氣の中へ高く高く響いて行つた。

そして、その夜、役場の二階の疊敷の大廣間には、電燈がいつまでも煌々と照り輝いて居たのであつた。

松目部落の公會堂に、松目部落二十六戸、大平部落二十八戸、殆んど全員が集つた。

この地方は乾燥と凍みとで、降雪はすくなかつたが、その代り二寸でも三寸でも降つたら最後、氷板のやうに凍つていつかな消えるものではない。入笠山から吹きおろす西風がこの氷板にぶつかると、そこで風は殊更に凍寒の度をまして、この摺鉢の底のやうな村々を吹きなめすのだ。

シンシンとした寒さが、着古した綿入の絆纏の背中を突き差し袖口を突き上げ、肌身へ通して

くる。老人連が大團爐裡へ薪をドン／＼燵べてはゐたが、五十人からの人間が一どきにあるべくもなかつた。

役場から持つてきた六〇ワットの電燈が點けられたが、二十疊敷からある公會堂の室の隅々へは、その光りは充分にはとどかない。そしてその隅々のうす暗がりの中で、不安と好奇との入り混つた目が、あつちに三つ、こつちに五つと云ふ具合に異様に輝いて居た。

今晚七時、松目の公會堂できん急のご相談があります。各家から一人づつ、主人は必ず出て下さる。

名取村長さまも御出席せられます。

區長

この廻覽板は同じ文句で、大平と松目の兩部落へ廻つたのである。入笠山の炭焼小屋へ泊りこみで出かけてゐる家も幾軒あつたが、大平部落の使番をしてゐる仁三郎といふ親爺が、熊々山までその廻覽板を持ち廻つてきたのであつた。何せ、村長が出向いてくる常會などは、無闇矢鱈

とはないのである。炭焼の連中も早目に山を下つて、皆公會堂へ集つて來て居た。顔を見せないのは、岡谷市のピストン工場へ入つてゐる末の男の子が盲腸炎で腹を切つたとかで、そこへ夫婦連で出かけたといふ松目部落の五郎造と、秋口から神経痛を病み出し今は足腰が立たず、蓼科山麓の親湯といふ温泉へ湯治に行つてゐる大平の彦太の二人だけであつた。この彦太のところさへ、女房のヨシが親父の代理として、數人の後家仲間の中に交つて西側の隅へ塊つて居た。廻覽板には何の相談とも皆目書いてないだけに、そして名取村長が直々に加はる常會と云ふだけに、殊更に緊張が、又一抹の不安が重なつたのであつた。

矢崎は歸村して間もなく、十二月八日、——あの日本人として未來永劫忘れることのできない大東亞戰爭布告の朝を迎へたのである。そして此の集りは、昭和十六年が暮れ、相つゞ皇軍の戦捷のニュースと、國民の異狀な決意と緊張とで湧き立ち返つてゐる昭和十七年正月早々の夜のことなのであつた。

常會開會前の村人の話題の中心は、勿論今夜の集りへの詮索ではあつたが、又當然、次々に發表されてくる南方の戦果についての驚嘆やら評定やらであつた。

「利一さ達も、きつとマレーだぞやい」
 と、昨秋秋應召したばかりの利一を悴に持った龜作親父に、皆の目がそそがれる。利一は働き者で利口者で、おまけに應召前までは大平部落の青年團長をしてゐただけに、仲々人氣があるのである。

「北支の方からだつて、ドシ／＼兵隊が廻されてゐるぞぞな」

と言つたのは、松目部落の源左衛門親爺であつた。源左衛門ところの二番目の晴和は、北支の任務についてから既に二年は経つのである。源左衛門親爺は、入笠山の炭焼小屋から態々下つてきた仲間のうちの一人であつた。源左衛門は、凍傷と炭の粉でぶす黝くさした肉づきのいい顔を電燈の下へつきつけて、

「俺家の晴和だつてなえ……」

と、言ひたい顔付であつた。

「そりや、さうづらをなえ」

と、源左衛門親爺の自慢顔に合槌をうつてやる手合もでてくる。

松目の吉藏のところの正次は、整備兵ながら飛行隊勤務だ。大平の孫右衛門とこの孫市は、海軍の志願兵ではないか。

「俺家の孫だつて、今頃は南洋の胴まん中で暴れてゐるぞな」

と——平素から無口の孫右衛門はかうした集りの席では殊更に固く口をつんで一言も喋らなかつたが、唯ニヤ／＼と笑ひつづけてゐる彼の目は、さう自負してゐるのである。彼のところの孫市は水雷艇〇〇に乗り込んでゐる、今では二等兵曹なのだ、……

榮譽ある子弟をもつた誇らしい顔が、數へあげてみれば、この五十人の人々の中にはいくつも見えた。その中で二人、何となしさびしく見えるのは、大平の松吉親爺と、おたねの顔であつた。松吉のところの保市は昭和十三年の第一次の開拓團の中の青少年義勇軍の一人として、率先して王家屯へ渡つた覇氣ある頼もしい青年であつたが、保市は翌年の夏には名譽の應召を受け、北支の前線に立ち黄河の渡河戦で華々しく散華した御柱の中の一人であつた。

おたねは、亭主の玉助が亡くなつて以來三十そこそこから後家を守り通し、六段の田地をいくれの土も手放さず、三人の子供を育て上げた氣丈者だつたが、男一人女二人、その男一人の仁藏

が事變當初上海戦で村でまつ先の英靈となつて靖國の御柱に祀られて以後は、二人の孫と嫁をばげまして、五十を疾に越した今でも男盛りの親父衆にも負けない健氣な働き振りをみせてゐるのである。

松吉親爺は堪りかねたやうに、

「俺家の保市もなえ……」

と、聲に出した。

クアラムブルが一月十一日、遂に陥落した捷報がこの山奥の人里をも湧かせてゐるのだ。保市がもしこの作戦に出てゐたのであつたら、どんなに喜んだことであつたらう——と、松吉の陽焼した鼻の大きい顔が、外を凝視してゐる。

おたねは、松吉のすぐ右脇に、女數人の溜りの中にゐたが、松吉の言葉に誘はれたやうに、シユンと漢を盲編の筒つぼりの袖ですすり上げた。丈の短い小柄な、しかしまだく血色のいい氣丈者らしい顔付であつた。

外はサラ／＼と風に鳴り、月が小學校のある丘の空に冴えかへつてゐた。人笠山嵐なのであ

る。

——定刻の七時近くなると、あちらこちらの話聲はビタリと歇んだ。

「村長さまが態々出向いてくる相談つて、何づらなえ？」

と、五十人の瞳が、再び模索を始めたのだ。

圍爐裡でくべる落葉松の枯枝が、時折バリ／＼とはげしい音を立てて弾ぜ返り、殊更に村人に不安の念を驅り立たせた。

——耕地の交換分合、矢崎はそれを曳き出す時期を慎重にねらつてゐたのである。輕々に切り出したら、とんでもない尾鰭が次第についてしまつて、それこそ收拾のつかない事になつてしまふのだ。この事を彼は幾度経験したことであつたらう。

村が荒れてゐる、と云つて、歸村當時、彼は野良の實地檢證すらして廻らなかつたのであつた。それは、切傷の痛さに生々しく棒をさし込むことではないか。路傍で傷つき斃れ苦悶する人の傍らを、なんで啣へ楊子懷手で通りすがれるものか。

耕地の交換分合、このことは、その時期のくるまでは斷じて口外すべからず、と役場でも農事

實行組合でも固く誓約したことであつた。そして此の夜の村長の出馬となつたのである。何と云つても村長の一言は鶴の一聲であつた。矢崎達が各戸々々、のべつに説いて廻るのは、又それをどうしてもやらねば到底形式だつた通りいつべんの會合でなぞ、村人の心は挺でも動くものではない、と見るべきなのだ。すべては村長の第一聲を待つてからのことである。

誰一人、この夜の集りの目的を知らない。唯一人、矢崎の兄の彦市は弟の基秀から事の概略を聞かされて知つてゐたが、その彦市は、この夜の集りの意味を知つてゐることを憚るやうに、北側の一番隅つこで、青年文庫の戸棚のところ背を凭せかけ、膝を兩腕で抱へて來がけから殆んど口を切らなかつた。

——定刻十分前に、名取村長は公會堂へやつて來たのであつた。雪袴はつけてゐたが、着物を絆纏だけは青味がかつた色の柔か物で、それが村長の白い顎髯にとても良く映り、やはり村の立者としての貫録を充分に備へた身ごなしであつた。農事實行組合長、大平、松目の兩區長、それに經濟更生主事としての矢崎、農事指導員の古山が隨つた。

村長が見えると、座は急にざわめき立ち、居すまゐるを直す者、煙管を胴らんへしまひ込む者：

やがて座は急にしんと静まり返つてしまつたのであつた。

「今晚は。どうも皆さま、おつかれのところを態々お呼立して、御苦勞さまだつたなえ」と、村長は一座に向つて頭を下げ、それから窓際の座蒲團の席へついた。

松目の區長の作太が立つて、國民儀禮を終ると、つづいて名取村長が、机とてない公會堂の古疊の廣間へ立ち上つた。冬になるとおこる神経痛のために、足腰はふたしかであつたが、語調はしつかりしたものであつた。異状の努力と熱を入れた結果でもあつたらう。

「皆さま、今夜はどうも御苦勞さまでした。殊に山から態々下つてきて下された炭焼の衆には何とも申譯ござりませぬえ。さて、儂は初めにまづ、皆さま方に御禮と御祝を申し上げねばなりません。皆さま兩部落の衆の仲よしな力強い共同作業で、大平の貯水池の擴張工事が立派に出来上りました。これは、これから富士見村が進むべき増産の道に、貴い先鞭をつけてくれましたことと申さねばなりません……」

村長は、ポツリと語を切つたのである。

自負とも感動ともしれないざわめきが、見る／＼一座を撫でまわしたのだ。——矢崎は、收穫

のすつかり終つた頃を見計ひ十一月中旬、その隆々と盛り上る抱負の第一矢として、先づこの貯水池の擴張工事の説得にかゝつたのであつた。これを完成すれば、共同作業と云ふ有機的な交流作用によつて、耕地交換分合への力強い培養體が出来はすまいか。前にも書いたやうに、大平部落の山寄りの出外れに、長方形の千坪余りの貯水池があつた。安永年間の昔に、部落の先祖達が早魃に備へて掘り上げたものだといふ。

入笠山の麓から二筋三筋細い流れが流れ出してはゐるが、これで大平、松目、原ノ茶屋といった各部落が曳水をせねばならぬ段になると、心細い限りなのである。松目部落にすれば、この貯水池を持つた大平が羨望の的だつたのだ。松目には、大平のやうに池の堀れさうなうまい平地がない故もあつたが、と云つて原野を切り拓いて貯水池をつくるまでのこともせず、そのまま放任されてゐたのであつた。

矢崎はこの貯水池の擴張工事を説き廻つたのだ。そして、この貯水池の功德を松目部落にも願けてやらうといふ彼の突飛な提唱は、貰ふ方の松目部落は双手を舉げて賛成であつたのだが、與へる側の大平には、仲々どうして難色が濃く漂つたのである。何せ安永の昔から——といふ強い

誇りと執着の垣根がすつかり根をおろしてしまつてゐて、

「基秀さ、何となえ、池の水を松目の奴等にわけてやるだといえ」

と、誰彼なしに目を剝くのだ。十一月の半頃から矢崎はこの説を起したのであつたが、口を切つてしまつたところ、事は全く意外な方向へ走つてしまひ——それは、大平部落では單にてんから不賛成といふのみに止まらず、これは矢崎自らの肚からでなく、松目の奴等が剛愎の皮を突つ張りやがつて、とさぐりを入れて目を剝き出し、となると松目は松目で、

「何を吠裂くだ。そんな沓ツたれた腐れ水など、一滴だつて液の大事な田圃を穢してたまるけ
エ」

と、反目するのだ。

雨か、風か、雲行一つでどう發展するか知れない不安な空氣が西部落を押し包んでしまつて……

……幾夜眠れぬ夜をすごしたことであつたらう。目は窪み、頬はこけ……霜深い高原の村の深夜の往還を、矢崎の長身の、狂ほしいまでの姿が毎夜々々駈け摺り廻つて居たのであつた。

——昭和十六年十二月八日、日本人にとつて未來永劫忘れることのできない。